
大帝国にもしあの提督がいたら.....。

アメリカ海軍最強！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大帝国にもしあの提督がいたら・・・。

【Nコード】

N4514V

【作者名】

アメリカ海軍最強！！

【あらすじ】

酒飲んだ勢いで、前に書いていた作品を消して、新しいものを書き始めていた。

基本その日の夜に酒を飲んだか飲まないかで更新が決まるので、かなり不定期になると予想。

それでもいいという方だけが読んでください。

気がついたら何故か転生してエロゲの大帝国の世界に来ていた。

しかも、某最終鬼畜冷淡冷酷ドライアイスニトログリセリン男に憑依のオマケつき。

所属はガメリカ共和国 駄目じゃん。

とりあえずキング・コアと東郷に殺されないように頑張るとある幸薄提督のお話である。

現在史実ルート終了しました。新しい章を書いています。

はじめに

ありのままに（ry

いつもの通りエロゲやってティッシュをまた妊娠させたあと、そのまま寝ようとしてたんだ。

だが、次の日目覚めてみると、

「知らない天井だ．．．．．」

OK落ち着け、冷静になれ、まだここが良くある転生だとか憑依だとか、召還系のファンタジーのはずがない。

あれだ、良くあるノンレム睡眠で、起きたように錯覚してここなんだ夢の世界なんだ。

「いいや。夢なんかじゃないさ。ここは現実、まあ一言で言って可能性の向こう側の世界かな。」

突然部屋の中に鳴り響いた声に、俺は首を左右に振ってその主を探す。

しかし、部屋の何処を見ても、寝ていたベッドの下を探しても、クローゼットの中にも何処にもその声の主を見つけることは出来ない。

「なにをやっているんだい？ああ、君には見えないのか。なら見えるようにしてあげるよ。」

また、部屋の中に声が鳴り響いた。

そうして、視線をベッドの上に移すとそこには……！！

「やあ、始めまして。僕の名前はQB「ティロ・フィナーレ。」ッ
ぶっつ。」

目の前の一見愛くるしくて、それでいて腹の中真っ黒のマスコット
（黒幕）に全力の踵落しを食らわせた俺は全く悪くない。

ベッドのシーツに突っ伏す諸悪の根源を前に、俺は一仕事後のいい
汗をかき、一言。

「悪は去った。これで世界に平和は戻った。」

だが、そうは問屋がおりさない。

汗を拭いていた俺の足元に、丸まった白い物体が転がってきて、ベ
ッドに飛び乗り、綺麗に踵の痕が残るQBだったものを食べ始めた。
シット！！しまった。

こいつは、そもそも一匹見かけたら三百匹はいるGの同類だった。

「全く、酷いじゃないか。無意味に体を壊されるのは好きじゃない
んだ。」

QBだったものを食べ終え、毛づくろいをする新しいQBを見たと
き、俺はほむほむの気持ちが今ならわかる気がした。

「まあいい。さつさと話を済ませよう。君は選ばれたんだよ。」

「選ばれた？なにに、まさか魔法少女だとも言うのか。」

「いいや、違うさ。そんなものじゃない、もっともっとくだらない
実に君達人間らしいものだよ。」

「今の君はいわば、元の世界の肉体から魂を抜き出され、その体に入れた。簡単に言えば憑依だね。それもかなり高度な。」

「ちよつと待て如何して俺がそうなったんだ！！」

俺は慌てて目の前のQべえに尋ねる。

良くある転生でも、この生物？がかかわるだけで途端に怪しくなる。

「決まってるじゃないか。人の魂を結晶化できる僕が、如何して態々君なんかこんな事をしたか。それが僕が叶えた願いだからさ。」

「願ひ．．．．．だと？」

「そうだよ。契約の時名前を言わないように願ったからいえないけど。君はこの可能性の向こう側の世界で生きることになったんだよ。」

「ちよつと待て！！一体全体如何して俺が．．．．．！！」

「さあ、僕に聞かれても答えようがないよ。それは願った本人に聞いてくれ。ま、ここにはいないから無理だけど。それじゃ僕はこれで．．．。」

「おい．．．待てよ．．．．．帰っちまうのか。俺もつれてけよ。」

「残念だけどそうする理由がないし、そもそもこれも契約の一部だからね。君は一生この世界で生きることになるんだそれじゃ、もう二度と合う事がないように。」

そういって、俺の目の前から霞の様に白い毛玉は消えてしまった。

こうして、最悪の事態から始まった俺の第二の人生は、一体どうなることやら．．．．．。

QBが消えた後、俺は暫し混乱し荒れたが、最早どうすることも出来ないとわかっていたのか、とりあえず事態を受け入れることにした。

幸い、部屋にはPCらしきものがあつた。

ネットがあるかどうか分からないが、見た感じ未来的なデザインなのでこの部屋が情報から遮断されていない限り、ネットに繋がらないはずはない。

スイッチを探そうと、手を差し出すと、それに反応して突然起動し始めた。

．．．．．なるほど感応式か．．．．．暗証番号は．．．．．まあ適当に入れてみるか。

そのとき、俺は気がついてはいなかったが、パスワードを無意識のうちにスラスラと打ち込んでいたことを、後になって知った。

よし、とりあえずネットらしきものにアクセスできた。

とりあえずこの世界がどういうものなのか、まずは知ることからだな．．．．．。

転生者ネット検索中

wwwwwwwwこれは酷い。

なんたつて今更大帝国の世界に転生せにやあかんだ。

俺はひとしきり愚痴を言った後、これからのことを考えてた。

まずは、今は第一次世界大戦が終わって数年か、となるとまだ原作まで大分時間があるな。

でだ、問題は此処からだ。

今の俺、というよりもこの体の主だが どうやらアーネスト・ジョセフ・キングらしい。

戦記とか軍事関連ものが好きな人なら知っているはずだ。

因みに言つと俺も知っている。

まあ、某廃人ゲーこと夜を忘れさせる究極の戦略ゲーハーツオブア
イアンからだが。

人格はまああれだwiki先生に聞いてくれ。

とりあえず、主目標を掲げておく。

第一に、この世界が本当に大帝国の世界なら極力日本とは関わらな
い、またはどっかに逃げて戦争を回避。

第二に、仮にガメリカに残るなら残るで、若草会の連中とは距離を
置きつつ、何時でも逃げられるようにしておくこと。特にキング・
コアなんか来たら目も当てられねえ。

第三に、仮に戦争に駆り出されてもいいように後方になるべく置い
てもらおう。デスクワークとか得意そうだしなこの人。

兎に角以上の三点を主眼に当面の行動を行っていききたいと思う。

まああれだ、どのエンドでもいいんで、さっさと平和になってくれ
りゃありがたい。

早速だが一番最初に掲げた目標は早くも崩れそうです。

ええと、私がいた部屋はなんとガメリカ海軍士官学校の寮で、しかも個室を与えられている私は所謂主席なんだそうです。

でだ、極力目立つことをしたくなくて後方に置かれればいいかな？なんて考えてたら甘い。

来年には卒業なんだそうで、周りからの期待も半端ないです。

ええ、こうなるとやっぱりこの頭脳が怨めしいですね。

今から成績落したら間違いなく目をつけられますし変に目立ちます。

仕方がないので卒業まで穏便に済ませようと、頑張った結果・・・

ガメリカ海軍士官学校卒業式、この日、ガメリカ共和国から多くの人々が招かれ、巨大なホールの中、卒業生代表で今年の主席が最前列に座り、誇らしげに校長から訓示と卒業証書を渡されていた。

・・・はあ、まったく何時まで続くんだかこの長つたらしい式典は。

一応式の最中は真面目な顔をしてやってるがこうも四六時中気を張

つては体が疲れる。

ああ、早く終わらないかな・・・・・・・・。

士官学校校長は、壇上で席に座るキングを見ながら、考えていた。

アーネスト・キング

士官学校始まって以来の秀才。

殆どの教科においてトップの成績を誇り将来を渴望されている若きエリート。

ルックスも良く、頭も切れる彼だが、少々欠点がある。

一年前まで人を見下し、冷淡な態度を取って周囲との壁を作り、凡そ軍人には向かないような性格なのだが、しかしそれを補って余りあるほどの頭脳と戦術戦略能力を持ち、機敏に富む彼を失うのは海軍にとって大きな損失だ。

だが、それも杞憂だったらしい。

彼は一年前から変わり始めた。そうまるで別人のように。

以前のよう周囲と何処となく打ち解けない雰囲気は変わらないが、少しずつ、彼と話すものが増えてきたのは嬉しい。

礼儀も正しくなり、以前の様な尊大不遜な態度はなりを潜めた。

まあ、黙って立っていれば中々にハンサムな彼は、それ以降女性にモテはじめて少々門限ギリギリに帰る事がまああったが．．．（まさか基地に女は連れてきていないよな）

しかし全体的に良い方向に変化している。

このまま彼が進めば、本人とガメリカにとってこの上なく良いことだろう。

ん？なんだ校長がこっちを見ているが．．．．．まあ無視するに限るな。

今は式典中なんだ、よそ見しているほうが悪い。

俺は校長が何を考えているのかついぞ知らずに、式は厳かに幕を締め、その後のダンスパーティーとしゃれ込んだ。

まあその時今日は誰をエスコートするかで結構悩んだが．．．．．結局次席の子と一番可愛い子を二人両手に花でパーティー会場へと向かった。

無論、ベッドの上でもその後二人ほど三人で一緒に踊っただけだね。

士官学校卒業後随分と経った。

あの時の校長はもう退役して予備役につき、俺は少将として今現在大西洋方面で新種の航空母艦を率いて訓練している。

これからの時代は航空機だ。

大艦巨砲主義の時代はもう過ぎ、機動力と航続距離に富む航空機こそがこれからの海戦の中心になるだろう。

そういつた考えの元我ガメリカでは特に財界の後押しもあつて順調に研究が進み、今日初の航空母艦を中心とした艦隊が結成された。

まあ、これほど順調なところを見ると、恐らく若草会の連中が裏で結託してたんだろうな。

エイリスなんかは結構いい線までいったが、史実どおり本格的な航空母艦とはならず、結局本土防衛用の巨大要塞みたいな奴にするらしい。

たしか名前は・・・「チャーチル」だったかな。

あのオッサンもここまで出張とは、いやはや有名人の辛いところだな。

話を戻そう。実際に艦隊を作ったはいいが、一体誰に任せるかが問題だ。

従来通りの大砲屋では話にならない。

と、なると一から仕官を育てねばならないが、それまでの間できるだけデータを取つときたいらしい。

そういうわけで、仕官学校時代になんとなく生き残る為に航空機関連のことを研究していた俺に白羽の矢が立ったのだ。

新しい艦隊を任されるにあたって、その後のポストなども安泰なのだが、まあ無難に将官会議へ行きたいなと仄めかしておいたので大丈夫だろう。

将官会議とはつまりはポストにつけなかった将官同士を集めて討議をかわすいわば退役までの名誉職な様な場所だ。

此処に来ること「エリートコースからの脱落を意味するのだが、そもそも親もいなければ兄弟もいない。

女は散々手を出したが結婚はまだしていないから家庭もない。

そんな俺にとってはここは正に最高の環境だ。

戦争が起きても、その頃にはとくに退職しているだろうし、態々こんなところからお呼びが掛かるほどガメリカは人材は払底していない。

俺は、将来退役して年金で何をしようかと薄らばんやりと考えながら、訓練に勤しんだ。

若草会会合。

ブライトンヒルズ、大統領執務室の裏側に作られた極秘の部屋で、この国の新の支配者である女性達の会合が開かれていた。

妙齡の美しく肌つやのある女性たちが、次々とこの国の議題を処理し、必要な決済を行う。

表の政務は大統領に任せても、彼女等の背後組織である四大財閥の利権が絡む問題には必ずといっていいほど今回の会合は開かれていた。

そして今回もまた、とある懸案について会議が行われている。

アーネスト・キング

ガメリカ海軍きつての秀才で、士官学校を主席で卒業後任官し、艦隊勤務を経て事務職に転向。

その後再び艦長職に戻り、駆逐艦艦長から巡洋艦、戦艦、を経て分艦隊司令に就任。

イスパニア王国内紛の際には、邦人保護の下引き上げ船の指揮を取るなど国民への認知度も高い。

軍人としてだけではなく、政治においてもその才能を発揮し、ビンソン計画を実質提案指導した存在として囁かれている。

「なるほど、唯のハンサムだけではなく頭も切れると。前任者がこたわるわけね。」

「で、どうします。今回彼を議題に上げたということは何らかの処置を施す・・・という事で宜しいのですよね。」

「ちょっとまって。話の途中で悪いんだけど、こいつが何かしたの？何もしていないのなら放って置いたほうがいいんじゃない。大体一将官の取り扱いが艦隊司令部の連中に任せておけば済む話じゃない。」

「それがそうでもないのよね。」

「？」

「知つての通り、ガメリカにおいて私達の支配は百パーセントではない。無論これは意図してやっていることであるのだけど・・・。」

「縛りすぎでは不満のため、いずれ手に負えなくなる。それよりも少し緩めておくことで定期的にガス抜きをする。そうやってこの国と私たちは共存してきた。」

「そうね、ノイマンの言うとおり、でも今回はそれが裏目に出たは。」

彼は力を持ちすぎた、今はただの将官でしょうけど、いずれ軍のトップに立っても可笑しくはないは。そのとき私たちに不満を持つ軍人が彼を担ぎ出したら……。」

「それは少し飛躍のしすぎじゃないの？だってそんなことしたら自分たちが一番困ることを分かっているじゃない。」

「そうね、でも一時的にでも彼が権力を握ればそれだけで私達の統制は緩む。軍への統制も利かなければ私たちにとっても大きなマイナスになる。軍の後押しを受けた彼が議員にでもなつて見なさい。今までの私達のコントロールそのものが崩れかねないは。」

「それは判ったけど、ロツクはやっぱり心配性よ。そもそも彼が私たちに反抗的とは限らないし……。」

「貴方、彼の論文を読んで？」

「？如何してそんなものを読まなくちゃいけないの。」

「まあいいは、彼はね危険なのよ。兎に角力を持たせては絶対にいけないタイプ。彼の頭脳を持ってすれば第二の私たちに匹敵するほどの組織を作れるは。」

「！！でも方法は？」

「考えてあるは、彼の能力を利用しつつ私達の利益にもなる話を。」

「本当に上手く行くのロツク？ロスチャとしては早急に彼には社会的な抹殺を図ったほうがいい気がするは。幸い女性関係には事欠かないけど……。」

「それは最後の手段よ。今回は彼に対してもチャンスあげたの。私たちに従うかどうかの……。」

その後幾つかの事案を解決した後、彼女たちは早速自らの組織へと帰り、今後の方針を伝えていく。

こうして、キングが思いも知らないところで、彼は出世街道から外れていったのだ。

艦隊を任されて二年。

その間に殆どを宇宙で過ごしたが、事故や問題などもなく無事に任務を果たしていた。

で、やっと本土に戻ってきたら行き成り艦隊司令部に呼び出されて、

『今直ぐアマゾンに行つて、最近ガメリカ商船を襲っているハニーを討伐せよ』

と、きたもんだ。

まあ、こっちに帰ってきて連日ニュースでガメリカの民間船が謎の武装船に襲われているという報道が相次いでいたしな。

丁度補給に帰ってきた俺に、航空母艦の品定めがてら言つて来いというわけだな。

俺は早速船に戻り、乗組員に全員二週間の休暇とその後の任務を伝えた。

俺も、引継ぎの業務を終え、船を下りると早速街へと繰り出していく。

久しぶりの陸だからな、精々魂の洗濯をさせてもらいますよ。

南米、アマゾン。

つい十年ほど前に発見された新しいこの星域の人が住める惑星には、既に先住民族固有の種としてハニーが住んでいた。

そのため、長らく列強からの干渉がなかった星域であったのだが、それ以外の惑星でも豊富な資源と珍しい物産とで実質ハニーが住む星以外は、殆どガメリカ共和国の植民地であった。

噂ではガメリカの秘密工場もあるらしいが、真相は定かではない。

そのハニー達の王国であるアステカ王国主星に展開した俺の艦隊は――先ずハニーたちに降伏勧告を出すことにした。

「ああ、こちらはガメリカ海軍第二航空艦隊、アーネスト・キングだ。諸君等ハニーは既に包囲されている。無駄な抵抗をやめ、武装解除しガメリカの指示に従うように。」

「提督、そのような内容で彼らが聞くでしょうか？」

俺の隣に立つ、プラチナブロンドの中々キュートなお尻と真っ赤なルージユが特徴の副官が、怪訝な顔をしながら俺に尋ねる。

まあ、たしかに今は本国からの要求をそのまま伝えたに等しいかな、誰だって頭にはくるはずだ。

「ステイツは奴等と話し合いなど求めていないさ。ていよく向こうから仕掛けてくれればこちらも手間が省けるというもの。ま、私たち以外にもドゥービル提督から艦隊を与っている手前、戦闘を一回もしないで引くなんて出来ないよ。」

と、直に艦内にアラームが鳴り響く。

敵本星から艦隊が出撃し真っ直ぐこちらに向かってきている。

俺は他の艦隊も迎撃の指示を出しつつ、今回初の実戦を迎える艦載機に出撃命令を出す。

ハニー達は、その特殊な生態と技術でビームを跳ね返す樹脂を木で出来た船に塗りこんでいる。

そのため、角度によっては戦艦の主砲の直撃でさえ跳ね返された例から、今回は実弾系を中心にハニー艦隊を迎え撃つ。

だが、その必要もなさそうだ。

出撃した攻撃隊は見事敵の旗艦を打ち取り、碌な対空砲火のないハニー艦隊は航空機の前に次々と火を吹く。

俺達はただそれをモニターで見ているだけでよく、戦闘開始から僅か三十分でけりがついた。

残存艦隊を蹴散らしつつ、強襲揚陸艦を降下させ制圧にかかる。

後は、海兵隊の仕事だ。俺は周囲にまだ敵がいなか索敵機に偵察させつつ時間を潰していった。

「提督、陸戦隊から通信が入っています。」

「わかったこちらにまわしてくれ。」

もう占領が終わったのかな。まあ、ハニー共は倒しただけで割れるからな……後々破片が集まって復活するのだが。

「それが……その、ハニー達の代表者らしき人物を確保したのですが……。」

妙に歯切れの悪い陸戦隊隊長に、俺は忘れていたことを思い出した。

ああ、ここにはたしかあの子がいたな。

「兎に角その代表者に会わしてくれ。後はこちらが受け持つ。」

「判りました早速つれてきます。」

おいおい、そんなに嬉しそうな顔をするな。モロ厄介払いが出来てよかったと言っている様なものだぞ。

俺はのぞみがスクリーンに出てくる前に、姿勢とネクタイが曲がつ

ていないかをチェックし、終わった頃に彼女が現われた。

「はじめまして、私はアーネスト・キング。この艦隊の指揮官です。
.....」

あの子のぞみを無事保護した俺は、本国に通信をいれ彼女は一時ガメリカ預かりとなった後、大使館経由で日本へと帰っていった。

帰るときまであの服装は可哀想なので副官に言って適当な服を見繕ってもらい、彼女に渡してから帰らせた。

.....まあ、幸薄不幸メガねっ子少女が何処まで足掻けるか
.....見ものだな。

統一宇宙暦936年

この年俺は晴れて第二航空艦隊司令の任を解かれ、将官会議のメンバーとなった。

まあ昇進して五十代で中将だからいい線だな。

普通ならもう後四年くらいたってからじゃないと昇進できないが、まあ手切れ金としては丁度いい。

将官会議とは一見物々しい名前だが、内容は先のも述べたとおり日陰者たちの集まりだ。

そのため、会議に参加しても各々愚痴を言い合ったり、次のゴルフの予定なんかを確認したりと、正に定年を待つ以外になにもない仕事場だ。

最初五十代でメンバー入りした俺にみな大層同情したが、しかし、いたって平気そうな俺をみて逆に気に入ったのか色々と親切に海軍やそれに関わることを教えてくれた。

内容は殆ど仕官学校時代のものが多かったが、その中には現ガメリカ海軍長官の失敗談や家族との関係、スキヤンダラスなものまで様々だ。

その、合間合間には、国家を転覆させかねない情報が聞けるのは、ここにいる人たちが唯の老人ではなく嘗ては然るべき職場で辣腕を

振るっていた原石の塊だ。

俺は彼等の話を熱心にききまた彼等の信頼を勝ち取っていった。

もし、将来なにかあったときに彼等との交流が色々な所で助けになるはずだ。

この年の世界は色々忙しい。

あいも変わらず中帝国は日本の帝に御熱心らしい。

艦隊を率いての求婚とは恐れ入る。まあ姑である日本軍艦隊がやりわりと断っているらしいが。

ドクツには最近新しい首相が現われた。何でも二十に届かない若いと言うよりも少女といったほうがいいような人物が首相とは．．．
．胸の大きさに総帥になったムッチリーニから始まったファンシズムの恐ろしさか。

エイリスはそろそろ世代交代か。

巷や貴族達の間でもその噂で持ちきりだ。

今の女王には二人の娘がいる。

そのどちらかが継ぐか．．．．．十中八九姉のセーラ・ブリテン
だろうな。妹のマリー殿下は政治で加齢臭激しい貴族達を相手にする
よりも、恋人とのちよっぴり刺激的な青春のほうが似合っている。

問題は北だな。

つい一年前に革命によって古くからあるロシアン王国が倒れ、ソビ
エトが建国された。

昔から閉鎖的な国だったがソビエト共有主義になってから益々それ
が激しい。

内部でどんな政治が行われ、民衆はどうなっているのか、全く聞こ
えてこない。

噂では今大規模な粛清の嵐が吹き荒れているらしいが．．．．．
赤い熊はこの世界でも恐ろしい。

日本との開戦も秒読みとなった。

俺はこの一年後に除隊するつもりだ。

既に中立惑星に土地を買っているし、辞表を出した後除隊金と年金を受け取ってさっさと逃げよう。

この国には世話にはなったが、まあ、これも個人の自由だ。

後は野となれ山となれ・・・・・・・・・・。

ソビエト主星モスクワ

この星では、各地から集まった党幹部による党大会が開かれている。

その、壇上が上がって演説しているのは、まだ幼い少女．．．．．
．．．．．ではなく、一人の髭を生やしたおじさんであった。

名をヨシフ・スターリン

鋼鉄の男の異名をもつこの男は、ロシアン革命期突如として現れ、書記長に就任してその権力を増大させていった。

男の勇ましい声と、振り上げる手とが会場の空気を盛り上げていく。

そして最後の母なる大地に^{ロシアナ}ypaaaaaaaと叫び、男の演説は壇上と降りていく。

その後様々な党幹部らによる報告と、共有主義の各国への浸透率が述べられていく。

「中帝国に対する工作は上手くいっているな。あの毛沢東よりは信頼できるとは限らんが．．．．．」

壇上を降り、幹部らには見えないところに座ったスターリンは報告の内容を聞きながら、指を立て側近の一人を呼び寄せる。

「ウォツカとそれとこの後私はカテーリン様の部屋に向うから先に

パーティーを始めてくれとベリヤに伝える。」

側近はまるで王侯貴族に対するように恭しく礼をし、スターリンは誰にも気づかれないうように静かに立ち上がり、会場を後にする。

ソビエト モスクワ カテーリンの部屋

小さなこじんまりとした小学生の勉強部屋のようなスペースに二人の少女がいる。

一人は薄紫色の髪と強い意志をのぞかせる瞳を煌かせ、何かを一心不乱に紙に書きつけている。

その隣で、おっとりとした雰囲気をもつ少女が、絵本を読みそれを少女に朗読していた。

コンコン

部屋の扉をノックする音で誰かがこの部屋に訪ねてきたのがわかる。

「どうぞ。」

紫色の髪の少女は、机に向ったままそう言ってまた紙に何かを書き始めた。

「失礼します。ゲーペです。カテーリン様今回の党大会の報告書を

お持ちしました。」

切れ長のまつ毛と瞳に長い背中まである髪の毛をした女性が手に持つ書類を静かにカテーリンの机に置く。

「ゲーペ先生、お仕事ご苦労様です。」

金髪のツインテールをした少女は、絵本の朗読をやめ、扉の前に立つ女性ミール・ゲーペに感謝の言葉を言う。

「いえ、これも全てはカテーリン様と共有主義の為。ミーリヤ様にはくれぐれもカテーリン様の事を宜しく願います。」

ゲーペは敬礼して部屋を退出した後、また部屋の中はカテーリンの紙に文字を書く音だけが響いた。

コンコン

しばらく後、もう一度扉をノックする音が響いた。

また仕事を中断したカテーリンは少し不機嫌そうにしながら、

「どうぞ。」

と強く言う。

「失礼しますカテーリン様。」

入って来た男には少々手狭な空間ではあるが、身を屈めてスペースを確保したスターリンは、カテーリンとミーリヤに向かってお辞儀をした。

「あ、ヨシフおじさんだ！！久しぶりだね。もう、帰って来たの？」

ミーリヤが入って来た人物を確認して、嬉しそうな声を上げる。

その様子を若干おもしろくなさそうに見つめるカテーリンはスターリンに向き直り不機嫌そうに、

「党大会の報告ならもうゲーペが持ってきています。なんのようですか。」

と、厳しい目でスターリンを睨む。

「カテーリン様、本日お伺いいたしましたのは今後のソビエトの方針についてです。」

部屋に響く少々訛りのある声は、二人にとってはモスクワに来て久しぶりに聞く故郷の発音だった。

「スターリン、法律で全ての国民は方言ではなく共通語を話すよう

に決まっています。あなたの話す言葉にはまだ訛りが残っていますよ。」

「これはこれは手厳しい。以後気をつけますのでお許しくださいカテーリン様。」

カテーリンの指摘に少々おどけた様におろろするステーリンが面白いのか、ミーリヤはクスクスと笑い出してしまふ。

「ミーリヤ何が可笑しいのですか！！いつてみなさい。」

が、それも気に入らないのかカテーリンが厳しい声でミーリヤを睨む。

だが、傍から見ればいい年をしたオジサンが少女に叱られておろろしている様が面白くて笑っているのを、本人は本気で話していた所を邪魔されたようでこうして意地悪な質問をするのだ。

彼女等彼の身分を知らなければ何とも微笑ましい光景である。

ミーリヤが笑いむきになったカテーリンが頬を膨らませて、その顔がさらにミーリヤの笑いを誘う。

その様子を見て、ステーリンは二人に見えないように手で口を覆いながらクスリと笑ってしまい、気付いたカテーリンがぷりぷりと腕をジタバタさせて癇癢を起してしまふ。

が、元々体が丈夫ではないカテーリンは直ぐに息切れをしてしまい、咳喘息を引き起こしてしまう。

二人は慌ててカテーリンに近づき、ミーリヤは咳で息が出来ないカテーリンを優しく抱いて背中をさする。

スターリンは直ぐに医者を呼びように手配をし、二人のおかげで何とかカテーリンは咳が収まる事が出来た。

その様子にひとまず安心したスターリンは、カテーリンをミーリヤに任せ、

「今日はお騒がせして申し訳ありませんでした。」

と言って部屋を出て行った。

「カテーリンちゃん。本当はそんなにヨシフおじさんのこと怒ってなかったんでしょ？」

ミーリヤはカテーリンの小さな体を小さな手を大きく広げて抱き、優しく語りかける。

「．．．．．ううう．．．．．だって、だって法律で．．．．．。」

「カテーリンちゃんが嫌だったのは昔の事を思い出しちゃったからでしょ。」

涙ぐむカテーリンを優しく撫でながら、膝枕をして寝かしつけるよ

うにミリーヤは言う。

「ヨシフおじさんは良い人だよ？だってカテリーンちゃんのこと理解しかなかった大人の人たちの中でただ一人カテリーンちゃんを助けてくれたんだよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だからもうヨシフおじさんとは喧嘩しないしないでね。」

ミリーヤの問いに無言でうなずいたカテリーンに、ミリーヤは二人でこうして良く歌った子守唄を歌いだす。

そうしてウトウトとカテリーンは瞼を閉じはじめ、そのまま眠ってしまった。

6（後書き）

綺麗な書記長閣下っていいですね。

子供たちの為に血（人民の）で真っ赤に染まる書記長閣下、カッコイイ！！

やあ、誰だと思う？

そう、俺事アーネスト・キングだ。

実は今さっき艦隊司令部に呼び出されたんだ。

なんでだと思う？

実はここ最近世界情勢がきな臭いから我がガメリカ艦隊の次期主力艦が完成するまで既存の艦を改修する事になったんだ。

で、その監督責任者に俺が指名されたわけ．．．．．なんで？

まあ取り合えずこれからは航空機の時代だよな。

さっさと仕事を終わらせて逃げる為に、適当に対空砲火を設置して、艦隊の防空能力の底上げと、各種索敵機器との連動で精度も上げよう。

でも、それだと大砲屋連中が火力が減ると言って煩いんだよな．．．．．
．．．．．いつその事新艦種を作るか。

史実のイージス艦なんかならこの世界の技術でも似たような事は出来る筈だ。

後は適当に船体を引っ張ってきて内装を整えて．．．．．。

こうして三年かかる仕事を改修三カ月、イージス艦設計に一カ月に起工二か月、進水六か月の計一年でやってしまいそのせいかどうもガメリカ議会のお偉いさんの目に止まってしまったのだ。

あの時は驚いたな、なんたつてガメリカ海軍の父とまで言われるカール・ヴィンソン閣下自らが俺の家を訪ねて来たんだから。

閣下のもとで俺はのちに「ヴィンソン案」と呼ばれる三度にわたるガメリカ海軍軍備拡張計画に携わる事が出来たんだ。

閣下の下で働きつつ、いつの間にか俺の心から失われていた海の男としての魂が蘇り始めていた。

将官会議メンバー。

キングを除き全員が部屋に集まった中で彼らは一杯遣りながらある事で話し合っていた。

「さて、今日は来ていただいて感謝する。というのも世間から見放され、やれ無駄飯ぐらいだガメリカ海軍ゴルフクラブだとか揶揄される私たちが、全員が非番にも関わらず集まってくれてうれしく思う。」

本来議長席に座っていた白髪の男は、今日はみな円卓に座り、其々摘みとブランデーを飲みながら話を進める。

「実はな、いま艦隊司令部の方でガメリカ海軍の増強計画を行っているらしいんだが、将官会議から一人、寄こしてくれと言ってきたんだ。」

ロックで割ったブランデーを飲みつつ、周りの反応をうかがう。

みな其々考える風に装いながら、腹のうちは決まっていた。

「閣下、今日は態々そんな話を話す為に集まったので？それにしては少々酒が少ないようすな。」

髭面の男が豪快に笑いながら、暗に素面では話せないといい、皆が皆もう二三杯くらいブランデーを飲んでから話を進めた。

無論これしきで酔うようなものはいないのだが、誰が聞いているかわからない以上、酒に酔った勢いでの話と言う事で皆が皆口を開く。

「そもそも、こんなくたびれた老人が必要なものか。おおかた、長老会議が今になって恐ろしくなったか、それとも自分たちの昇進ぶりを見せびらかしたいだけだろう。肝っ玉の小さい腰巾着共が考えることだ。」

長老会議とは彼らの事を指して言う言葉で、長年ガメリカに仕えて来た彼らは、それだけに貢献も大きく、各議員や社会等に強いつながりをもっている。

若草会や四大財閥程ではないにしろ、事軍に限って言えば彼らを蔑にすることなど、様々な方面から非難が集まる事は必至である。

「まあまあ、押さえて。彼らの弱腰の態度は今に始まった事ではありません。しかし議長、態々愚痴を言い合う為に集まったのではないでしょう?」

「君は相変わらずせっかちな。それだからこんなところに送られてきたんだ。」

男はこれは一本取られてと笑い、

「いえいえそんなことはありませんよ。この国に尽くすことはできませんでしたが、家族との時間は増えました。それでおいこでしよう。」

「酒に友との語らい、家族との時間。これ以上の幸せがあるうことか。碌すつぽも家に帰らんでガキの尻を追っかけまわる連中より遙かにましだわい。」

こうして、他愛のない話から段々と革新に迫ってくる。

「ワシらはもう十分国に尽くした。これからは若者の時代だ、こんなところで無為に年をとるのは惜しい。」

一人がそうポツリと呟き、円卓に並ぶ彼らはみな次ぎ次に頷く。

「決まりだな。彼を推薦しよう、無論その後の事も含めてだが。」

送り出したは良いが、また帰ってきては困ると、何人かの将官が笑

い、それぞれが方策を打つことにした。

「それについては皆にも協力してもらいたいが、何カールの奴には既に話を通してある。後はあ奴がどこまで力を示せるかな．．．」

こうして、キングの知らぬところで、彼は海軍本流に戻る働きがなされ、彼は見事それを掴む事が出来たのだが、将官会議の面々は誰一人として真実を教えない。

自分で気づけと言っわけだ。

ヴィンソン閣下の下、海軍本流に戻れた俺は、将官会議の恩師達に礼を言う暇もなく大西洋艦隊司令へと就任した。

原作ならばドゥービル・ドワイト提督が付く筈であつたのだが、カスタマイズのし過ぎで重量オーバーなのと、余計に空気を食う体が軍で問題になり、陸で艦隊司令部と丁々発止遣り合っているらしい。

その穴埋めに俺を当てたという事が……………。

そういえばガメラ力海軍は正面兵装ばかり充実していたな……………
・潜水艦とか補助艦を作らんのか？

たしか史実では日本はアメリカ海軍のチェスター・ニミッツ提督が放ったガトー級潜水艦による無制限通商破壊作戦により、脆弱な対潜装備しか持たない日本艦は次々と海の藻屑に消えた。

この世界ではレーティア・アドルフが潜水艦を人類史上初めて完成させた人物だが、恐らく基礎研究や同じ事を考えている人物は他にもいたはずだ。

彼等をガメラ力に招き、対潜装備の研究や潜水艦の建造に当たらせれば恐らく四十年くらいにはガメラ力に相当数の潜水艦とその運用ドクトリン、対抗戦術が整う筈だ。

俺は艦隊勤務の合間を縫って論文を書き、それを何度も司令部へと送ったり、ヴィンソン閣下と話し合い潜水艦の必要性和その対抗策の構築を説いた。

閣下の進めたヴィンソン案に協力した俺を信用してくださったヴィンソン閣下は、ガメリカ下院議会で演説し、結果としてガメリカで中規模ながら潜水艦の研究が始まった。

その責任者に俺を押す声が合ったが、そもそも専門外である俺は大西洋艦隊司令勤務を理由に辞退して、代わりに偶々知り合ったニミッツ少将を押すことにした。

USJの艦隊司令部で最初彼と会ったときは本当に驚いたが、しかし、史実の通り大変好感の持てる男で、この国の現状を憂いているという時点でも評価は高い。

その彼と何度か会い、新兵器の開発に携わらないか？と誘いをかけた結果、彼を引き抜くことに成功した。

上手くすれば大戦初期にエイリス帝国より先んじて対潜装備を整えそれをレンドリースすることも出来るかも知れない。

そうなればドクツはエイリス単独で滅ぼせる可能性も出てくるし、大西洋艦隊も太平洋に回せる。

ここがゲームの世界であれなんであれ、一軍人として部下を率いる立場である以上俺は決して手を抜かないようにしなければ。

そつ、全ては俺が生き残る為に。

チエスター・ニミッツ少将

彼と会ったのは始めてではない。

向こうは覚えていなかったが、同期の主席と次席という立場で互いに顔くらいは合わせたことはあったが、その当時の彼は人を見下し、他人の神経を逆なでするような男であった。

私はなるべく彼と関わらないようにしてきた、また彼もそうしてきたのだろう、最後の一年間以外は彼は積極的に人とは混じらず、専ら非番の日は酒とギャンブルに溺れていたと聞く。

任官した後、艦隊勤務を経て順調に昇進し、彼のほうもまた私よりも先に艦隊勤務を終え陸でのデスクワークに精を出していた。

こうして彼とは任官後も接点のないまま、お互いに五十を過ぎ、彼は新設の航空艦隊司令を経て将官会議へと移動し、私もまた太平洋で艦隊司令官職を歴任し、彼とは別の道を歩んでいる筈であった。

しかし、とある不慮の事故で司令官を解任され、私は艦隊司令部本部勤めという窓際職へと追いやられ、日々を暗澹たる気持ちで過ごしていた。

そんな中、彼と再び出会ったのだ。

向こうはこちらを見るなり驚いた表情をしたが、私のほうも驚いていた。

士官学校卒業以来実に三十年以上もの間を経ての再開である。

その日は互いに連絡先を教え会うという事で分かれ、彼が陸に戻ってきたときよく会い酒を飲むようにもなった。

士官学校の頃とは違い、人間的にも丸くなり嘗ての様な刺々しさはなりを潜め、とても紳士的で理知的な彼とは直に打ち解け様々な話をした。

が、士官学校以来の女癖の悪さには少々私の方も癖癖としたがな、彼はモデル事は知ってはいたが、「私に会う日位毎回違う女と会うのはやめたらどうだ。」と苦言を言つと。

「どんな船にも燃料がなければ動かん。私にとってそれは女性であったと言っただけだ。」

と、真面目に取り合つた験しがない。

彼の人間的欠点はさておいて、こうして彼との親交を深め、時に国家の明日を語り合い嘆いたこともあった。

そんな折、彼からある提案を持ちかけられた。

「新種の船の建造に携わらないか？」

という誘いであった。

たしかヴィンソン下議員が議会に提出していた艦隊整備法案に新型艦の建造という記述があったな。

私はそれを思い出し、彼から詳しい話を聞き、このまま冷や飯ぐらいでいいのか？という言葉に突き動かされ、私は彼の提案に乗ることにした。

こうして、私チエスター・ニミッツはガメリカ海軍初の潜水艦隊建設に向けて、その第一歩を踏み出したのだ。

8（後書き）

感想が少ないが．．．やはり二番煎じどころか十番煎じ位な作品では受けないか．．．まあそれもさもありなん。

統一宇宙暦938年

この年の俺は、中立国に逃げているわけでもなく、安全な後方勤務に
いるわけでもなく、複雑怪奇な欧州情勢を鑑み、大西洋艦隊を率
いて公開演習を行っていた。

ドクツ總統となったレーティア・アドルフにより国家を建て直し名
をドクツ第三帝国と改めた事により欧州ではドクツに対して危機感
が募っている。

第一次世界大戦の終戦後、占領されたドクツとオフランス王国の緩
衝地帯、ラインラント星に突如としてドクツ艦隊が侵入するという
事態が起きた。

オフランス王国は第一次世界大戦以後極端な平和主義に偏り、話し
合いによる解決を目指し、エイリス帝国もまた新女王が即位したば
かりで、なおかつアンドロメダ星域において反乱を鎮圧するため遠
征に出ており、首脳部を欠いたエイリスもまた身動きが出来ない状
況であった。

これをあらかじめ予想していたレーティア・アドルフは次にその矛
先をトルコ星とオーストラリア自治国に向ける。

第一次世界大戦終結のさい、ドクツ帝国から分離独立させられた国
家のうち、ポツポランドおよびトルコ共和国、ハプスブルグ自治
国の統一は長らくドクツにとって悲願であった。

それを一気に推し進めようと、内外の人氣と欧州情勢を読み、的確な一手を打ち続けたレーティア・アドルフはラインラント吸収と同じくして、両国の選挙と民意の結果と言う形で両国を併合する事に成功する。

こうして国力と嘗ての領土の凡そ半分を取り戻したドクツは最後の目標としてポツポーランドに狙いを定める。

で、きな臭い欧州から大西洋の安全を守る為に、こうして態々新鋭の戦艦と航空母艦を連れて公開演習なんかを行ってはいいるが．．．
．．．まあ、無駄だろうな。

原作でもアドルフの狙いは世界統一だ。ドクツの復興はその足がかりに過ぎない。

何れ戦う事になるなら、今すぐにでも叩き潰した方がガメリカが一番被害が少なくて済むが、まあ下手にあの魑魅魍魎の欧州に関わるのは得策ではないな。

俺は艦隊の演習をモニターで確認しつつも、頬づえをつき、そんな事を考えていた。

「提督、第二戦隊が次の演習に入ります。ご指示を。」

俺の隣に立つ副官が、透き通るような声で俺に言う。

俺は適当に、

「ああ、そうだな。予定のプログラム通り消化しろと伝える。」

その俺の投げやりの態度に、少しだけ目くじらを立てた副官だが、何も言わずにそのまま俺の言葉を艦隊に伝える。

はあ、もう少し肩の力を抜いてもいいのに。

艦隊に指示を出す副官を横目で見ながら俺はそう考える。

黒い瞳に切れ長のまつ毛に、きりつと結ばれた唇。

女性としては高身長で、すらっとした細い足にキュートなお尻、何よりも目立つのはその腰まである蒼く長い髪だ。

原作でのフリス・ハルゼー程の髪の長さではなくとも、彼女よりも艶のある髪は何とも言えない美しさをもっている。

そう、まんま歌う壁事如 千 72「くつ」「9393」のあの子である。

名前もチ ヤ・キ ギとただガメリカ風に並び替えただけ。

正直言つて彼女が副官として任官してきたときこれほど困惑した事はない。

もしかしたらここは大帝国の世界ではなく、Im@s 架空戦記の世界かと思つたほどだ。

手元のある彼女のプロフィールと、目の前の人物を何度も見比べてしまったのも無理はない。

取り合えず乗艦を許可した後も私は気が気ではなかった。

転生前はミンゴススキーと知られた俺にとっては、ここがどんなところでも世界であろうともちーちゃんと一緒の職場と言っただけで土気はウナギ登りだ。

彼女の方も日系三世というガメリカ国内でも差別される分類に入る彼女だが、ここまで来た実力は確かなものだろう。

原作の朽木・イザベラもかなりの差別をされていたなか、この年で艦隊の副官を務めるのは相当の努力と差別を跳ね返すだけの強い意志をもっていなければできない。

まあ、気が強すぎるせいかな、余り周囲とは馴染めてはおらず、何度か食事に誘うもその度に断られてしまっただけの鉄壁ぶりを誇っている。

俺の視線に気がついたのか、相変わらず半目というか9393モードのチハヤがこちらを見て目で何か用かと聞いてきた。

．．．．．うん、やはりチハヤはクサクサしているよりも笑顔の方がいいな。

具体的には犬耳をつけてふりふりの尻尾に首輪とリードと．．．．．

こうして二人で無言で見つめ合っている間、艦橋内はなんだか微妙な雰囲気になっていたが、妄想している俺と相変わらず無言のチハヤはそれに気がつかず、結局演習終了まで二人で見つめ合っていた。

ガメリカ海軍全提督の経験値500UP
チハヤ・キサラギ提督を任官しました
大西洋の治安向上
資源を5000消費しました

9（後書き）

諸君 私は千早が好きだ。

諸君 私は千早が好きだ。

諸君 私は如月千早が大好きだ。

はるちはが好きだ　ちはゆきが好きだ　ちはやよが好きだ　あずちはが好きだ　ちはまこが好きだ　ちはみきが好きだ　ちはりつが好きだ

平原で　街道で

塹壕で　草原で

凍土で　砂漠で

海上で　空中で

泥中で　湿原で

この地上でありとあらゆる場所で行われる千早のコンサートが大好きだ。

長いので略

．．．．．俺にはまだ千早に対する愛が足りないのかorz

大西洋における演習は成功に終わった。

噂のガメリカ艦隊を一目見ようと集まった民間船や、放送局の報道船、中には

ひょっこり偽装した日本やドクツの軍用艦もありなかなかにぎわいを見せてはいたが、演習が終わるとさっさと帰路について行く。

俺も艦隊の撤収を指示しつつ、今回の演習の総評や気になった点や今後の課題などを伝え、全艦に訓示した後、本国へ送る今回の演習についてのレポートの事を考えながら、艦隊から遠ざかっていく民間船に偽装したドクツ海軍の船を何気なしに眺めていると、

「提督、何か気になるので。停船させましょうか？」

副官のチハヤが俺と同じように真っ直ぐ船を見ながらそう言ってきた。

「いや、それには及ばんよ。まだかの国とは事を構えたくはない。あちらもそうだろうな、演習中も不用意には近づいては来なかった。放っておけ。」

「しかし、我が軍の演習を見られて以上研究されるのでは……」

なおもチハヤが不満そうに言うので、それを可愛いと思いつつも、

「なに、見たければ見せればいい。下手に隠すようなこともないし、

それに戦術戦略は流行り廃りだ。以前のようにもう戦艦同士が真っ向からぶつかり合うとも限らんしな。」

俺はもっともらしい事をいいつつ、さっさと艦橋を後にする。

「閣下どちらへ。」

「後の事は艦長に任せる。私は一足先に休んでいるよ。」

相変わらず不満そうなチハヤの視線をかわしつつ、俺は自室へと戻っていった。

「では、私にキング提督の監視をしろ、という訳ですね。」

「監視とは言葉が悪いが、まあそのようなものだ。彼に何かあったら私に伝えるだけでいい。お前はそれ以外はするな。」

暗い部屋で相手の顔が見えない中、一人モニターの光に照らし出されたチハヤが椅子に座り、彼女を取り囲むように見下ろすように暗闇の中で男たちが更に言葉を続ける。

「この任務は極めて重要だ。今回貴官を読んだのもそのような任務に貴官が適しているからと考えたからだ。」

「ふん、光栄に思いたまえ。日系人であるお前をここまで引き立ててやったのだからな。」

「これこれ余り大ぴろに差別的な発言はするな。今では何かと世間がうるさい。」

「何をいまさら。そもそも奴らの方が後から入って来たのだ。我々に対して”遠慮”するのは当たり前ではないか。」

顔の見えない男たちが、暗闇の中で其々蠢いている中、チハヤは唯一人平然と座っていた。

彼女にとって今回の任務などどうでもいいので。ただ、自らの居場所を自分の力で作る為に軍に入った。

それだけなのだから、出世にも何も興味がない彼女が選ばれたのは、彼らが艦隊司令部の面々にとって扱いやすいと見たからだ。

「そこまでしる。今はそのような事を述べる場ではない。」

威厳のある声が、部屋の中に響き、先ほどまで騒がしかった部屋の中は水を打ったように静まり返る。

「兎に角、貴官には我々に協力する義務がある。出来なければ貴官の身もその家族も不慮の事態が起ころうとも我々は関知しない。が、成功すれば貴官にはそれ相当の地位を約束しよう。」

チハヤは立ちあがって無言で敬礼し、男たちのだれ一人も答礼せず、部屋の中を出て行った。

大西洋艦隊旗艦ノースカロライナ級二番艦ワシントン

その艦橋で私はこの艦隊の提督アーネスト・キング中将の前に立っている。

「はじめまして提督。チハヤ・キサラギ大佐です。本日付けで提督の副官を任命されました。乗艦の許可を。」

目の前に立つ背の高い男（恐らく百八十センチ以上はあるだろう）を見上げる形で敬礼してた。

キング提督は（真面目な顔から）私の顔を見るなり驚いた顔をし、

慌てて何か情報端末で調べ始めた。

「．．．．．ここでもか。恐らく提督は私が女性でしかも日系人という事で驚いているのだろう。」

陸と比べて風通しのよい艦隊勤務でも、やはり差別は存在するし、ガメリカ海軍提督までなった人物なのだ、エリート意識に凝り固まって平気で肌の色を馬鹿にするのだ。

それにそうでなくても今、手元の（恐らく私の事が書いているであろう）資料と私の顔を何度も見比べいい加減敬礼しているのが馬鹿らしくなってきた。

段々イライラしてきた私は思わず、

「提督。何か不都合でもあったのですか。」

と、聞いてしまった。

普通なら白人に対して私がこんな口を聞けば最悪営倉入りもあり得たが、そもそも老人共の嫉妬で押しつけられたようなものだ、どうとでも成れという気持ちの方が強い。

「いや済まん。少し情報が遅れたようだ。私がこの艦隊の司令アーネスト・キングだ貴官の乗艦を許可する。」

そう言つて私に敬礼をする分、少なくとも陸の連中とは違うようだ。

陸では本部の廊下ですれ違うだけで舌打ちをされたり、陰でこそこそと囁かれ、白人だからと言って私よりも階級が低い者が意味なく

突っかかってくる事が多かったが、まあそれが上辺だけかどうか見させてもらう事にしよう。

「しかしまあ、貴官のプロフィールを見たが凄いな。その年で大佐、しかも司令部勤めとは、なかなかエリートじゃないか。」

ふん、どうせ内心ではアジアの小娘が生意気にも成りあがって思っているんでしょね。

やはりこの男も信用できそうもないわね。

「まあ私の副官となるからな、是から宜しく頼む。」

そう言っただけでキング提督が手を差し出して、私も自然とそれを握ってしまい、後になって驚いてしまった。

海軍のエリートは肌の色が違うだけで手を触れるのも嫌がるのに、彼は何気なしに手を差し出し、私もそれに応じてしまった。

手のひらから伝わる提督の体温に、少し体が熱を帯びてしまったのは、恐らく突然の事で心臓の鼓動が上がっているせいだ。

決して、間近にみる提督の顔がハンサムだとか、微笑みかける笑顔が素敵だとなそんなものは関係ない。

「いやしかし、うん。君は中々に美人だね。どうだろう今度一緒に食事でも……。」

「はい？」

思わずそんな声を上げてしまった私は決して悪くはない。

いや、そもそも会って十分かそこの人間を食事に誘うなど……
・いやこの男ならあり得る。

士官学校時代から有名な話で、彼の渾名の中に「女好き」や「好色家」、日刊愛人製造機やこんな冗談まである。

「キング提督にマイホームはいらない。なぜなら寄港する港に最低一つは彼のハーレムがあるからだ。」

その噂を思い出した私は、キング提督の手を思いっきり握り締め、とびっきりの営業スマイルでやんわりと断った。

その後、彼のもとで副官として働き始めるも、何度か食事に誘われたりいろいろとスキンシップを図るなど、こちらからすればセクハラギリギリで任務でなければとうに裁判所に突き出していたほどだ。

まったく、男って本当にどうしようもない奴らばかりです。

10（後書き）

この作品の今後を書いておきます。こうなるとは限りませんが、参考程度においておきます。

1、日本帝国滅亡エンド。

所謂史実ルート。アメリカによって帝国艦隊は壊滅、ソビエトの参戦、せつかく日本化した領土を次々と失い追いつめられる日本。

そこにポツダム宣言が突き付けられ、アメリカが開発した惑星破壊爆弾によって日本星域のヒロシマ、ナガサキ星が壊滅。ポツダム宣言を受け入れた日本は帝は強制的に退位させられ宇垣や山下りこり（凌辱イベントあり）はA級戦犯として捉えられ、他の提督も戦死かアメリカ海軍の捕虜となる。

その後G H Qの指導のもと史実通りの道を歩む。

2、逆転日本ルート

王道ルート。アメリカ海軍をハワイにて打ち破った日本はそのままアメリカ本星に侵攻。新しいワープゲートを使いカナダを占領した日本に突然の事態に対応できないアメリカは各地で各個撃破される。決戦となったU S Jも満足な体制を整えられないアメリカの必死の防戦もむなしく敗北。大統領の暴走もありアメリカは崩壊、日本に併合される事に。

3、コアの反乱

東郷率いる日本艦隊と熾烈な艦隊戦を繰り広げるアメリカ艦隊。しかし、その時アメリカ本土から急報が届く。カナダにおいて研究していたコアが突如として起動し、人類に対して反乱を起こした。突然の事態に浮き立つアメリカ艦隊。そして瞬く間にコアによって占領されアメリカは崩壊。ゲリラ戦を仕掛けるも死を恐れないコア

の軍勢の前に劣勢に陥るガメリカ解放軍。そこに日本から再度のガメリカ侵攻が行われ、共通の敵としてコアと戦う事に。ワシントン
を解放したのも束の間、シカゴXにて復活したキングコアが人工大
怪獣バージニアに乗り日本へと突き進んでいく。再び手を組んだ日
本艦隊とガメリカ残存艦隊は協力して人工大怪獣に挑み見事キング
コアを打ち破る。

こうしてガメリカはガメリカ自治国として日本帝国の一部に加わる。

統一暦939年

原作開始の年だ。

なんかかんやでガメリカに残ってしまった俺は、この時を境に腹をくくる決意をした。

情報部からの報告では日本艦隊が満州海戦で大敗北し艦隊の凡そ三分の二を失う大損害を被った。

更に詳しい情報をとある筋で入手し、海戦の経緯や両陣営の司令から幕僚、更には艦種や装備、動員兵力にいたるまでこと細かく書かれていたそれを見て大体が原作どおりの結果になったと知る。

まあ、今は”まだ”動けなくていいな。

大西洋艦隊は漸く裁判から戻ってきたドゥービル提督に代わっている。

何でもサイボーグボディーをまた改造して今度はエコロジーと環境に優しいよう光合成による発電と酸素供給装置をつけて、自然素材を用いた装甲でゴミにならず土に分解できる様にしたらしい。

何処まで嘘か本当か知らないが、司令官の任を交代する時に会ったドゥービル提督は相変わらずのスキンヘッドだが、以前よりもスリムなボディーをしていた。

では今俺は何処にいるのか？

現在俺はアメリカ本国で本土艦隊を編成する任務に当たっている。

アメリカは欧州、アジア両星域と接する地点にあり、防衛と侵攻の観点から今まで両洋に艦隊を配備するだけで済んでいた。

しかし俺が協力したヴィンソン計画や、ニミッツの新設した潜水艦隊とによってアメリカ海軍の規模が拡大。

既存の艦隊では収まらないのでいつその事本土防衛用と銘打って第三の艦隊を設立する事になったのだ。

で、自分で起こしたことだからその始末を付けろ、とお達しで俺は大西洋艦隊司令を解任され、本国に戻された俺はこうして日々せっせとデスクワークに性をだしている。

「閣下、この書類の件なのですが．．．．．。」

そう言つて山の様に積み重なった書類の傍に更にもう一山書類の束を机に載せたチハヤが、一枚の紙を手に書類の不備を指摘した。

「はあ、わかったそれは後で此方でやつておく。それよりも．．．これは何とかならんのか。」

部屋の隅には未決済の書類が積み重なり、隣の部屋では次々と書類が運び込まれて来ている。

「全くまるで私に対する当て付けだな。関係ない部署の書類まで混ぜられているし、これではやり切れん。」

艦隊から引き抜いたチハヤのお陰で大分楽に成っているとは言え、艦隊司令部から嫌味なほど送られてくる書類の山に、呆れる暇もなく仕事に打ち込む俺は、愚痴をこうして零さずにはられない。

「それは閣下の自業自得というものです。閣下ご自身が余りにも有能な為、艦隊司令部の老人たちは嫉妬しているのですよ。今度編成される新艦隊の総司令官に閣下を押す声も少なくありませんね。」

チハヤが決済済みの書類箱を抱えながら、嫌味たっぷりに俺に言う。

はあ、如何してこうなったんだか。

最初は9393していたちーちゃんが、こつも毒されてしまうとは。

「それは閣下の影響です。よい上官を持って”部下”として私は嬉しいですよ。」

態々部下のところを強調して言うチハヤにもう半ば諦めている俺は何も言わずにさっさと書類を片付けることにする。

こつして戦争とは無縁な状態で時は過ぎていく……………。

アーネスト・キングが大西洋艦隊司令の籍から抹消されました。

チハヤ・キサラギが大西洋艦隊の籍から抹消されました

ガメリカ本土艦隊の編成が可能になりました

?????の開発が可能になりました

満州海戦で戦死した前倉海軍長官の後を継ぎ、新しく海軍長官となつた東郷毅は、その類まれなる戦術能力を持つて次々と中帝国に侵攻。

自らが選んだ提督たちの活躍もあり、瞬く間に中帝国領土を切り取り遂にア・バオワ重慶にシュウ皇帝を追い詰め中帝国を滅ぼすことに成功する。

統一宇宙暦940年、日本帝国、ガメリ力共和国に対して宣戦を布告。

此処に両国の対決の火蓋が切つて落とされた。

11（後書き）

原作イベントは最後の方にちよこつと乗っけるだけにします。

長々しく書くのは好きではないので。

12（前書き）

プロデューサーさん、プロデューサーさん、開戦ですよ！！か・い・
せ・ん！！

これでワタ春香さんが世界を統一するんですよね？

え、千早ちゃんだけ？

またまた、冗談言って、この私天海春香以外誰が主役を張るんです
かwww

誰かアイマス架空戦記で大帝国やってくれないかな・・・・・・・・。

無論閣下が主役ではるちはで尚且つソビエトプレイという需要がある
かどうか分からない奴をやってほしいな・・・・・・・・。

チラ、チラ。

統一宇宙暦940年

この年、日本はガメリカの最後通牒所謂安保条約を蹴り開戦を決意。

中帝国との戦争で実力を示した東郷毅海軍長官率いる日本帝国海軍は初戦においてイニシアチブを握ると同時にガメリカ太平洋艦隊の早期撃滅を図り宣戦布告と共にガメリカ植民地、マイクロネシア、マニラ2000、へと奇襲攻撃をかける。

マニラ2000

ここはガメリカ太平洋艦隊が駐留し、対日戦に備え最後の休暇を楽しんでいた。

「やあ暇だねえ。とても日本と戦争をおっぱじめようなんざ思えないな。」

「ああ、ホントそうだよな。高々極東のサルに何が出来るんだか。」

「ハハハ、違いない。お！！見ろよあそこに好い女がいるぜ、どっちから行く。」

「ヨッシャじゃ俺から行くか。見てろよこの前の賭けの借りを返し

「やるよ。」

「へへ、言ってる。今度も俺は振られるに賭けるね。」

「よし、ガメリカ海軍はまだ此方に気がついてはいないな。宣戦布告を確認した後ガメリカ軍にたいして奇襲攻撃をかける。」

斥候として解き放たれた部隊がマニラ2000の様子を偵察し、今か今かとその時を待ち侘びる。

「3、2、1、0、東郷長官、日本帝国がガメリカ共和国に対して宣戦を布告しました。」

主席参謀の秋山が司令官席に座る長官に指示を求め、

「よし、全艦作戦を開始。これは時間との勝負だ。ガメリカ海軍が動き出す前に少しでも多く敵艦を沈めるんだ。」

連合艦隊旗艦長門に乗り込んだ東郷毅長官の号令と共に連合艦隊は動き出す。

日本帝国は早期ガメリカ海軍撃滅の為、二正面作戦を取り、日本の東マイクロネシア二は宿将山本無限を指揮官として田中雷蔵提督、新しく入った日本の守り神である柴神様、士官学校から繰り上げ卒業した角田、有馬両提督、元中帝国海軍現捕虜提督の項天天と金海海を加えた七提督。

日本の南、マニラ2000のガメリカ大西洋艦隊主力を殲滅する為、東郷毅長官自ら率い、小澤提督、南雲提督ら日本軍の主力と元中帝国北京艦隊司令リンファ提督を加えた少数精鋭で艦隊で一気に勝負をかけた。

マイクロネシア近海日本艦隊集結宙域

奇襲艦隊を任されている山本無限提督は通信を田中提督に繋げ、

「いいか坊主。今回の奇襲作戦は小僧の自慢の足が肝だ。俺達が奇襲開始と共にお前さんは脇目も振らずにただ前にすすみやあい。」

「で、キツイの一発お見舞いすりゃあいんだろ！！言われなくても分かってるさ。」

通信を繋いだ特別駆逐艦戦隊を率いる田中提督は、木刀を肩に担ぎ、不機嫌さを隠そうともせずと言う。

「おお、おお、勇ましいねえ。俺の若い頃を思い出すな、ガハハハア。」

「…………爺さんが若い頃っていったい何十年前だよ…………。」

「

「うん？なんか言ったか小僧。」

無限提督は凄みを利かせた目で田中提督を睨み、それに萎縮してしまつた田中は、思わず目を逸らし、ぶつきら棒に、

「兎に角、奴等に一撃いれりゃいいんだろ。あんまり遅いと俺が全部食つてやるからな。覚悟しとけよ！！」

と言つて一方的に通信を切つてしまふ。

「やれやれ、先が思いやられるな……。さあ、一戦大博打を打つとするか！！」

マイクロネシア駐留艦隊

「シットなんだこりゃ。おい、哨戒に出ていた連中は何やってんだ！！敵が目の前まで迫つてんだぞ。」

ガメラ力大西洋艦隊駆逐艦隊司令キャシー・ブラッドレイ提督は、突如として現われた日本艦隊を目にして、直にでも応戦の指揮を取ろうとするも、

「ブラッドレイ提督、そもそも艦隊司令部から休暇命令が出て乗組員全員が陸に下りてんですよ。早く提督も脱出してください！！」

副官が慌てて諫め、直にでも脱出を促す。

今艦隊は、全艦待機状態で動力炉の火は落とされ今直ぐ緊急発進しようにも、目前まで迫る日本艦隊の前に圧倒的に時間が足りない。

「What!! ああクソっ敵に後ろを見せられるか!! さっさと応戦準備をしろ。このままじゃいい的だ。」

「正気ですか!! ああ、もう行っちゃった。今直ぐ陸にいる連中を呼び戻しますから、お願いですから無茶しないでくださいよ!!」

それでもブラッドレイ提督は、生来のじゃじゃ馬っぷりからあくまでも反撃するつもりで、勝手に艦橋に上がっていつてしまう。

仕方なく、副官も司令を一人残してはいけず、レーザーも使えない中、何とか最低限の運用が出来るよう走り出した。

だが、直に爆発の衝撃で船がゆれ、壁に手をついて何とか転ぶのを避けた副官は、内心間に合わないと思いつつ、それでも諦めようとはしない。

レイモンド・スプランス提督は、自軍の有様を見て負け戦だと直感した。

マイクロネシア駐留艦隊本隊は、今日全艦総点検の日で必要最低限の乗組員しか居らず、今直ぐに呼び戻しても到底間に合はずが無い。

偶々自分が船の様子を見に来ていたから良かったものの、同僚の第

二巡洋艦隊司令はマイクロネシア本星にいて急遽自分が率いることになった。

もし仮に自分がいなければ恐らく艦隊は何も出来ないまま撃沈され、自分は日本軍の捕虜となっていただろう。

そういった点では彼は幸運だったが、しかし、総点検で爆発の危険性をなくすために動力炉の火を完全に消していた事が災いして結局彼も特に打つ手が無いのだ。

「スプランス提督、一個戦隊が此方に急速接近してきます!!」

「周辺の護衛は何をやっている!!」

「それが、奇襲で何処のかしくも手が一杯でその隙を突かれたようです。今から迎撃は間に合いません。」

オペレーターからの絶望的な報告に、内心焦りながらも彼は表面は平静なんとか装い、

「本艦隊に今使用できる火器はない。総員対ショック、救命艇の射出準備と、それと全軍に撤退命令を出せ!!」

「司令それは越権行為です。太平洋艦隊司令部からは何も……。」

副官が一巡洋艦隊の司令でしかないスプランスの独断に抗議するが、今はこの手の杓子定規な男を相手にしている時間はない。

「マイクロネシア司令部は奇襲で混乱状態、しかもこれ程手際がい

い連中だ、恐らくマニラ2000にも奇襲が行われているはずだ。ハワイの司令部との長距離通信も先程から妨害されて満足な指示など出せない。故に私は上位者権限に基づいて今よりマイクロネシア駐留艦隊の指揮を取ることとする。何があっても責任は私が取る。それよりも今は少しでも多くの将兵を救い出す事が先決だ。」

「了解しました提督！！全艦に通信を開け、撤退だ。マイクロネシアを放棄する。再集結ポイントは……………」

「果たして間に合うかな……………」

スプルアンスはやれることは全てやったはずだ、後は運を天に任せるのみだが……………ここでも神は彼に味方しなかった。

「スプルアンス提督！！先程の駆逐艦戦隊が艦隊に突入してきます。」

その報告がなされた直直後に、指揮官のない第二巡洋艦隊が火を噴いた。

空気が無い宇宙空間では振動は伝わらないが、しかし、スプルアンスにだけはつきりと巡洋艦隊旗艦の断末魔が聞こえる。

総点検で乗員こそ少ないものの、ガメリカ海軍が育てた士官や乗組員が塵も残さずに消えていく。

一瞬の擦れ違いで一個巡洋艦隊が何も出来ないまま落とされ、スプルアンスは唇をかみ締めた。

「総員退艦、急げ！！駆逐艦が戻ってくる前に脱出するんだ。通信

兵、以後の指揮の撤退の指揮はマニラ2000のイーグル・ダグラス司令に任せると伝える。」

反撃も動くことも出来ない艦隊は唯の的だ。

スプランスは的確な指示で退艦を命令し、最後に艦橋を後にするとき振り返って、

「今回はお前達の勝ちだ。だが、見ている。必ずやガメリカは再興すると。」

スプランスは副官の声で前を向き、通路を走り出す。

「よっしゃ見たか東郷!!」

田中提督が今しがた撃沈した巡洋艦隊を見て腕を立てる。

「お前等!!!次はあの艦隊だ、気合入れて行けええええ。」

「押す!!!」

部下たち基、族仲間が威勢の良い返事をして駆逐艦を操る。

日本帝国自慢の93式鉄鋼弾の威力は、今しがた巡洋艦隊を一撃で壊滅させたように絶大な威力を誇る。

それゆえ扱いが難しく、世界でもこれを主力とした艦種は殆ど例を見ない。

そんな中、田中提督は運用の難しい試作特雷型駆逐艦を操り絶大な戦果を挙げているのを見ると、彼の才能を見抜いた東郷長官の采配の妙もあり、日本軍の戦術が正しいことを証明した。

山本無限 角田 有馬 提督らは対峙するブラッドレイ艦隊に対して一方的な攻撃を行っている。

「よし、その調子だ。相手はレーザーを撃てない。なら距離を置いちまえばどうって事はない。このまま続けるぞ。」

無限提督は早くから敵艦隊の主砲が発射できないのを見抜き、相手が駆逐艦ということもあり距離を置きこうしてブラッドレイ艦隊を徐々に追い詰めていく。

「山本提督、このまま押し切れます。接近戦の許可を。」

自軍の優位に血気にはやる角田提督に、山本は諫めて、

「東郷長官からのお達しでなるべく被害は少ない事に越したことは無い。まあ見ておれ、我慢できなくなつて向こうから来てくれるさ。」

同じ頃ブラッドレイ提督は頭に来ていた。

「ああクソ、ジャップの貝割れ　野郎。ビビッて無いで近づいて来い！！てめーらの小せえア　スに特大のモノをぶち込んでやるのに。」

「提督、第三駆逐艦隊隊列を離れていきます。ああ、マクダガルが火を噴いた。」

「かまっちゃいられないよ。それよりも今出せる最高の出力をだしな。奴等に一泡吹かせてやる。」

が、神様はホトホトガメリカが嫌らしい。

「――提督敵艦隊からミサイル。」

「回避！！野郎共、しっかり掴まれえええ。」

「決まりだな。おい、直に接舷用意だ。敵さんもう何もできはしない。」

山本無限艦隊が放ったミサイルが運よく激しい抵抗をする敵旗艦の機関部を直撃し、ブラッドレイ提督が乗る船は宇宙を漂い始めた。

「了解しました。直にでも陸戦隊を出動させます。」

「さて、一先ずこっちはすんだが、はてさて東郷の奴は上手く行ってるかな？」

マイクロネシア奇襲作戦で山本艦隊が受けた被害は柴神様が捕虜提督たちの盾となって犬御殿が中破したのみで然したる被害は受けなかった。

また、必死の抵抗を行ってブラッドレイ提督も捕虜となり、マイクロネシアを脱出できたのは極僅かな艦隊のみだった。

マイクロネシアが日本軍に占領されました。

キャシー・ブラッドレイ提督が日本の捕虜となりました。

キャシー・ブラッドレイ提督の軍籍が抹消されました。

マイクロネシアで建造中の船が日本軍に接收されました。

ガメリカ共和国議会議事堂

議事堂内には、普段にない喧騒と怒号に包まれている。

「だから私は、何故日本と戦争になるのが判っていながら休暇など出したのかと聞いているのです!!」

「そもそも、軍司令部の公聴の中にはガメリカ海軍の守りは万全だと言っておきながらこのザマだ。」

「これは明らかに軍部の怠慢であり、国民に対する裏切りです。即刻このような司令部は更迭すべきです!!」

議事台上に登り、声高く議事堂に響く声に、隅の方で様子を見ていた老練な議員の一人が眉をひそめる。

「誰だあの威勢のいい若造は？」

「ヒューイ・ロングという名前だそうなんだ。暗殺未遂から奇跡的に生還してあの若さで上院議員だ。」

「ふん、どうせヒーロー気取りによくある奴さ。如何に市民に人気があるうと所詮民衆など流されやすいもの。今のうちにいい思いをさせてやるさ。」

ヒソヒソと隣のものと話し合う彼等の間に、一つの情報媒体が投げ込まれる。

「「!？」」

投げたほうを見ると、既にその人物は居らず二人は顔を見合わせるが、仕方なく情報に目を通ることにする。

「!!これは……………」

「まさか、いや手際がよすぎるな。これでは今回の戦争、奴を態々勝たせるようにしてやったようなものだぞ。」

そこには今アメリカ中で配信されている大手メディア・コングロマリット情報誌のTOPが乗っていた。

『ガメリカ共和国敗北!!日本軍の奇襲。艦隊首脳部は当日ゴルフに行って報告が十二時間遅れる……………!!?』

『無敵のガメリカ艦隊は何処に?お粗末な海軍人事、海軍長官は愛人と一緒にバカンス』

『ガメリカの希望現る!!四十台の若き星 トマス・デューイ今年の大統領選に立候補表明。早くも支持層を拡大か!?』

「クソ、ハーストめ!!一体誰だ、奴に海軍軍令部の情報を流したのは。」

「今はそれを言っている時ではない。問題はハーストとデューイ、この二人が組んでいるのかそうでないのかだ。ハーストがいるだけでガメリカ中核州の内三分の一は奴に票を入れるぞ。」

結局議会はデューイの独壇場のまま閉会し、中継された議会の視聴率は、大統領の宣戦布告を凌ぎ、国民の間に大いにトマス・デューイの名を知れ渡ることになる。

ガメリカ太平洋艦隊司令部ハワイ

マニラ2000から生き残り戻ってきたイーグル・ダグラスに待っていたのは更迭されるハワイ元総司令官キンメル大将の姿だった。

「よく生き残ったなダグラス司令。」

声をかけた男を見ると、自分と同じ様にキンメル大将を見送っていた一人の償還が話しかけてきた。

「いやどうも。むざむざやられて何とか生き残ってきましたよ。ところであなたは……。」

「ああ、すまん。初見と成る、新しくハワイ総司令官に就任した

チェスター・ニミッツだ。以後太平洋における指揮権を全て一任されている。」

「なるほど。俺もどうやらツキが落ちたらしいな。此処にきて軍を辞めるようなことになるとは。」

「？何を言っているのかねダグラス司令。たしかに太平洋における戦略は私に全ては任されて入るが、君までを解任するつもりは到底無いよ。まあ、キンメル大将の件は気の毒だとも言えるがな……。」

そこで言葉を切ったニミッツ総司令は、連絡艇に乗るキンメル大将の後姿を見て、寂しそうに呟いた。

「ニミッツ閣下。一つお尋ねしたい事があるんだが、いいか？」

「私に答えられることなら。」

「今回の人事はいつたい誰の指示で？私も此処までたどり着くまでに情報を色々と集めてはいましたが、本国じゃあ統合総司令部は軒並み辞職が更迭されたんじゃないやありませんか。一体誰が貴方を此処に、そして権限を与えたんで？」

「……………それについてはこれから説明しようと思っていたのだが…………。まあ、今は休んでくれ。君も此処までついてきた君の部下たちも闘いの傷を癒し、後日詳しいことを話そう。」

ニミッツ総司令はそういつてダグラス司令に敬礼して、歩いてく。

その、後姿を見たイーグル・ダグラス司令は、

「なんだか知らないが本国じゃあきな臭いことになっているな。まあ、今は休ませてもらいますか。」

チェスター・ニミッツがハワイ総司令官に就任しました。

ガメリカ統合軍総司令官は解任されました。

新しい統合軍総司令官が任命されました。

新しいガメリカ海軍長官が任命されました。

新しい統合軍総参謀が任命されました。

新しい統合軍参謀会議議長が任命されました。

ガメリカは戦時体制に入りました。（技術開発、建造コストが十パーセント減少しました。ガメリカの資源、技術収入五パーセントUP。計七回まで）

ガメリカ統合軍総中央司令部

その廊下を歩く人物に、誰しもが立ち止まり啞然として見ている。

副官と思わしき一人の女性を引き連れて、歩くその姿は、真っ直ぐ総司令部センターへと入り、そこで働く全員が立ち上がって敬礼し、新しい統合軍司令官を迎えた。

答礼を返す男の瞳には、迷いは一切無く、司令センター内にいる一人ひとりを見る事無く、総司令官席へと座る。

やっとならまで来たか……長いようで短いようで。

ガメリカ海軍の首脳部は敗戦の責任を取り殆どが辞任し、残ったものも更迭されるか閉職へとまわされ、一気に人材が減ったガメリカ海軍の中で穴を埋めるほどの人物は殆どいなかった。

いや、いるにはいたが、そういう奴等ほど、前司令部のメンバーには嫌われて後方勤務課それとも俺がいぜん所属していたように将官

会議へと追いやられていた。

その為、統合軍総司令官になった俺は他にも兼任することとなり、上げてみれば、統合軍総司令官兼海軍作戦部長兼統合軍総参謀兼参謀会議議長兼ガメリカ海軍長官兼海軍人事局局長兼本土艦隊司令兼補給兵站業務兼……………。

うん、史実のアーネスト・キング真つ青の兼業っぷりだ。

ホント、俺に死なっただか？

海軍長官でさえ二年で交代するほどの激務なんだぞ！！それを他にも、というか統合司令部どころかガメリカの軍事のトップを俺に任せるとか……………シビリアンコントロール以前の問題だな。

とりあえずまずは人事からだ。

艦隊とは違って優秀な人材が払底している本部を立て直す為に人事局長というか、今の俺の地位は大統領のみに責任をおっているので、大統領自身がストップをかけない限りそのまま命令として実行されることになる。

まずは前線だが、大西洋艦隊はそのままに問題は太平洋だな。

キンメル大将には悪いが、生贄になってもらう。変わりに少将から飛ばして大将に昇進させたチェスター・ニミッツを送り込んでおいた。

後ついでに本土から人材を好きなように引っ張っていいとの命令も与えておいたのでニミッツに全てを任せておけばいいだろう。

海軍情報部局長も兼任していたので早速権限を使って若草会や四大財閥の息のかかった仕官を更迭して新しい人材を入れる。

今まで冷遇されたものや才能を認められなかった者をリストに載せ、各々の能力が発揮できるように各地へと赴任させる。

あまりに強引な人事なので、色々と批判も起こるが、そもそも軍の全ての権限は俺が握っているんだ。

うるさい連中には直にでもご退場願おう。

これで少なくとも若草会の影響力を排除できるな。一々指示立てされるのは煩わしいからな。

将官会議のメンバーも頼み込んで来て貰う。

少しでも仕事を減らす為に俺が兼業している部署の長として割り当て、他にも人材を紹介してもらったりと、結局統合軍司令部の陣容が揃うまで二ヶ月も要してしまった。

そして今日、やっと全ての仕事が終わわり、これから各部署の責任者を交えた戦略会議を行う。

俺の後ろをに控えるチハヤ少将には本当に感謝だな。

相変わらず9393モードだが仕事は真面目にやってくれるし尚且つ優秀。

将官会議のメンバーにも気に入られている。

何でも「童顔で孫みたいで可愛い。」「実は前からファンだった」とか（何の？）本人が戸惑うほど可愛がられている。

次いでだから前線にも出てもらうことにするかな？

何気にこの子、潜水艦隊と航空部隊を使ってシュミレーションさせてみたらハワイレンジャー（ブルー、レッド、シルバー、ブラック・ハワイの四提督）に勝ってるし、副官としてだけでなく提督としてもこれはいけるな。

日本人や日系人対策もちゃんと行っている。

流石に収容所送りまでは防げなかったが、義勇軍という形で軍に参加して日本人部隊を作ってもらったり、朽木提督など優秀な人材には惜しみなく働いてもらい、少なくとも前線からは一定の評価を受けはいる。

「では、これよりガメリカ海軍戦略会議を始める。早速だが、各戦線の状況報告からいこう。」

円卓上の席に座る将官と、傍に控える仕官。如何しても会議には参加できない司令官などは超長距離通信での参加をしている。

「まずはハワイからだな。ニミッツ総司令、報告を。」

「は、閣下。現在太平洋艦隊の建て直しとハワイ、ラバウルの守りを固めています。日本軍は間を置かずにマレーの虎、四国を攻略。現在マニラ2000に艦隊の主力を集めています。」

「となると、次の狙いはラバウルかベトナムか……。エイリス帝国との連携はどうだ？」

「それが……。現地の総督が我々の艦隊派遣を拒否しまして、本国から騎士提督も来ているいじょう、我々との連携はほばありません。」

「全く、これだから面子に頼る奴は信頼できん。で、一体エイリス本国から誰が来たんだ。」

「エイリス帝国三騎士の一人。ヴィクトリー・ネルソン提督です。」

「あの若造か。期待はできんな。ベトナム、インドカレー陥落も視野に入れて戦略を練ることにしよう。次」

「おう、大西洋艦隊司令ドゥービルだ。命令どおり対潜装備を装備した艦隊と、エイリス帝国の供給する旧式駆逐艦百隻を送ったところだ。来週にはエイリス本土に届くはずだ。それと欧州だが、苦戦しているらしい。オフランス、ポツポーランド、北欧は陥落。イタリンとも同盟を組んでエイリスは孤立している。恐らく近いうちに何らかのアクションがあると予想している。」

「エイリスからは例のドクツの潜水艦の情報は手に入れたな。」

「ああ、旧式駆逐艦百隻と交換で泣いて渡してきたぜ。既に開発局

に情報を添付している。見た感じガトー級よりも隠密性に優れていたな。」

「分かった。次の議題に移ろう。今後日本とドクツ、イタリンに対する戦略だが．．．．．。」

14（後書き）

中途半端ですが一度此処できります。
次回はこの続きになります。

戦略会議室に集まった者達が統合軍総司令官の言葉を待つ。

「今後の戦略だが．．．まずドクツ、イタリンだがしばらくは動かなくていい。それよりも大西洋艦隊の錬度と士気向上をはかり、来るべき欧州反攻作戦に備えるべきだ。」

「次にもっとも重要な太平洋だが、ニミッツ司令の提案どおり『無制限通商破壊』作戦を行うものとする。」

『無制限通商破壊』！？

聞きなれぬ言葉に、会議室に集まった者たちは目でそれは何かを問いてくる。

「詳細は作戦立案者であり、現太平洋総司令官チェスター・ニミッツ大将が説明する。」

その言葉で今度は全員の視線がモニターに映るニミッツ大将に集まり、徐にニミッツ大将は口を開く。

「私が立案指揮する無制限通商破壊ですが、既にご存知の通りドクツが対オフランス戦でその有効性を証明した潜水艦を主力として行うものです。ガメリカではドクツに次いで二番目に潜水艦を実用化しましたが、その運用に関してはまだまだ研究段階と言ってよく、様々な案が出された内、極めて実現性の高い作戦として潜水艦を用いた通商破壊に決まりました。まず、潜水艦隊の基地となるべくラバウル、そしてハワイを基点に三隻一組としてこれをウルフパック

として、日本の物資輸送や航路などで作戦を行います。」

そこで、一人の将官が手を上げ、

「質問があるのだが、此処まで聞くとところによるとその攻撃目標は軍事ではなく民間船も含まれるということだな？」

「ええ、そうなります。」

「と成れば国際条約に少々接触するのではないのか？戦時中は如何なる場合においても民間船舶は……。」

「私が許可した。」

「「!?!?」」

「私が許可した。軍民問わずたとえ中立国や病院船であろうと沈めてよいと。」

部屋に響くアーネスト・キング総司令の声に、誰しもが口をつぐむ。

「我々は勝たねばならん。そうでなければ前司令部の無能で散っていった英雄達に申し訳がたたん。例え如何なる理由があろうともどんなに犠牲を払おうとも、奴等を最後の一兵まで追い詰め、殲滅する。それが我ガメリカの正義でありひいては世界の秩序となるのだ。卑怯にも奇襲などと小ざかしいまねをしたサルどもに遠慮などいらん。存分に叩きのめせ。」

暫く部屋の中はシーンと静まったが、ニミッツは居た堪れなくなり

「ああ、その、閣下の言うとおりこの作戦はガメリカの正義の為の作戦でもある。そのためにはどのような犠牲が出ようと作戦をとめることはしない。兎に角太平洋の基本戦略はこちらの体制が整うまでラバウル、ハワイの両星域を守り、その間に戦力を整え通商破壊で疲弊した日本を討つということで宜しいですね？」

誰も答えはしない。

いま、彼らは漸く実感したのだ、この戦争が如何なる物なのかを、また自分たちの頂点にたつ男がどんな人物なのかも……。

通商破壊作戦を実行しました。これにより毎ターン日本の支配地域の治安は悪化します。（安定の場合は悪化しません）

ハワイ、ラバウルの要塞化が始まりました。（資源10000消費）

ガメリカが戦時体制に移行しました。

??????の研究がスタートしました。ロスアラモスに研究所が作られました。（技術5000消費）

ブライトンヒルズ

その大統領執務室．．．．．ではなく、その裏側に作られた極秘の部屋でこの国の真の支配者達が集まってきている。

「では、定例会議を始めます。まずは各財閥の報告から。」

椅子に座って足を組みむ褐色の肌と赤毛の女性がそう言って部屋を見回す。

「キリングは何時も通り．．．．とは、行かないわね。今は戦艦や空母よりも資源や工作機のほうが売れているみたいで。でも、次世代型の正規空母に大型空母、型落ちだけど護衛用の軽空母や巡洋艦駆逐艦なんかの予約発注が多いかな。新しい統合軍司令官になってからいまいちキリングへの情報のとおりが悪いのよね。やっぱりまだ慣れてないのかな？」

金髪ツインテールのまだ何処と無く幼さを残すキャロル・キングが自分達の業績を報告する。

「ロスチャも順調で軒並みガメリカの産業全体の株価は上昇。当初の予想を大幅に上回る程です。」

此方はしおらしい大人しい可憐な雰囲気纏う少女？クー・ロスチャが兄弟達の金融操作の様子を説明し、

「ノイマンは通常通り。ガメリカ海軍からの要求で今はより高精度

な照準索敵連動システムの研究に当たっている。」

水色の髪のがねをかけ、何処と無くぶつきら棒にいう不思議な少女こと、ドロシー・ノイマンの報告が終わるとさっさと空中投影ディスプレイで何かに没頭し始めてしまう。

「ロックも順調よ株も何もかも高くなっている。戦争は最高ね、多少のアクシデントも吹き飛ばすくらい莫大なりターンが見込めるはそれよりもキリング、ガメリカ海軍の影響力が低下しているのは貴方達だけではないわ。」

最後に、この会議の運行、議長役でもあるハンナ・ロックがロック財閥の好調ぶりを誇るが、しかし、彼女は一つの懸念を示す。

「そう、ロックもロスチャも、ノイマンも、関係部署全員が交代したり、更迭かあるいは左遷されているわ。それもこれも全部あの新任の統合軍司令官が来てから。これは由々しき問題よ。」

実際これ等のメンバーの情報は極秘扱いで、例え隣り合った部署同士でも互いに秘密にするほどののだ、その彼女等の息がかかったメンバー全員が上も下も関係なく排除されたことに少なからず衝撃を受けている。

「そうよ、ロスチャの言うとおり、私たち若草会や財閥は裏からこの国を支配してきた。その方が都合がよかったし、これからまたそうであるの。でも、あの男は違う、何処で聞いたのか恐らく私達のことを知っているし、恐らくこの国のカラクリにも気付いている。彼はとてつもなく危険よ、ガメリカや私たちにとって。」

「でもでも、その人が司令官になってからグリーンとガメリカ海軍の

士気は向上しているよ。それに組織効率は前の三倍以上だし、志願兵も増加して新しく志願センターを造らなきゃならないくらい。たしかに財閥の影響力を排除しようとしているのかもしれない。でも、そこまで危険は無いんじゃない？だって高々一司令官でしかない人がどうやって目に見えない私たちと戦うの。」

キャロル・キリングは軍事的には何も問題ないとして、暗に政治的には何も力を持っていないことを言うが、

「彼を甘く見ないほうがいいわよ。本来ならば統合軍の交代はもつと穏やかに行われるはずで、前よりも私達の指示が通りやすくなる筈だった。」

「でも、そうは成らなかった。」

「問題はハーストとヒューイ・ロング。ハーストの暴露とロングの統合軍弾効は連動している。そして結果若草会が選んだメンバーではなくただ一人彼だけが就任し、人事権を握った彼によって財閥の影響力が排除された。これが何を意味するか分かる？」

ロスチャとノイマンの言葉にキリングは漸くことの重大性が分かったのか、先程の樂觀した顔ではなく厳しい経営者のそれになる。

「いるのね、まだこの国で私たちに歯向かおうとする連中が。そしてまず……。」

「軍部を握って私達の影響力を削ぎ、次いでロングが次期大統領選に立候補したのはその後押しがあるから。ハーストが世論を煽り立てれば国民の大多数はロングに靡く。」

ロスチャが静かに彼等のシナリオを言い、

「彼が大統領になれば私たちはお終い。最悪財閥を解体されるかもしれないし、そもそもこれまでどおり選挙に介入しようものなら軍部が黙ってはいない。一番回避しなければならないのは財閥と軍部との内乱よ。そうなればガメリカは崩壊するわ。」

ロツクが締めくくる。

「失敗したわね。彼を統合軍司令に成らせるべきではなかった。前任者の言葉を見殺した結果がこのザマね。」

「でも、結局彼を任命せざる終えなかった。そうでなければ軒並み首脳部を失ったガメリカ海軍は内部から崩壊する。とんだ食わせ物ね。」

「でも、一体何処から軍部内から私達の情報が漏れたんだろう……」

「十中八九ラングレーの関係者ね。この国で私たちと関係が深いのは大統領に次いで彼等よ。兎に角、今は国内をどうにかすべきね、新しい統合軍司令官が噂どおり優秀なら今は期待しましょう。でも、もし失敗すれば結局そこまでの男だっただけ。」

「この国の支配者はクイーンでいい。キングは不要。」

こうしてアーネスト・キングは若草会の第一の敵として認識されることとなる。

17（前書き）

あついで、だれる。

もう、いつその事星域破壊爆弾量産して日本にぶつてもつかない。
。

マニラ2000トラック星

幾つもの星が連なり、ラバウル側のワープゲートに近いこともあり、ここには日本帝国艦隊が投錨している。

その、日本帝国艦隊旗艦長門の艦橋にいる東郷毅海軍長官は報告書と睨み合いをしながら難しい顔をしている。

隣に立つ秋山参謀の顔色もよくない。

ふと、いい加減疲れたのか、東郷は書類から目を放し、ぐっと伸びをして肩の凝りを解した。

「また、船が沈められたのですね。今度は何処の船です？」

「殆どが民間船だ。植民地から今まで自由に航行できなかったのだが、我々が開放したお陰で自由だからな。経済が活発化することは好いんだが、今月に入ってもう十二隻目だ、早急に対策を立てねばならんな。」

「ですが東郷長官。マレーの虎からベトナム、四国を落としたのはいいのですが、逆にそれが負担になっています。インドカレーからはビクトリー・ネルソン提督率いるエイリス帝国艦隊、ラバウルからは嫌がらせのように時々空母が来て占領地に対する爆撃を行っています。これでは到底手が足りません。」

秋山は最近では胃の他にも頭痛が激しくなってきた。

前までは東郷の女性問題だけですんだのだが、近頃はガメリ力の通商破壊により彼方此方から帝国海軍に対する突き上げが行われている。

それに対応している秋山は、頭痛のせいで頭を掻き篁り、それでもた抜け毛が増えるなどと東郷にからかわれても、碌に返事を寄越せないほど追い詰められていた。

その様子を気の毒そうに見ながらも、相変わらず女遊びを止めないあたり東郷も東郷である。

「まずはラバウルを落す。と、その前にと．．．。ああ、私だ、デーニッツ提督は呼んできてくれ。何？わかった此方から行くと伝えてくれ。」

東郷は通信機のスイッチを切り、司令官席から立ち上がって、背を向けた。

「東郷長官どちらへ？」

「ああ、デーニッツ提督のところだ。彼女は潜水艦のプロフェッショナルだからな、何かアドバイスをもらえるかもしれない。」

「では、私もお供します。」

秋山が付いて行こうとするが、

「いや、秋山は残って休んでいてくれ。前髪で隠しても私には分かるぞ、ろくに眠っていないんだろ。今日くらいグッスリ寝ておけ。」

」

「東郷長官……………」

このとき秋山に電流走る！！

優しくまるで母のような眼差しで自分を見る東郷長官の微笑み。

その姿に一瞬でキュン、となってしまった秋山は心の中で、ああ、東郷長官に惚れる女性の気持ちがなんとなく分かったような気がした。

「秋山が休んでいる間に、俺はデーニッツ提督とデートをしてくるから。それじゃあ後は宜しく頼む。」

サムズアップして白い歯を見せた東郷長官は、そういつて猛ダッシュで艦橋を後にした。

ポツンと一人残された秋山は、あとから心の奥底からワナワナと込み上がって来る怒りを前に、叫ばずにはられない。

「東郷長官！！今日という今日は許しませんよ——————！！」

ドッグでは、日本海軍の艦艇が係留され修理や建造中のものなど様々な喧騒で満ち溢れている。

その、一角を占めるようにしてドクツの潜水艦が、整備を受けている。

「次はここと、ここ。こっちは少し信号が弱いようです。後で交換して置きましょう．．．．．！？東郷長官、態々お越し頂きありがとうございます。」

ドクツ流に敬礼するデーニッツ提督に東郷はやあつと気軽に手を上げてその姿にまたかとデーニッツは内心ため息をつく。

「今日は何のようでしたのか東郷長官？」

「そうつれないことは無しにしようじゃないか。ところで今空いているかね。」

「そうですね．．．．．この子の大体のチェックは終わりました。後は私が見ることもないので仕事はありませんが．．．。」

「なら少し付き合ってくれないかな。まあちょっと散歩がてら君と相談したいことがあるのさ。」

暫く黙って考えたデーニッツは、少しならと小さく付け足して答えた。

「ああ、今日はいいい天気だな。そういえばエイリスは霧の国といわれるほど滅多に太陽が見えないらしいが、君はエイリスに行った事はあるか。」

「あの．．．．長官、私と相談したい事があつて態々いらつしやつたのでしょうか？先に本題にはいりませんか。」

「いやはや、私にとっては君のことも重要なのだが．．．まあいい、そろそろ人目もなくなってきたし、本題に移ろう。ガメリカの通商破壊の件なのだが．．．。」

東郷は先程のおちやらけた態度は鳴りを潜め、真剣な目つきでデーンツツを見ていた。

「はい、その件は私も存じています。そもそも潜水艦はドクツ総統レーティア・アドルフ閣下が研究設計されたものですが、基礎研究の段階では各国でも行っていて、私もその研究者の一員として開発に携わっていたのですが．．．。戦争終結後に多くの技術や研究データ、それに人材が外に流出して、その時のドクツはこれを引き止めるほどの力はありませんでした。でも、そのときアドルフ総統が現われて私たちを救ってくださいました。そのお陰で私も研究を完成させて今ではこうして提督として総統閣下のお役に立てると

ても光栄です。」

途中でアドルフ總統の話にずれてしまったが、東郷が懸念するようにドクツ軍内から流出したのではなく、既にそれ以前から技術の流出が起こっていたということでも十分な収穫だ。

「流出した技術や人材について何か詳しいことは分らないか？」

「そうですね．．．．．そうですね少し気になる噂を耳にしました。何でも宇宙物理学やニューロン波に関連する研究を行っていた機関が丸ごとガメリカに移ったとか。あと、これはドクツに限りませんが、戦前のガメリカは世界中から科学者を集めてとある研究を行っていたようです。」

「その研究は今でも行われているのか。」

「分かりません。それ以上は当時一研究員でしかなかった私には到底．．．．．でも、アドルフ閣下ならば何かご存知のはずです。私から閣下に聞いてみましょうか？」

「いや、それには及ばないよ。デーニッツ提督、長い間つき合わせてもらってすまないな。今度食事でも奢るよ。」

話が終わると「ははははっ」と笑いながら手を振って立ち去る東郷長官にデーニッツは先程見せた真剣な表情と今見せる飄々として女たらし然とした姿のギャップに何故かときめいてしまう。

胸の高鳴りにドギマギするデーニッツであつたが、幸い周囲には誰も居らず、彼女の恥ずかしい姿は見られることはなかった。

17（後書き）

いい加減暑苦しいですね。最近雷も多くて犬がうるさいです。

とりあえずアンケートを一つ。

今後の物語を決定付ける重要なものなので感想のほうにお寄せください。

1 史実ルート

2 日本逆転ルート

統一宇宙暦941年ラバウル星域

この日、日本帝国海軍は、折からの通商破壊作戦に対抗するため、その根拠地と思われるラバウル星域に艦隊を差し向ける。

「ハルゼー提督、日本艦隊のワープアウトを確認！！数凡そ五胡艦隊相当、後三時間ほどで此方と接触します。」

ラバウル星域防衛を任されている『ソロモンの魔女』ことフリス・ハルゼー提督は閉じていた目を開き、小さく笑みを浮かべる。

「占いの結果どおりね。全艦に通達、予定通り一度ポートモレスビーまで引くわよ。」

フリス提督の支持の元、艦隊は引き日本艦隊をラバウル星域の奥地まで誘い込む。

「山本提督、敵艦隊が引いて行きます。これは……撤退でしょうか？」

「うんにゃ、こりゃあ違うな。俺達を奥地に引き擦り込もあって魂

胆だ。どうやら敵将に出来る奴がいるな。」

「それは”ソロモンの魔女” フリス・ハルゼー提督の事でしょうか？何でも彼女は占いの結果を作戦に反映してその的中率はなんと百パーセント！何かこちらの不運となる結果が出たのかもしれない。」

傍に控える副官が不安そうに言うが、仕方が無いことだ。今まで順調に快進撃を続けてきた日本帝国艦隊が、たった少数の潜水艦による通商破壊に翻弄され、ベトナムを何とか落としたはいいが、それ以上の進撃は間々ならなかった。

日本軍の陣容は正面決戦を前提としていて、こうした搦め手には弱く、何百隻もの船が沈められて国内や占領地で不満が高まっている。

それを何とかする為にこうして艦隊を出しているのだが、生憎のこの同時期にエイリス帝国の艦隊がベトナムに侵攻、それを防ぐ為に東郷長官率いる艦隊がベトナムに張り付き当初よりも少ない陣容で向かわねば成らない。

「勝負は時の運。なに、占いの結果がどうであれ俺たちやることをやりゃあ好いんだ。そう戦う前からびびることあねえ、ほれ見る皆不安がつているぞ。」

その声に副官は自分達を見る不安そうな視線に気がつき、山本提督に頭を下げて謝る。

「す、すみません。副官ともあろう者がこのような弱気な発言をして士気を下げるとは。」

「気にすることあねえ、それよりも今は目の前に集中だな。さあ、一博打打つとするか!!」

ハワイ太平洋艦隊総司令部

「日本軍が食いついた。お腹をすかせて来た割には艦隊が少ないようだ。……。」

「恐らく残りの艦隊はベトナム防衛に割いているのでしょう。あそこは今エイリスが取り返そうと必至ですからね。兎に角予定通り作戦は進行中です、日本軍はこのまま進撃を続ければポートモレスビー要塞の前で我軍と対峙します。」

副官が伝えられてきた情報を簡潔にまとめ、ニミッツ提督はそれを聞きながらこの作戦の全容をもう一度思い浮かべる。

この作戦が成功すれば太平洋の優位は一気に此方に傾く、欧州ではドクツがエイリス本星域に侵攻するゼーレーヴェ作戦の真つ最中、状況は危ういな。

早く日本軍とのけりをつけなければ。

「艦隊の出撃状況は。」

「はっ、既にスプルアンズ提督率いる第五艦隊、ウィリアム・ハルゼー率いる第三艦隊、それと本国艦隊から送られてきたこれは．．．日本人ですかね？チハヤ・キサラギ少将が率いる高速航空艦隊の計三個艦隊が既にワープゲートに到着、合図と共に一気にワープアウトしてラバウルで日本軍の側面を強襲します。」

副官の読み上げる提督のうち一人心辺りがあるニミッツ提督は、副官を嗜める。

「そのチハヤ・キサラギ少将だが、彼女はキング元帥の副官だ、下手なことは言わないほうが身のためだぞ。」

「！？そうなのですか、いやしかし彼女は少将とはいえ日系人ではありませんか。それをこんな大事な作戦に参加させてよいものなのでしょうか？」

「はあ。」

私は現在ガメラ力海軍内にある根強い日本人差別に癖癖としていた。まあ彼のように長らく本国勤務では無理も無い。私自身は親日家で知られるがその点で彼が差別されることはないしこうして太平洋全軍の指揮を任されているあたり本国でも信頼されているし、あのアーネスト・キング元帥とも個人的な交流もある。

その時に紹介されたのが彼の副官をしていたチハヤ・キサラギだ、その当時は大佐だったが、あの若さと日系人という事で、海よりも差別が酷い本国勤務で大佐まで昇進し、しかも艦隊の副官を務める

など相当の努力と才能が無ければあの当時では考えられないことだった。

女性としての魅力は少々小さくそれを少しコンプレックスに思っているようだが、逆にキングはその恥らう姿が可愛いと、酒の席の時にこっそり教えてくれたし、私もあの猫のような可愛さというかなんと言うか、そう、彼女はいつも機嫌が悪そうなのだがそれゆえに如何してもかまってあげたくなって素敵な笑顔を何とかして見ようと画策したり彼女個人とも個人的に話す機会があったのだが、中々に頭の切れがよく前にキングに聞いたがアメリカ海軍で誰が一番頭がいいかと聞いたら一番はスプランスで、女性の限定すればチハヤだと言っていた位に彼が彼女を傍から離さないのも納得がいく。

恐らく今回の作戦参加も彼女を可愛がったの事なのだが、恐らくその内側わ酷く冷徹な判断も働いている。

日系人部隊は冷遇はされてはいないがとかく特別扱いもされてはいない為余り士気が高いとは言えず本国で収容所送りにされている家族の事が心配で積極性にも欠けている。

そんな彼等に同じ日系人であるチハヤがガメラ力人と共に作戦を行うとなればこれは彼等の士気も大いに上がるし、本国の五月蠅い連中（白人優位主義者）を黙らせる効果もある。

後は個人的にだが、スプランス提督は初戦こそ敗退したものの彼の指揮は自軍の被害を少なくし堅実で必要ならば撤退する柔軟さと勇気も持ち合わせている、逆にウィリアム・ハルゼー提督なのだが、本当に同じ姉弟かと思うほど苛烈な性格で敵を見たら真っ先に突っ込んでいくその姿から「猛牛^{フル}」と呼ばれ敵に突っ込みすぎて引くことを知らない一面もある。

そしてチハヤ・キサラギ提督だが、今回が初陣とは言え彼女の指揮は堅実を胸とし実際に何度か士官学校の成績を見たが特に防御や防衛に対して余人を寄せ付けないほどの鉄壁を誇り（決して彼女のボディーを指して言ったのではない。ところで今72とかいった君、後で私の部屋に來なさい。いいね。）すこし人間的に硬い一面もあるが、彼女の指揮に間違いは無い。

一見するとバラバラの様に見えるが、上手く機能すればこの陣容は先の先まで見越した事が透けて見える、ハルゼーの突破力で敵艦隊を崩し、スプルアンスが穴を広げて戦果を拡大する。

敵が反撃に出てもチハヤが鉄壁の布陣で防ぎ、敵の意図を挫く。

この三提督が強力をすれば恐らくガメリ力最強の艦隊が出來上がるはずだ。

故にこの戦いは彼等にとっても、そして今後のガメリ力海軍の未來にとつてもある種の試金石であり、そしてキング元帥が目指す未來のガメリ力艦隊像もこれにある。

まあ、今は理解されなくとも、彼らはおのずと自らの力で証明することだろう。

「貴官は確かに優秀ではあるが、少々視野の広さに欠けるな。それでは副官は務まっても一軍を率いることは出來んぞ。」

そう言つて副官をからかつたあと、私は目を作戦室のモニターに移し作戦の推移を見守つた。

18（後書き）

アンケートの結果圧倒的に史実ルートが多かったので、帝さまには
廃位にに成ってもらいついでに南雲さんと小澤ちゃんはガメリカ兵
の慰み者に、利故里ちゃんには戦犯として裁かれてもらおうかなと
考えていますがどうでしょうか？

まあ、とりあえず史実ルートいきたいと思います。

ラバウル星域ポートモレスビー要塞

日本艦隊は後退するガメリカ艦隊を追撃し、遂にラバウル星域の要所ポートモレスビーにて決戦を強いる事になる。

要塞を挟み込むように、ガメリカ艦隊が展開し日本艦隊を迎え撃つ。対する日本艦隊は山本無限提督率いる第二連合艦隊。

柴犬さま、有馬提督、栗田提督、ランファ提督、を加えた五人の提督のほか、本来ならば東郷長官率いる第一連合艦隊も加わり総勢九個艦隊になるはずであったが、ないものは仕方が無い。

そう割り切って現在比較的防備の薄い要塞側面を守る駆逐艦隊に攻撃を仕掛けているのだが……。

「ランファ提督艦隊被弾！！、ダメですこちらのミサイル、敵の強力なジャミングに阻まれて命中しません。」

「陣形を崩すな、敵の懷に入るんだ。我々が突破せねば山本提督が危ない。」

日本艦隊はなけなしの物資を使い、ミサイル巡洋艦や駆逐艦を量産したのはいいが、流石に地の利は敵にあるのか、比較的防備の薄い艦隊前面には機雷陣が張られ、側面から回り込もうともその頭を押さえられ中々攻めきれない。

柴犬さま率いる艦隊は、要塞攻略を任されて入るが、ジブラルタル、スエズ、と並び証されるほどのポートモレスビー要塞の守りは堅く、柴犬様艦隊が保有する妨害（ミサイル攻撃軽減）をもつてしても攻め切れなかった。

「うむ、敵の守りが堅いな。これでは陸戦隊を突入させられん。一旦艦隊を我方の後方に隠せ。一度策を練り直す。」

「了解しました、しかし、まさか一年足らずの期間でここまでの要塞を作り上げるなど、信じられません。ガメリカは一体何処からこれをもってきたのでしょうか？」

「ガメリカと我日本国の国力差は優に三十倍。だが、いま目の前で戦ってみて分かったが、量以上にも質も我々とは段違いらしい。これは苦しい戦いに成らざる終えん……。」

実際目の前にあるポートモレスビー要塞は、人工の球体状の要塞で、通常の小惑星などを改造して物ではなく、一から作り出したのだと分かる。

要塞を丸々一つ作るのを僅か一年足らずで行うなど、到底日本ではいや世界ではガメリカでしか出来ないことだ。

周囲に張り巡らされた対空砲火とミサイルの発射口、広域攻撃（全体攻撃）スキルもちの妨害もちであり、こちらの攻撃は駆逐艦の肉弾特攻以外さして効いてはいない。

此方も被害は軽微とはいえ、体力勝負では時間を余りかけられない此方はあまりに不利。

一度体制を立て直してから再度攻撃するしか手はなかった。

「うふふふふ、さあ、どうやってこの攻撃を凌ぐのかしら？」

フリス・ハルゼー提督率いる航空艦隊は満足な対空防御を持たない山本艦隊を翻弄する。

エセックス級エセックスから発艦するワイルドキャット、コルセア、ドントレスの編隊。

戦闘機まで爆装し日本艦隊に襲い掛かる。

対する日本艦隊提督、山本無限提督は敵が見えないうちから攻撃をされ苦戦を強いられている。

「全艦陣形を崩すな。なにこれしきじゃあうちの船は沈まん。それよりも敵はまだ見えねえのか？」

「はっ、航空機からの長距離攻撃で此方が索敵する前に攻撃されてしまい、今は迎撃で手一杯です。他の戦域も苦戦しているらしく状況はかなり深刻化していると思われます。」

周りの船も、航空機からの攻撃で浮き足たち、山本提督は本国で開発中の試作防空艦を持ってこなかったことを後悔するも、無いものねだりは仕方が無い。

今は浮き足立つ艦隊に檄を飛ばし、何とか耐え忍ぶしかない。

だが、状況は一瞬で動いた。

突如として出現したデーニッツ提督率いるドクツ潜水艦隊がポートモレスビー要塞の懷に入り込み、要塞に向け鉄鋼弾を放つ。

突然の事態に迎撃も間に合わず、要塞に直撃した鉄鋼弾は要塞を中破させ、その機能を低下させる。

ポートモレスビー要塞からスキル妨害がなくなりました。
ポートモレスビー要塞のスキル広域攻撃が連続攻撃にランクダウンしました。

「デーニッツ提督！！」

「作戦成功です。急ぎこの要塞から離脱、柴犬提督と合流します。」

戦果を確認した潜水艦隊は急速潜航で亜空間へと戻り、再び戦場から姿を消す。

「柴犬さま！！作戦成功です。デーニッツ提督の攻撃が成功して要塞の防備が弱まっています。」

「うむ、今なら陸戦隊を突入できるな。全艦陸戦用意！！攻撃を集中させて陸戦隊の道を開くぞ。」

号令と共に要塞にミサイルが雨霰のように降り注ぎ、強固な防壁を吹き飛ばし要塞の無防備な内側を曝け出させる。

「フリス提督、要塞が．．．．．ポートモレスビー要塞が燃えています．．．．．。」

「くつ、まさか日本軍がここまでやるとは、迂闊ドクツからの支援艦隊を軽視し過ぎたか．．．．．。急ぎ要塞の救援に向かうわ、攻撃隊を一度戻します。」

フリス提督はちらりと横目に見た日本艦隊の状況を見てこれなら無視していいと思った。

既に山本提督の旗艦いか損傷していない艦は無く、装甲の薄い駆逐艦や巡洋艦の多くは撃沈され残った艦は満身創痍と言ってよい。

フリス提督は敵に止めを刺す事無く、先ずは炎上する要塞の救援に向かおうと指示を出す、賭博士山本提督にとってそれは決定的な隙となる。

「敵の攻撃隊が引いたな．．．．．。皆よく頑張ったぞ、それ一気に敵艦隊目指して駆け抜ける！！」

旗艦のエンジンが唸りを上げ、満身創痍にも関わらず出力を上げる。

それに習うかのように、多くの船が爆発の危険があるにもかかわらず、フリス・ハルゼーの艦隊に特攻していく。

一瞬の間、だが戦場では致命的なものになる。

それが山本無限相手ならば、最早相手に逃げるすべは無い。

「敵艦隊速力上昇！！我艦隊に突っ込んできます。」

「何ですって！！攻撃隊を戻したのが仇となったか……再攻撃は！！」

「全機爆装中であと三十分は発艦不可能です。」

「やられたわね。駆逐艦隊を囷にして本艦だけでも退避するわ。」

フリス・ハルゼー提督は思わぬ事態でも何とか冷静さを取り戻し最良の指示を出す。

航空機以外にさして攻撃手段がない空母が砲火を交える前線に出たところで大きな的に過ぎない、ならばここは駆逐艦を見捨ててでも体制を建て直し、要塞の救援に向かわねば。

だが、山本提督は駆逐艦は愚か、空母を逃す気はさらさら無かった。

「有馬の嬢ちゃんも駆逐艦の相手を頼む。おりゃあ敵旗艦を討つ。」

艦隊を二手に分け、追いつがろうとする駆逐艦隊には有馬提督率いるミサイル巡洋艦隊が中距離ミサイルを浴びせかけ、針路を妨害する。

「山本提督の邪魔はさせない。全艦砲門開け！！今までに散っていった味方の無念を晴らすぞ。」

ミサイルの一斉発射が駆逐艦隊を襲い、至近距離用の鉄鋼弾しか持たぬ駆逐艦隊は反撃する暇も無く、その無防備な横っ腹にミサイルが次々と命中する

「がはっ！！、日本軍め……………フリス提督、お逃げ下さい。」

ミサイルの直撃を受け、駆逐艦隊旗艦艦長は火が吹く船の中、最後の言葉を残し業火に飲まれていく。

「駆逐艦隊全滅！！敵旗艦此方に突進してきます。」

「くう、許せ。旗艦最大全力で回避よ、なんとしてもこの船を守るの。」

フリス提督が必死の指示を出すも、既に山本提督はフリスの乗るエセックス級空母をミサイルの射程に収めていた。

「さあて、今まで散々やられてきたんだ。そろそろツケを払ってもらうぞ。ミサイルサイロ開け、目標的旗艦、全弾発射ああ。」

山本提督の乗るミサイル戦艦から数百発ものミサイルが飛び出し、回避も間々ならない空母へと突き刺さる。

「ミサイル着弾！！第一区画に火災発生、甲板大破。」

「ここまでね。総員退艦、キングストン弁を開きこの船を自沈させます。総員急げ！！」

フリス提督は逃げられるのを悟り、総員退艦の命令を出し、自身も救命艇へと向かっていく。

そして……………。

「山本提督、敵旗艦の轟沈を確認。我々の勝利です！！」

その報告に一気に艦橋は沸き立つ。

自分達を苦しめた敵を漸く討つ事が出来たのだ。嬉しい筈が無い。

山本提督も一息つけたのか、漸くいつもの不適な笑みを取り戻し、疲れた体を司令席へと横たえる。

「お疲れ様ですわ山本提督。」

「おお、古賀の嬢ちゃん。いやなに、これしきのことなんざあ屁でもねえわ。」

「もう、山本さんたら。」

こうして戦場の一角が崩され、ガメリカ海軍は追い詰められたかに見えたが．．．．。

「そろそろ例の作戦の時刻ね．．．。日本軍には勝利に浮かれるのはいいけど、足元には精々注意することね。」

救命艇の窓から、通り過ぎる戦場を眺め、フリス提督は不適に微笑む。

ポートモレスビー要塞

炎上する要塞の中、必死の救助作業と消火作業が行われている。

「3ブロック先のセンターで火災が発生したぞ、延焼を防げ!!」

「防火マスクを早くもってこい、肺が焼かれるぞ」

「緊急消化装置を作動させてください、このままじゃ皆焼け死にます」

「馬鹿野郎!! そんなことをしてみろ、残った連中皆死ぬぞ。いいから早く消火作業に戻れ、敵は直そこまで来ているんだ」

デーニッツ提督が打ち込んだ鉄鋼弾は元々築城用工作レーザーターチを改造して作られたもので、鉄分を多く含む隕石に穴を開けるために特殊な熱を発生させ溶かすというもののだが、日本軍はこれを兵器に応用、一点に熱を集中させることにより、分厚い装甲に守られた戦艦の内部へと侵入し内側から熱によって破壊する用に作られた。

しかし、装置は大型化し、日本軍ご自慢の特雷型駆逐艦でさえ搭載できず、結局お蔵入りになったのだが、これに目をつけた東郷長官の命によりデーニッツ提督率いる潜水艦隊旗艦潜水母艦フアルケンナーゼに二発だけ搭載する事が出来、今回の作戦に投入された。

そして、その戦果は、見ての通り要塞の表面が真っ赤になって溶け

出しているのを見れば、どれ程の威力なのか分かるだろう。

「私たちがした事とはいえ、恐ろしいものですね」

デーニッツは一度戦場を離れ、補給作業を行っている傍らモニターに映る要塞の姿に、自分たちがやった事とはいえ空恐ろしいものに見える。

「ええ、日本軍の兵器も侮れません。これは本国に報告すべきでしょう」

そんなデーニッツの呟きに対して、副官が少々デーニッツの思いとはずれた事を述べるが、今更それを訂正する気にはなれず、デーニッツはただモニターを睨み、

「……………そうですね」

とだけ呟いた。

ガメラ力駆逐艦隊と戦闘を繰り広げるリンファ提督は要塞が攻撃を受けたと共に浮き足立つガメラ力海軍の隙を突き駆逐艦を特攻させる。

今までの戦闘で殆どのミサイルを撃ちつくし、命中弾を望めなかつ

たが、しかし、至近距離からの一撃はどうかと田中提督から借りた特雷型駆逐艦戦隊を敵中央に突入させる。

「栗田提督も合わせてお願いします。駆逐艦の突入で敵が崩れ次第一気に本星へと突入します。」

「リンファ提督危険だ！！幾ら敵が浮き足立つとはいえ本星にもそれなりの戦力があるだろう、貴官等だけでは危ない。」

「いいえ、此処で私が行かなければこの戦い、勝利は危うくなります。栗田提督には此処で残った敵を牽制してください、後は私が引き受けます。」

栗田提督はモニターに映るリンファ提督の真剣な表情に、しばし考えた後、

「分かりました。ですが貴官等だけでは些か心もとない。私の方から安芸倉と蔵持両艦長を提督に預けます。どうか御武運を。」

リンファ提督に栗田提督のみならず、艦橋にいるもの全員が敬礼する。

それに答礼を持って応じたリンファ提督は艦隊を敵本星に向け発進させる。

20（後書き）

そういえば忘れていましたが、捕虜になったブラッドリー提督の話
をどこかで入れようかなと思います。

まあ、大体が予想する展開になりますが。

21（前書き）

本当なら昨日の夜八時くらいに投稿したのですが・・・何を間違ったのか投稿した作品が消えていましたorz

とりあえず思い出しただけ乗っけておきます。

ランファ提督の必死の突撃により、日本軍は遂にラバウル本星の上空を押さえることに成功する。

後方で控えていた山下利古里陸軍長官率いる陸軍は強襲揚陸艦「チハ」に乗り込み、真つ直ぐ一心不乱に制圧の為降下していく。

ワープゲート近海某所

「どうやら予定通り間に合ったようだな。敵が本星を”制圧”したら直に作戦を開始する。」

「しかし被害が大きすぎるようだな。私に全て任せればこんな事には成らずにすんだものを。」

「大層な自信ですこと。貴方も姉と同様占いで未来が見えるのです？」

「何を、小娘め付け上がるな！！総司令官閣下に取り入ったからといっていい氣に成っていられるのも今のうちだぞ。」

「おい押さえろ、作戦前だぞ。君も余り出過ぎた発言は控えるように。私を含めこの艦隊の誰一人として君をまだ認めてはいない。」

「では、その小娘の実力とやら。得とご覧に入れましょう。」

「ふん、精々足元をすくわれないうちに気をつけることだ。私は船に戻るぞ。」

「はあ、以上で解散とする。以後作戦開始まで無線封鎖とする。」

ラバウル本星の制圧、その報告でやっと戦闘が終わったと誰しもが緊張の糸を解し、周囲のものと肩を叩きあいながら勝利を祝っている。

山本提督も、少しばかり嬉しそうに目を細め今ベトナムで戦っている東郷長官勝利報告をしようとして……………。

「!?レーダーに大規模質量反応……………隕石?いやこれは…………艦隊です!!」

オペレーターの報告でにわかに活気づいていた艦橋がシーンと静まり返る。

なおもオペレーターは自らの職務を果たすべく詳細を伝える。

「ラバウル北のハワイ方面のワープゲートから寒帯が出現。識別信号はガメリカ海軍、数は凡そ三個艦隊、真っ直ぐ此方に向かってきます。」

「総員戦闘配置。全艦に通達、敵の増援だ。しかし何で今更このタイミングで……いや待てよ、クソ嵌められたか。山下長官に通信を繋げ!!」

「ダメです長距離通信はジャミングされていて届きません。」

「やりおるの。取り合えず有馬の嬢ちゃんと合流するぞ、このままじゃあ各個撃破の好いのだ。」

「行け行け行け!! KILL JAPS , KILL JAPS ,
KILL MORE JAPS . 日本人を一人残らず皆殺しにする。」

ハルゼー提督の掛け声と共に第三艦隊を自慢の高速空母から発艦するドントレスの編隊が中央の柴犬提督に襲いかかる。

「焦らずに行け。相手は手負いだ無理して追わなくていい、確実に仕留めろ。」

スプルアンス提督が左翼の山本艦隊を補足し、駆逐艦隊を両翼に伸ばして包囲しようと試みる。

「我艦隊が敵ともっとも遠い、ならばその分早く到達せねば。戦場を真つ直ぐ駆け抜けなさい。勝利は目の前です。」

右翼の押さえ、そして今回の作戦で肝となる要所を押さえにチハヤ提督は船足を急がせ、その姿はまるで鳥が空を飛ぶような勢いだ。

「ヤレヤレ、ろくに合流もさせてくれないのか……全艦砲門開け、敵に攻撃を集中。」

山本提督はいつもの不適な笑みを絶やさず、部下たちを叱咤激励しながら指示を出す。

「山本長官が来るまでの辛抱だ、皆耐えろ。」

とは言いつつも、敵の手際から考えて山本提督も敵と戦っているだろう、デーニッツ提督は右翼に回したのが痛い。しかし、無いものの強請りは出来ない。

柴犬提督は堅実な防御を引きながら、相手の攻撃に備え、少しでも多くの時間を稼ごうとする。

「くっ、ランファ提督、間も無く敵が来ます。早くお逃げ下さい。」

「ダメです、今逃げては陸軍が取り残されてしまいます。彼等を見

捨てる事は出来ません。」

「しかし、そのままでは敵に……………」

「栗田提督、貴方は一刻も早く東郷長官にこの事を知らせてください。今艦隊の中で動けるのは貴方だけです。」

「ランファ提督!!」

「最後に東郷長官に『貴方をもつと共有したかった』とお伝え下さい。」

そこで通信が途切れ、何度も何度も栗田提督はランファ提督の名を叫ぶも、時間だけが無情に過ぎていく。

「提督、あと三十分ほどで敵の先遣隊と艦隊が接触します。ご指示を!!」

「くつ、急速反転全艦機関最大、全速でこの星域を離脱する。」

栗田提督は後ろ髪を引かれる思いながら、しかしこれが最善の手だと分かっていた。

だからこそ彼はたとえ卑怯者の謗りを受けようとも、命令を全うするのだ。ただ、彼に一度も本当の笑顔を向けてくれなかった一人の女性の為に……………。

21（後書き）

大帝国の次回作があれば要望みたいな、
今回みたいな戦場に行き成り敵が割り込んできたり増援があつたり
とかしたら面白そう。あと要塞を建築できれば戦術戦略の幅が広がるかな．．．．。

22（前書き）

今回の話は実際にゲームをプレイした人達には完全にネタバレになりますが、日本軍敗北と言ったらこれしかありませんね。

これからどんどん日本軍が惨めな状況になっていきますが、最後までお付き合い頂けると幸いです。

日本帝国首都星日本

その御所内御前会議の会場は何時に無く重苦しい雰囲気包まれている。

帝も、宇垣も、東郷も、そして柴神さまも、全員が押し黙っている。

「・・・・・・・・東郷」

「・・・・・・・・申し訳ありません、此度の攻略戦の失敗は全て私に責任があります。」

東郷は深刻な表情で帝に深々と頭を下げ、海軍長官就任の際帝から直々に渡された小刀を帝との間におき責任を取って海軍長官を辞任する旨を述べる。

「・・・・・・・・ダメです。許しません」

「帝」

「帝さま」

宇垣も柴神さまもそれ以上は言えなかった。

ラバウル攻略戦の失敗により第二連合艦隊は壊滅、無事に生還できたのは栗田提督ただ一人だけ。

有馬提督は撤退の際重傷を負い現在も軍病院に入院中柴神様も旗艦を撃沈されるも何とか生き残る。

山本提督の艦隊も三隻を残して後は撃沈され、デーニッツ提督は被害が少なかったものの対潜装備を整えたガメリ力軍の前に撤退を余儀なくされ、ランファ提督は帰らぬ人となった。

ランファ提督は最後まで陸軍を守る盾として果敢に立ち向かい、そして提督以下全艦が玉砕する。

山下陸軍長官の生死は不明だが、未確認だが捕虜となったという情報もあるが彼女の性格を考えれば最悪…………。

「だって、今東郷さんにいなくなれたら私……………」

東郷を見つめる帝の目は、一晚中泣きはらしたのか、真っ赤になり、今も堪えるようになんとか瞳から涙が零れるのを我慢している。

「利古里ちゃんの為に……………私たちは前に進まなければなりません。貴方も、そして私もその為に背負わねばならぬのです。分かりますね、東郷？」

「はい……………」

こうして御前会議は重苦しい空気の中解散となり、各人が重い足取りを引き摺って御所から出て行く。

「……………私たちは、間違ったのかもしれない……………」

「帝．．．．．」

この日を境に日本軍は急速に支配星域の統治能力を減退させることになる。

良くも悪くも陸軍と海軍とを二つに分けていたことによる分業体制が山下長官がいなくなるのと同時に崩れ、陸軍は各地で分断され各々勝手な行動を取るようになりそして悲劇が起ることになるのだが．．．．．。

ガメラ力共和国統合軍総司令部

アーネスト・キングはガメラ力史上初の元帥に昇進し名実共にガメ

リカ海軍のトップとしての重責を担うようになっている。

「分かった、既に報告書は受け取って入るが此方も被害はばかりにはならん。ラバウル防衛艦隊は一度本国に戻して休養を兼ね再編をさせる。恐らく日本軍はこれ以上動かんだろう、今のうちに戦力を補強する」

キングはガメラ力軍ハワイ総司令官ニミッツ大将と通信を繋ぎ、報告と以後の基本的な指示を出していく。

ガメラ力軍ではキングがトップになってから基本となる戦略は本国で指示を出す、前線でのすり合わせや戦術などはその方面の指揮官に一任されている。

これは、太平洋のチェスター・ニミッツ、大西洋にドゥービル・ドワイト両大將がいるからこそ出来る事であった。

キングは両大將を信頼しまたその実力も遜色ないものと認めているからこそ、自分は表に出る必要もなく、また軍政家としての職務に専念出来るのだ。

「それとフリス・ハルゼー提督だが、彼女には一度此方に寄越して貰いたい」

「分かりました。今後とも日本軍には積極的に攻勢はかけず体力を消耗させます」

「此方も海軍情報局を動かして占領地の住民を扇動させる。何れ植民地人と日本軍が争いあえば、此方も無駄な犠牲を省けるというものの。」

「余り陰謀は好みませんな」

ニミッツ大將はその性格から余りこの手の謀略は好まないが、それよりもキング提督の何を犠牲にしても構わないという態度に少々懸念を持っている。

「こちらの被害が彼等の血で代えられるのなら、私は何億死のうとも一向にかまわん」

だが、キングはキングでガメリカ海軍を預かる以上必要以上の犠牲は払いたくない立場にいる。

その為、時として非情な決断も下さなければならない。

それが時として敵味方共に冷酷と思われる要因にもなるのだが．．．

．．．結局は彼もまた一人でも多くの軍人を家に帰そうとするニミッツと同じ心で動いているのだ。

その手段や方法が彼とは大きく違うだけで。

「それよりも敵の大将を捕虜にしたそうだな。心配は要らないとは思うが条約に則った対処はしているな？」
ジェネラル

「はい、しかし苦勞しました。完全に偏見に凝り固まっていて何度も脱走を企てたり暴れたりで常に監視をしていなければ何をするか分かったものではありません。食事にも手をつけませんし、このままでは色々と問題が．．．．．」

キングは自分の転生した時の予備知識として今の日本軍の陣容は大

体暗記していたが、しかしそれはあくまでゲームの話であってこの世界で四十年間生きてきた中で此処も現実と変わらないと思っている。

だが、ニミッツが手を焼くほどのじゃじゃ馬っぷりはやはり彼女らしいといえばそうだが、笑い事では済まされない。

「近々私はハワイに行く。その時に会うことは可能か？」

「！？閣下自らが御出でに成る程では御座いませぬ。下手に会えば閣下の身に危険が……。」

「別に態々捕虜一人に会いに行く為に本国を離れるわけではない。一応これも本国からの要請でな、何でも『他国の海軍長官は前線で将兵の士気を鼓舞するのに自国の長官が前線に出ないわけではない』と、私を本国から遠ざけたいのさ」

「如何してそのような要請をするので？」

「大方選挙が近いから軍の総大将は他所に行つて欲しいのさ。連中は私がクーデターを起こすと考えている」

「まさか、閣下のような人が国家に叛旗を翻すなど考えられません。恐らく閣下を貶める為の罠かと」

「まあ、大体はそうであろうな。だが、前線に出て士気を鼓舞することも重要な役目だ。大西洋も動きがあることだし防戦一方の将兵の慰めにでもなればとも私も思う。それではよろしく頼むぞ」

「はっ、それではこれで失礼します。」

通信が切れ、執務室には静寂が戻る。

はあ、しかしチハヤがいないと書類が片付かん。経験を積ませる為とはいえあれを長く前線においておくと今度はこっちが動けなくなっています。（物理的な書類の意味で）

副官や秘書を探そうにも優秀な人材は他所に遣ってしまったからな、仕方がない、多少効率は落ちるが重要でないものは人数でカバーして少しでも減らすか。

キングはチラリと、机の引き出しから写真立てを取り出して、愛おしそうに手で触れる。

「君の為に早くこの戦いを終わらせたいよ．．．．．その時が来たら一緒に墓参りにでも行こう。」

再び写真立てを引き出しに戻し、キングは統合軍総司令官としての顔を貼り付けて再び圧倒的物量で迫り来る書類との戦いに戻るのだった。

22（後書き）

ドクツサイドってやった方がいいのかな？

色々とチート過ぎる人材が多すぎるところだけど・・・。

太平洋ハワイ星域

その宇宙港に一隻の連絡船が着きタラップからカーキ色の軍服を着た男が降り立った。

降りた先で、ニミッツ大将以下太平洋艦隊のお歴々が並び軍楽隊の歓迎曲が鳴り響く。

「お待ちしておりましたキング元帥。」

チェスター・ニミッツ大将が降り立った男に敬礼をして回りもそれに続くように敬礼する。

ふと、そこに見慣れた蒼髪の少女の姿を認め、少しホツとした後にニミッツに答礼をして嬉しそうに笑いながら彼の肩に手を置く。

「こうして実際に合うのは随分と久しぶりだなニミッツ。変わりはないか。」

「ええ、おかげさまで。それよりも随分とお早いお着きで、碌な歓迎も出来ず申し訳ありません。」

「いや、今は戦時中だ。華々しい式典は全てが終わってからだ。それよりも基地を見て回りたい。案内を頼めるかな。」

「では、此方へ、車を回してきます。」

こうして二人は談笑しながら極めて友好的な雰囲気を作り出し、並居る将官達は少しだけホッとするのだ。

前々からキングは就任直後の強引な人事移動や容赦のない更迭から海軍内部で恐れられ特に若い士官の間では絶対に怒らせてはいけないと半ばアンタッチャブルな存在として噂されてきた。

が、実際こうして彼等の目の前に現われたのは長身の紳士で、その毅然とした態度は自分達の頂点にいる人物として相応しいと思えた。

まあ、ただ一人ジト目で見ている一人の女性提督を除いてだが．．．

無機質な鋼鉄の壁に覆われた独房の中で、山下長官はベッドに蹲り一人耐えていた。

ラバウル攻略戦の折、虜囚の辱めを受ける位ならと玉砕を覚悟した

ものの、帝の「命を無駄にしてはなりません」という言葉を思いだし、部下の安全と引き換えにこうして囚われの身になっている。

だが、捕虜となっても山下長官は帝国陸軍軍人としての誇りを保ち、こうして一人だけの戦いを繰り返しているのだ。

そんなある日、久しぶりに独房の扉が開き山下長官はドアの前に立つ男を見て、いつも如く威嚇するように眉間に皺を寄せて強い口調で言う。

「尋問かそれとも拷問か。どちらにしろ私は決して屈しはしない。」

だが、ドアの前に立つ男の顔に見覚えがなく新しいものでも来たのかとうすうす感じてはいた。

「成程な、ニミッツが手を焼くわけだ。まあ、これだけの口が叩けるのであれば大丈夫だろう」

男は少し可笑しそうに目で笑いながら山下を見た。

その目の動きに久しく忘れていたあの東郷毅の女を見る目に似ていてそれに気付いた彼女はゾワツと体を身震いさせる。

さてはコイツ、私を手籠めにするつもりか！！そうはさせない、帝国陸軍人としての誇りを見せてやる。

と、勇んで身構えるが、それが更に面白いのか男は遂に噴出してしまふ。

「貴様、この私を愚弄するか！！鬨るならさっさと鬨れば好いでは

ないか。」

「いやいやこれは失礼。貴方が私のことを尋問官か何かと勘違いしているのが可笑しくてな、貴方が来た当初のニミッツの苦勞が目に浮かんで少々愉快なのだよ。」

「貴様は何者だ？ニミッツとはこの基地の司令官の名前ではないか、それを呼び捨てにするなど…………。」

山下長官は益々読めない相手に警戒心をあらわにして一向に気を緩める気にはならない。

「これは失礼、自己紹介が遅れてしまったな。私はアーネスト・キングだ。ガメリカ共和国統合軍司令部総司令官兼海軍作戦部長兼…………。まあこれはいいか、君たち風に言えば海軍長官だな。」

山下は思いもしない大物を前に目を見開き益々身を硬くした。

「ああ、そう気張らずともよい。まあ無理だろうがな。」

少なくとも自分に危害を与える気はないのだろうが山下には何故彼がこんな所に来たのかまるで分からなかった。

「日本の將軍ジェネラルを見に来た、では不満だろうな。まあ私もそこまで暇ではない。」

自分の心を読まれた！？いや、ともかく如何してこう海軍長官というのはこうも掴めないものばかりなのだ。

「貴官も自国のツヨシ・トウゴウ海軍長官との間で苦勞したそうだ

な。まあ、得てして海の男とはそう言うものだ。」

「……貴方は我国の海軍長官をご存知なのか？」

これは個人的な質問なのだが、彼女等日本軍にとって相手が誰だろうと帝の命があれば戦うだけ。

それゆえ相手が何処の誰かなどあまり知らないものが多いのだ。

「東郷は私が教官だった時に教えた生徒の一人だ。教え子が海軍長官となったのだ、知らないはずがない。」

山下は東郷が現ガメリカ海軍長官の教え子だったという話に驚愕を受けた。それが本当なら今回の戦争は師弟対決に他ならない。

「無論だからと言って手加減するわけにはいかない。互いに敵味方に分かれた以上互いに互いの国家に尽くすのみだ。」

「……私は余り彼とは親しくはない。もしんば何か知っていたとしても話す気はない。」

その答えも折込済みなのかそんな事を聞きに来たのではないと彼は首を横に振り、こう言った。

「なに、此処に来たのは嘗ての教え子の話をしたかったただけだ。では、邪魔をしたな……。あとそうそう、我々は国際条約を遵守することを旨とする。故に捕虜は恥ではなく寧ろ無駄な犠牲を払わずにすんでくれた貴官の行動を私達は尊敬する。我々は例え敵でも優秀な軍人には敬意を払う、ではこれで失礼する。」

彼女が如何してそれを？と尋ねる暇もなくキングは独房を去っていった。

しかし、少しながら彼女の心の中で変化もあった。

ガメリカ人にも話ができる奴がいると。

「では、私にカナダへ移動しろとそう言う訳ですね？」

「ああ、貴官等はの艦隊は現状では作戦行動に耐えられないと判断した。よって貴官等の艦隊を再編成する為に本国に戻し、貴官の休養もかねてカナダへと飛んでくれ。」

「ふふふ、ニミッツ大将それは移動ではなく更迭というのでは？」

フリス。ハルゼー提督は辞令を受け取りながら皮肉を言う。

「それについては私が話そう。」

ふと、聞きなれない声がして思わずその方を見てみると、そこには椅子に座るキング元帥がいた。

「これはこれは元帥閣下、盗み聞きとは余り感心は出来ませんわ。」

「フリス提督、そもそも今回の移動は元帥閣下直々の命令なのだ。」

「どういふことですか？」

フリス提督がそう尋ねてしまうのも無理はない、現在部屋の中は彼女を含め三人だけ、つまりは他人には聞かれたくない話なのかそれとも……。

「君は知らないと思うが現在我ガメリカ海軍と本国との間は非情に

微妙な関係といってよい。」

「本国との間が．．．海軍と？」

「詳しくは話せないが君にはカナダに飛んでノイマン管轄の研究所を監視してもらいたい。」

「表向きには先程言った通り再編を兼ねた休養だ。君の祖母は確かスぺディオ出身だったな、そこで何が行われているか興味は無いかな？」

「．．．．．それを聞けば戻れそうもありませんね。いいでしょう、お聞かせくださいませんか？元帥閣下」

「まさか．．．．．ガメラカがそんな事を。」

「残念だが事実だ、これはラングレーと海軍情報局のものでもごく

一部のものしか知らない。今から君はその一員となったのだよ。」

「如何するかどうかは君が決めてもかまわん。」

暫くフリス・ハルゼーが俯いて考え込み、そして顔を上げて挑発する様ないつもの笑みを浮かべて、

「閣下は私がこの話をノイマンに漏らさないとお考えなのですか。」
と。

「もしそうなら私の見る目が無かったただけだ。我軍は優秀な提督を一人失う。」

「露骨な言い方ですこと。」

「生憎とジョークは苦手だね。」

「ふふふふ、分かりましたわ。微力ながら閣下とガメリカの為に力を尽くさせて頂きます。」

フリス提督は笑みを浮かべながら部屋を退出していった。

「……本当に彼女は信用できるのか？」

「今の私たちにとってこの海軍こそが矛盾であり身を守る盾だ。贅沢は言ってられん。」

「分かった、太平洋は任せてくれ。君は本国を頼む。」

「ああ、この国の為に、な。」

ブライトンヒルズ

大統領執務室裏の秘密の部屋で、若草会のメンバーが定例会を開いている。

「これより定例会を始めます。まずは私から、戦線が安定してきて欧州から逃げてきた資産がガメリカに流入して各企業の業績が上がっています。金融市場も軒並み上昇傾向にあるのでこの分ですと嘗ての損失を直にでも回復できるでしょう。」

「あれ、ちょっと待ってまだノイマンが来ていないわよ。どうしたの？」

キャロル・キリングが指を折って人数を数え、一人いない事に懸念を示す。

「ノイマンは今回も欠席。ガメリカ海軍からの要求と例の”あれ”の開発で身動きが取れないわ。」

「ああ例のCOREシステムね。本当に大丈夫なの、あれ結構やばそうじゃない。」

「ガメリカ海軍が私達の統制を離れた以上、以前のように動かすことは出来ません。私達の身を守るためにも独自の戦力は必要です。」

「その為のCOREよ、幸い議会の承認は得ているから表向きは新開発の艦隊運用システムで通しているから資金は潤沢だし彼女の才

能があればそう遠くない内に完成するわ。」

「ふーん、そんなものなのかな。それよりもラバウルのあれ、上手くやればこっちに利用できたんじゃない。何でしなかったのハンナ？」

キリングは自分の専門外なのであまり興味はなさそうだが、しかし、今回彼女たちが集まる要因となった例のラバウル海戦の結果については大いに感心があるようだ。

「そもそも被害からして大きいのに何にもしないのって、可笑しくない。何かしらの処罰を要求してもいいような気がするけど……」

「いいえ、そもそも今回の実質的な被害は一個艦隊に最低限の防衛戦隊、後は要塞だけであれは元々コレヒドールに送る為に作られたものを持ってきただけだから使い潰すつもりで良かったのよ。それよりも僅か三個艦隊で敵の第二連合艦隊を壊滅させたのと敵のトップの一人を捕虜にしたのが大きいわ。結果から見れば大勝とも取れるし今まで防衛ばかりで鬱屈していた市民感情が久しぶりの勝利で浮かれているわ、そこに水を差すような真似は不味い。」

「はあ、ハーストが向こうに付いているから厄介よね。」

勝利に沸く市民を冷ますために彼女らは何度も情報統制や操作を行って市民感情を操作してきた、そして、あたかもそれが世論かのようにしてこの国を操る手段の一つにしてきたのだが、こと情報においてはノイマンに匹敵するハースト嬢が相手では、少々相手が悪い。

「一応こっちも動いているけど凄まじい手腕ね。彼女なら財団のト

ツプにでも立てるわ。」

「それ、聞かなかった事にしてあげる。あくまで私たちはそれぞれの一族を代表する立場よ、必要なら外の血も入れるけどそれは必ずしも財団の総意ではないわ。」

暫くハンナとキャロルとの間で無言の攻防が続くが、慌ててロスチヤが間に入って事なきをえた。

「取り合えず今後は暫くは静観ね。大統領選は戦時特例で一年延ばしたけれどそれ以上はないわ。」

「その猶予のうちにどれだけ票を纏められるか。デューイの他に何か隠し玉があるんじゃないかと不安になるよ。」

「まあようは選挙で勝てばいいんでしょう。誰しもが納得する形だね。」

こうして彼女たちは後手後手に回る中、それでも幾重にも策を張り巡らせるのであった。

26（前書き）

今日は終戦の日・・・・・・。

当初の予定ではこの日を最終回にするつもりだったんですけど、予定と筆が進まず結局そこまで書けませんでした。

少々駆け足飛びになりますが、最後は決めているので八月中に完結できればと思っています。

統一宇宙暦942年

日本軍はこの年起死回生の一手に出る。

ラバウル攻略戦において大敗を喫し、艦隊戦力の三分の一と優秀な人材を失った連合艦隊は、残存戦力を掻き集め無理をして開発して空母四隻を伴って一路ハワイ星域攻略を目指す。

参加兵力は東郷長官率いる第一連合艦隊と、第二連合艦隊の残存兵力を統合した平良提督率いる第三連合艦隊、今回の作戦の肝となる小澤提督率いる第一航空艦隊をあわせ延べ八十隻もの大艦隊がハワイ星域ミッドウェー小惑星帯まで侵攻して行く。

「長官、本当にこの作戦は成功するのでしょうか？あまりに場当たり的としか言いようのない物ではありませんか。」

秋山参謀が東郷長官に今回の作戦について思う所があるのか不満を示すが、

「どちらにしろハワイを何とかしない限り此方に勝ち目はない。それを分かっているからこそ平良の奴も自分の所から第三連合艦隊を持ってきたんだろ。」

東郷も東郷で今回の作戦が日本軍のひいては日本帝国の分水嶺だと

いう思いが強いのか、作戦前の不満は留めておけと暗に示す。

「そう言う事ではないのです。そもそも今回の作戦に当たってはあの愛国獅子団の連中が関わっていると専らの噂ではないですか。極右翼集団で平良提督も関係が深いとか。」

それでもなお食い下がる秋山に東郷は向き直ってため息を吐き、

「本当ならハワイ攻略はまだまだ早いと思っているんだ。だがあの作戦以来此方に対する風当たりが強くてな……………」

「東郷長官の処罰を一番強く求めていたのは他ならぬ平良提督ですからね、彼は危険です。余り隙を見せないように。」

「なぐに、大事な娘がいるのに死ねるかよ。それよりも作戦は抜かりはないな。」

「はっ、既に先遣艦隊展開を完了、索敵機を出して偵察を開始していますので恐らくもう間も無く敵を捕捉できるものと考えています。」

ガメリカ共和国統合軍作戦司令部

「では、閣下は近いうちに日本軍がハワイに侵攻すると？私はそうは思いません、連中の戦力からいってより確実に攻略できるラバウルを再び狙ってくることは確実です。」

「だが、既にラバウル攻略戦から一年が経過している。日本軍も陣容を立て直し今度は本腰を入れて狙ってくるだろうがしかしハワイは……………」

「そもそも閣下自らが今後日本軍が積極的な攻勢に出ることはありえないと仰っていたではありませんか。そもそも奴等が本当に攻略戦を仕掛けてくるなど、此方を攪乱するために偽情報ではないのですか？」

作戦会議室に集まった面々は口々にハワイ攻略戦をありえないもしくはその可能性は低いと見積もり従来どおりラバウルの防衛力強化を進言する。

「だが、追い詰められた奴は何をするか分からんぞ。連中の言葉で窮鼠猫を囓むという、慎重には慎重をきすべきだ。」

「海軍情報局では日本軍の暗号無線を解読した結果、日本軍に大きな動きがあることは明白です。詳しい情報はこれから更に解明していくつもりですが、何かしらの対策を講じねばと。」

「敵の狙いがハワイでなくとも、どちらにしろ大規模な戦力が投入される以上此方も主力艦隊を出さねばならん。幸いにして全艦の改修作業も既に完了し士気も錬度も向上しているが敵に先手を取られた以上受身にならざる終えない。どちらにしろハワイかラバウルかの一方に戦力を貼り付けねばならん。」

作戦会議室に集まった面々はそれぞれの立場からラバウル派かハワイ派か、それとも慎重論派に分かれて互いに議論を重ねたが、そこでアーネスト・キング元帥が、ハワイ太平洋総司令官を指して、

「ニミッツ大將君はどう思う？」

と尋ね、それに答えたニミッツ大將は立ち上がりこう答えた。

「十中八九日本はハワイを狙うでしょう。何故なら日本軍が先の攻略戦の失敗から陸軍長官が決まらず各地の陸軍の統制が取れず各植民地で軍閥かしています。その為占領地の植民地人も日増しに不満を溜めこれを鑑みるに日本軍には既に星域を占領し維持するほどの余裕はありません。その為海軍のみで作戦を行う以上攻略ではなくこちらの戦力を引きずり出しての会戦を挑んでくるでしょう。そして我々が艦隊を出さざる終えない場所、そうハワイに侵攻するものと私は見えています。」

「そう断言する君の理由は。」

「先にも言いましたが日本軍は既に余裕はありません。通商破壊によつて本土でさえ物資に困窮する有様と聞きます。これを解決する為には早期の戦争終結しかありえません。よつてガメリカ海軍及び市民にもつとも大きな影響を与えるのが……。」

「ハワイでの決戦による太平洋艦隊の壊滅。軍事的ダメージ以上に市民の間にこれ以上ないほどの動揺が広がるな。今でさえ本土では欧州第一で太平洋にはかまつてられないという論が強いのに、全く

」

キング元帥はヤレヤレといった風に首を横に振り、そして直さまいつもの厳しい表情に戻ると、

「ニミッツ大將は引き続き情報収集と諜報に当たつてくれ。それと他の戦域だが、そろそろ大西洋艦隊にも動いてもらう。そろそろエイリス単独では苦しくなる頃だからな。それと欧州反攻作戦の準備も抜かりないな。」

「はつ、二年越しの計画ですが既に必要物資の調達は完了し周辺国との調整も済んでいます。後はドクツの消耗を待つのみです。」

「それでいい、精々旧世界の人間にはドクツとの戦争でがんばつて貰いたいものだ。この戦争もあと二年だ、諸君等にはそれまで私についてきて欲しい。」

キングは立ち上がつて敬礼し、集まつた者達も全員が答礼した後、会議は解散となつた。

27（前書き）

今回は短いです。前回言ったばかりですが、こんなペースで完結するかどうか・・・。

統一宇宙暦942年

ミッドウェー小惑星帯に展開した日本の大艦隊を隕石にの陰に隠れて見つめている一隻の船がいる。

「ジャップはまだこっちに気がついてはいないな。連中の対潜装備がザルだと言っるのは本当らしい。」

ガトー級潜水艦の後継機であるバラオ級潜水艦バオフィツシュ艦長トーマス・ドッグ艦長は潜望鏡を下ろし、星図を見ながら情報を艦隊に送るためにゆっくりと移動するように指示を出す。

「よーし、連中に気付かれないよう此处を離れるぞ。方位．．．．．」

漆黒の船体が周辺の空間を歪ませながら、星星の煌きへと消えていく。

太平洋艦隊総司令官チェスター・ニミッツ大將は星図を見ながらしきりに敵艦隊発見の報がないかと傍に控える参謀に聞いている。

いつもの彼らしくないこの焦りも、今回の戦いが史上空前の艦隊戦であり、互いに航空母艦を要している以上、早期に敵を発見して先制攻撃をかけたほうが有利になる事から見れば未だに敵の正確な位置情報が分からない以上仕方がないことだ。

「総司令官殿、コーヒーでも淹れましょうか、気が安らぎます。」

副官もニミッツの目の下に隠しきれない隈を溜めた顔を見て、心配そうな顔をする。

「いや、今はいい。しかし……閣下ならばこのような時どのようなことを思うのだろうか。」

「閣下？キング元帥のことですか。私は元帥閣下のことは余り存じていないので、それでしたらご友人である総司令官殿の方が詳しいのでは。」

副官の返答に、ニミッツは「ふっ」と笑みを浮かべて首を横に振り、「彼とは長い付き合いだが、それでも時々思いもしない事があるから未だに分からん。まあ、こんな様では笑われてしまうからな、聞くに聞けないな。」

と、副官に向き直った時突然オペレーターが声を発し、今ニミッツが一番欲しい言葉を言ってくれる。

「斥候に出していた潜水艦隊より連絡、『ニイタカノヤマノボッタ』繰り返しします『ニイタカノヤマノボッタ』位置は……。」

「閣下!？」

「全艦出撃、攻撃隊を発進させろ!!折角の晴れ舞台だ、存分に踊って来い。」

ニミッツの命令と共に、息を潜めていた艦隊が俄かに活気付き、十二隻ある空母から次々と艦上攻撃機、艦上爆撃機が飛び立ち、ガイドビーコン波に従って編隊を整えていく。

その様子を少し興奮気味に見ていたニミッツに副官が傍に寄って「艦隊総司令部には何と？」と聞き、ニミッツは返す言葉でこう言った。

「ガメリカに日が上る。」

ただ一言だけ述べた。

この言葉が一体どれ程の意味を持っているのか、それは当事者達でしか分からないが、兎に角この言葉は恐らく艦隊司令部に向けたものではなく、艦隊司令部の冷たい鋼鉄の壁で覆われた部屋で命令の一つで何万もの人命を死に追いやる人物に向けたものなのだろう。

後年、この戦いを研究してきたものたちは口を揃えてこういう。

『この日より、嘗ての提督同士が互いに勇氣と知恵とを比べある種スポーツであった戦場から、人間性が一切排除され、古代の戦いのような魔術的煌きが美が奪い去られた』と。

日本軍の一方的大敗北を喫すミッドウェー海戦は、こうして幕を上げる。

27（後書き）

今更ながら、この作品は原作とか可愛いとか優秀無能に限らずどんどん殺していきます。

数百機にも及ぶ攻撃機部隊が漆黒の宇宙を切り裂き、獲物を牙に捕らえるその瞬間を待ちわびている。

と、攻撃機部隊をエスコートする隊長機が前方に僅かな光の反射を認めた。

そしてエスコートリーダーのバンクに続いて、各機がそれぞれ攻撃ポジションにつきそして……………。

日本帝国海軍第一航空艦隊通称小澤艦隊は山口ギヤモン艦隊も含め虎の子の航空母艦赤城、加賀、蒼龍、飛龍の四隻、からなる今次作戦の主戦力である。

長らく索敵に全力を尽くしていたが、一向に敵が見えない以上作戦を変更せざる終えなくなり、対基地攻撃用に爆装した艦上攻撃機が零式艦上戦闘機の護衛の下三十分ほど前に飛び立っていったばかり。

艦隊の編成上索敵巡洋艦を連れてこれなかったのが痛いが、彼女らは一先ず攻撃隊の無事を祈り、モニターの監視と管制を続けていくように思えたが、

「小澤提督、大変です。レーダー上に謎の編隊を確認。数は……………
・嘘五十、六十、八十よろこん（ry）」

「総数凡そ五百以上、完全に此方を射程に捉えています。」

「ありゃー、直に緊急回避、防空艦を本体に預けていたのが裏目に
出たか……」

「緊急回避だ！！攻撃隊を呼び戻せ。」

「作戦行動中のため無線封鎖で通信が取れません。こうなると攻撃
隊が気付くかそれとも帰ってくるか……」

「ガメリカの装備を考えれば攻撃隊は望み薄だな。仕方がない予備
機でもなんでもいい、出せる機は全部出せ。全艦対空砲火開け、何
としてでも空母を守るんだ。」

山口提督が空しく叫ぶも、既に攻撃コースに入った何百機もの攻撃
に逃れられるはずがない。

「ああ、秋月が轟沈した、巡洋艦も外輪部の護衛艦隊が突破されま
す。」

「何！！早すぎる。本国で対空砲火の増設を受けたのではないのか
！？」

満足な対空砲火も設置できない日本海軍の実情が此处に露呈した。

殆どの対空砲火が見かけだけで高度なセンサーとの連動も出来てお
らず艦隊決戦仕様を念頭に置いた艦船に少し毛が生えた程度でしか
ない。

「直上より更に五十機、突入してきます。」

「ありやりや、オシッコちびっちゃうな。回避。」

「ダメです間に合いません。総員対ショックお願いします。」

空母の機動力では回避しきること間々ならず、全弾が航空甲板へと命中、発艦が不可能なところか先の衝撃で航行にさえ支障をきたしている。

「ダメですね。これでは・・・東郷長官よりお預かりした空母を失ったとあれば顔向けが出来ません。・・・お置きされちゃいます、ポっ」

いろいろとパニックになってアレな発言をする小澤提督に代わって、艦隊唯一の良心である副官が代わりに指示を出す。

「応急処置急げ！！それと危険だが全艦密集陣形を取って少しでも火力を上げる、通信はまだ回復せんのか。」

「ジャミング機の影響で艦隊間の通信にも支障をきたしています。長距離通信も使えない以上救援は・・・。」

「救援などどうでもいい、今は少しでもこの状況を生き残るんだ。万が一に備え救命艇の安全装置を解除、指揮権委譲の再確認と艦隊の統制を・・・。」

副官が最後まで言う事は適わず、更に旗艦赤城に直撃を浴びその振動で重力制御装置が故障する。

突然の浮遊感に慌てた彼等だが、しかし、此处でやっと正気を取り

戻した小澤提督により退艦の指示が下される。

「このままでは犬死ですね。総員退艦、負傷者から先に運んでください、以後の指揮は蒼龍の山口提督に委譲、退官を急いでください。」

壊乱状態に陥った小澤艦隊の中で何とか直撃を防いでいる山口ギヤモン提督が乗る蒼龍は、艦橋のモニターが映しす轟沈する赤城を見て暫く沈黙した後、山口提督の叱咤と共に回避運動に専念していた。

「提督、脱出した小澤提督より連絡です。以後の指揮は山口提督に任せる、全力でこの宙域より脱出せよとの事です。」

だが、通信も間々ならず、旗艦が落とされて動揺している艦隊では思うように統制は間々ならず、山口提督はしたくてもできない現状に歯噛みする。

「此方も手が空いているわけではない。仕方ない各艦奮戦しつつも機を見てバラバラの方向に脱出しろと伝える。それ以上は出来ん。」

撤退はどんな作戦よりも難しくまた、このような状況では決して統制の取れた撤退など取れるはずもない。

そのため少々突き放すような言い方がだ、それぞれの艦長の指示に任せ生き残りを図るしかなく、バラバラに逃げるように指示を出したのも、ある種の犠牲と全滅したい為の苦肉に策であった。

「チクシヨウ、何としても生き残るぞ！！愛する妻の為に。」

日本海軍攻撃隊

彼らはこの日の為に集められた精鋭達である。

各星域の警備任務や防衛任務なので名を馳せたエースや、教官など掻き集めるだけ掻き集めた人材に、日本が出来る最高の装備とを与え今回の作戦に望んだのだが……そこにあったのは彼らが望む艦隊攻撃でのドッグファイトでもなく一方的な殺戮だった。

攻撃隊は、目指すべき基地の姿を見る事無く、突如として攻撃を受ける事となる。

突如として飛来した対空ミサイルによる飽和攻撃と、その後のガメリ力戦闘機からの強襲から編隊は崩れ、爆装して満足な起動もでき

ない中次々と日本軍機が火を吹く。

「やりましたなチハヤ提督。新鋭のイージス艦、これは使えます。従来の駆逐艦以上の索敵範囲にレーザーを超える射程のミサイル、各種電子機器による鉄壁の守りを誇るこの船には正に『イージス』の名が相応しい。」

CICに籠るチハヤ提督の傍に立った技術仕官が興奮気味に言う。

そもそもこのイージスは嘗てアーネスト・キングがヴィンソン計画に参加していた時に自ら設計しそのアイデアを元に完成されたのがこの船だ。

当初は技術的な問題や開発建造コストの問題、さらには当時の大鑑巨砲主義の風潮もあり余り開発が進まなかったが、地道な技術の蓄積と研究、さらにはガメリ力で芽吹いた航空機至上主義によってこの船は日の目を見ることになる。

詳しい話は割愛するが、兎に角本国で進水し、完熟航行が済んだ四隻全部を預けられたチハヤ提督は、その能力を遺憾なく発揮し、搭載しているノイマン社特製の志向性超長距離索敵警戒用レーダーにより日本軍の攻撃隊を早期に見出し、艦隊とミッドウェーの航空基地に通報、迎撃機が飛び立つと共に折からの作戦の通りレーダー上に映る敵に対して長距離ミサイルによる先制攻撃をかけた。

そして現在、四隻のイージスからの対空ミサイルの飽和攻撃によりレーダー上に映る日本軍機は当初は八十機以上大編隊だったのだが今では三十機以下に減り、それも周りを取り囲む百機以上の友軍機により次々と光点を消していく。

だが、これ程の大戦果を挙げたのにも拘らず、CICにつめる乗組員の顔には浮かれた様顔は見せず、ただただ指示に従い、命令どおりロックした敵にボタンを一つ押しただけ。

たったそれだけで、あつと言う間に、敵の大編隊は壊滅した。

従来の砲火を交え、空母といえども油断すれば肉薄された戦場とは違い、あまりに長距離からの一方的な攻撃で、彼らは敵を見る前に撃墜しその戦った実感さえ湧かない。

「あの、提督……本当にこれで終わっただんですか？」

誰ともなく尋ねるその言葉に、チハヤ自身も内心自分が指示したことは言え、あまりにあっけなくすんでしまったことに衝撃を受けている。

だが、彼女は指揮官だ、黙っていることは許されない。

「いいえ、まだよ。まだ戦闘は終了していない。戦闘配置はそのまま、それとリーダーソナー員は再度入念な索敵を、こちらの死角から敵の二次攻撃隊が迫っているかも知れないわ。」

チハヤの指示で彼らはやっとここがまだ戦場だと気づき、いつもの通りの働きをする。

だが、チハヤはまだ心の中でしつくりと来ていない。

本当にこれが戦闘と言って好いのか？唯の一方的な虐殺ではないのか？

人間が人間である以上、戦争に対する忌諱は消えないと同時に、人は人の死を実感したくない為に道具を作り、人殺しの感覚を希薄化させた。

それと同じ様に彼女彼等もまた、ボタン一つで何もかもが決まってしまう世界への扉を開いてしまった。

それに気がつくのは、もっと後になってからだ。

28（後書き）

紹介のような感じで・・・。

オリジナル艦もといオーバーツ、ガメリカ製イービス艦

スキル大防空、大バリア、大妨害もちのボクガカンガエタサイキョウノフネのような頭のおかしい船。早い話ロマンでありチートでありこれ一隻使いまわせば最強の壁が出来るカモシレナイヨ。

無茶苦茶高い、ロンメル駆逐戦艦並みに高く紙装甲、でもって特殊スキルのイービスシステムでレーザーの射程よりも長いミサイル攻撃が出来る。裏設定でイービス艦同士が同じ戦域にいと性能がUPするというオマケつき。現在の統合リンクシステムのようなもの。ステータス第四世代相当艦

グラは索敵巡洋艦を蒼くして甲板にミサイルサイロ並べて二連装レーザー砲乗っけただけ。

開発技術、建造資源共に210,000

HP135 索敵730 指揮120 レザー100 ミサイル560 鉄鋼

（魚雷）200

参考までに現在のガメリカの開発、建造コスト。

戦時補正により通常よりも六十パーセントのコストで開発、建造可能。（戦時補正による削減はまだ二回残している、一回十パーセント引き）

宇宙戦争時代にイービスの一隻や百隻あってもいいかなと思いましたが、まあ、これを出したいが為に十何話も前に名前だけ出したんですが・・・。

数百機からなるガメリカの攻撃機部隊による波状攻撃により、日本軍の第一航空艦隊は壊滅。

残ったのは救助活動に専念していた駆逐艦一隻と被弾し傾斜した軽巡洋艦一隻のみであった。

日本海軍本体も、小澤艦隊及び山口艦隊と連絡が取れなくなり、また攻撃隊からもなんら通信が入らないことを鑑み急遽臨戦態勢を取らせ慎重に第一航空艦隊が展開していた宙域へと向かう。

「艦長、ソナーに反応あり。監視していた日本海軍本隊が動き出しました」

「方位は」

「0-3-0この方向はミッドウェーの方ではありません。さつきから五月蠅い音を出しながら駆逐艦が艦隊の間を飛び交っています。

「・・・・その方角なら丁度いい。ウルフパックの餌食にしてやる、潜望鏡を下ろせ、潜航する」

だが、既にガメリカ潜水艦隊により連合艦隊の動きは逐一報告され、彼らはそれに気付かぬまま慎重な歩みで航行していく。

「やっと本隊のお出ましか。しかし、第一次攻撃隊では足りないと二次攻撃隊を用意していたが無駄だったな。よし、第一次攻撃隊が帰艦したら直に二次攻撃隊を出せ、目標は連合艦隊本隊。大物はいいから兎に角数を沈めろ、連中にはそれを回復させるだけの資源も人もいない。いいか徹底的に叩け!!」

フランク・フレッチャー提督は温和な性格で知られていたが、今回の作戦にあたってはガメリカ海軍の名実共にトップであるアーネスト・キング元帥より敵艦隊戦力を殲滅せよとの厳命が出ており、そのためニミッツ大将共々連合艦隊を逃がさないように何十にも畏が張られ知日家で知られる彼も今回ばかりは些か好戦的にならざる終えない。

「提督、既にマーク・ミッチャー提督は二次攻撃隊の出撃準備を終えていますがいかがいたしますか？ここはニミッツ大将に指示を求めたほうが……」

参謀の一人が同じ戦域でヨークタウン級二隻を指揮するメアリー・ミッチャー提督の動きと同調したほうがいいのかどうか提督に指示を求める。

メアリー・ミッチャー提督は別名沈黙提督の名の通り大変無口でブラチナブロンドの妙齡の女性提督なのだが浮いた話は一つもなく（噂では昔キング元帥の愛人の一人だったとか。その為皆遠慮している）、作戦会議中も一言も話さなかったことで有名だ。

そんな彼女と共に同じ戦域で戦う以上連携したほうがよいのだが、話になるかどうか判らないため、暗に総司令官からの指示と言う形で彼女を動かしたいと参謀は考えていた。

その考えに賛同したフレッチャー提督は直さまニミッツ提督に指示を求め、以後の指揮を彼が取るという形でミッチャーに対する指揮権を握る。

「ニミッツ大将の命令があるとは言え言うことを聞いてくれればいいのだが……………」

フレッチャー提督は色々と言いつきのある同僚を前に少し緊張しながら通信を開く。

「ミッチャー提督、こちらはフランク・フレッチャー提督だ。ニミッツ大将からの指示で以後の指揮は此方が取る。二次攻撃隊の出撃はまだ早い。一次攻撃隊が帰艦してから後二次攻撃隊を出すように。」

「……………」

通信を開いたモニターの先でプラチナブロンドの美人に無言で見つめられるという戦闘中でなければ是非とも食事に誘いたくなるような展開ではあるが、彼の予想通り相変わらず口を開いてはくれない。

「ああ、ミッチャー提督？こちらの指示に以後従ってくれるのであればそのまま無言でいてくれ。」

「……………」

相変わらずただただ此方を見つめる目に少しゾクリと背筋を凍らせながら結局はOKという意味らしい。

通信を切った後、後々になっても彼は参謀共々『戦争中で一番怖かったのはミッチャー提督との通信だ』と語ったそう。

兎に角、直に命令を下したフレッチャー提督によりミッチャー提督と連携を取り、結果として二次攻撃隊の逐次投入という戦術的失敗を犯す事無く、四百機以上からなる攻撃隊が連合艦隊に牙を向く。

この時既に連合艦隊は救助した小澤提督、山口提督から第一航空艦隊の壊滅を聞き、主戦力を失った為始め撤退するという指示を下そうとしたものの、第三連合艦隊率いる平良提督が激しく抵抗し、結果敵と一戦した後まあ有体に言えば行き当たりばったりな事になってしまう。

第一航空艦隊の残存兵力と負傷兵を後退させ、その護衛に戦力を割きつつ艦隊を再編した連合艦隊がいざミッドウェーに侵攻しようとした矢先に……

「ソナーに反応雷跡十……二十……三十一……全方位から扇状に魚雷が発射されました」

「何！？緊急回避、避けるおお」

「ダメです僚艦との距離が近すぎて激突します。ああ、着弾まであと十秒、総員衝撃に備えてください。」

「くそう、少しでも対空砲火の密度を上げるために密集陣形を取ったのが仇となったか。全員何かに掴まれええええ」

連合艦隊を追跡していたガメリカ潜水艦隊は一度合流して、連合艦隊の陣形を乱す意味も込めて全方位からの波状攻撃を仕掛けた。

空母を撃沈され、貴重な対潜装備の数々も空母の腹に抱えたまま失った連合艦隊は潜水艦に包囲されているのにも気付く事が出来ず、結局いいように翻弄されてしまう。

多くの船が撃沈を免れたものの、傷つき船団を離脱し、損傷艦が続出した。

連合艦隊司令長官東郷毅長官が指示を出そうとした時に、悪いことは重なるものだ。

今度は四百機からなる第二次攻撃隊の編隊が襲い掛かり、奇しくも初の潜水艦と航空機による時間差攻撃という戦史上稀有な先例が行われる。

陣形が崩れ、唯でさえ少ない対空砲火の密度を減少させてしまった連合艦隊に次々と攻撃機や爆撃機が襲い掛かり、命令どおり艦隊の護衛とも言える駆逐艦隊や巡洋艦隊が真っ先に狙われ虚空に花火を咲かせる。

艦隊の守りを引き剥がされた連合艦隊は、毛を剥がれ生肉を曝け出したに等しく、二次攻撃隊が撤退し、帰艦し補給を終えた一次攻撃隊が三次攻撃隊として飛来してくる頃には、艦隊の半数以上が被弾し、連合艦隊は無残な姿を晒していた。

此処に来て最早手遅れながら東郷長官は撤退を指示、始めから撤退していればと秋山参謀が嘆くも、時既に遅く、第三次攻撃隊により本命の戦艦が狙われ連合艦隊帰還長門にも多数被弾、速力を大きく落しつつも、何とか戦線を離脱したが、多くの船が撃沈被弾により航行不可能になり自沈し、連合艦隊は事実上壊滅した。

その後執拗にガメリカ海軍の追撃が行われ、合計して六回の航空攻撃、ガメリカ海軍一早いアイオワ級戦艦四隻全艦による追撃と、小惑星帯に彼方此方に潜伏していた駆逐艦隊と潜水艦隊による雷撃。

最終的に日本に帰還がなかったのは三十隻にも満たず、また損傷により多くが廃艦となり結局無事だったのは二十隻でしかなかった。

東郷毅長官は帝が翻意を示すも、連合艦隊司令長官の責任を果たすとして長官を辞任、後任は平良提督に決まるも、損傷した船を修理するだけの物資もなく、連合艦隊は書類だけの存在となり、日本人としてプライドを傷つけられた平良新海軍長官は最悪の戦法を生み出すこととなる。

ガメリカ海軍はほぼ一方的な展開となったミッドウェー海戦の勝利に沸き立ち、被害も撃沈艦がなく参加航空部隊の損耗率も当初の想定を上回るものではなく、ラバウルに続いて日本海軍との一大決戦によってこれを打ち破ったガメリカ海軍は名実共に世界最強の海軍と賞賛されていく。

この戦いから戦場の主役は戦艦から航空機に完全に移行し、太平洋での勝利が決定的となったアメリカは一先ず手を休め欧州アドルフ率いるドクツ第三帝国との決戦に総力を傾ける事となる。

29（後書き）

メアリー・ミツチャー、もとネタはマーク・ミツチャーですが、リアル沈黙提督です。wikiでは余り詳しくは書かれていないのですがそこはググってください。

戦闘シーンが苦手で非情に淡白で申し訳ありませんが、これもありかなと若干思ってしまうので物書き失格な作者です……。

連合艦隊は詰みです。後は通商破壊で損耗させて燃料補給でさえ間々ならない連合艦隊はもう大規模な艦隊行動どころか戦艦の一隻たりとも動かせないでしょう……。

日本との決着は一年置いて944年には終わらせます。

東郷は海軍を辞めて真希ちゃんと共にトンスラしています。東郷殺すのはいいとしても幼女を不幸にしてまでやるのはちょっと違う気がしたので……。

次回からは対ドクツ戦です。大体トーチ作戦からオーバーロードまでをやっていきます。多分ドクツ提督チートですけど、それでも勝てない数の暴力で……。

30（前書き）

最初に投稿したのが何故か消えてしまったので書き直します……。

はあ……鬱だ……連合艦隊虐めるか。

統一宇宙暦939年より始まった第二次世界大戦は、初戦をドクツが制し、翌年にはドクツ第三帝国の総力を持ってエイリス帝国本星ロンドンを制圧せんとアシカ作戦を発動。

ドクツ艦隊の三倍の戦力を誇るエイリス本国艦隊相手に、連戦連勝の勢いと、的確な戦術、将兵の質の高さと、相手よりも上回る装備を持って数の差を覆し、あわやロンドン落城かと追い詰めるも。

しかし、ドクツの同盟国であるイタリンが空気を読まずにエイリス植民地北アフリカを占領、さらには勢いに乗ってスエズを目指すも北アフリカ艦隊司令コンパス提督によりあっさりと破れ、北アフリカを奪還されイタリン本星ローマが危うくなる。

アシカ作戦を立案指揮していたレーティア・アドルフはこの事態に歯噛みしながら、仕方なく主力の一人であるエル・ロンメル元帥をイタリン救援の為に派遣。

全軍の三割の戦力が抜けた穴は大きく、天才レーティア・アドルフを持ってしても覆しがたく、本国の守りにについていたハインツ・グデーリアンの救援の甲斐なくドクツ第三帝国は撤退。

こうしてドクツは開戦から初めて敗北を喫する事となった。

人生はじめての挫折を味わったレーティア・アドルフだが、彼女とドクツに立ち止まっている余裕はない。

エル・ロンメル率いるドクツアフリカ軍団は、無事戦線を北アフリ

力まで押し戻しエイリス帝国に動揺を与える為にイタリン軍と共に再びスエズ攻略戦を開始。

砂漠の狐とあだ名されるエル・ロンメル提督の戦術により次々とエイリス艦隊を打ち破り遂にスエズ星域の要所エル・アラメイン星にまで迫る。

だが、開戦からガメリカ共和国から莫大な物資資金の援助と兵器の供出を受けエル・アラメインの防衛を固めたエイリス帝国は沈滞戦術を取ることで体制を建て直し、膠着状態に陥った戦線を何とかしようにも頑強に抵抗するエイリス帝国の前に純粹に数で負けていたドクツ・イタリン軍は遂にエル・アラメインを抜く事が出来ず悪戯に時間だけが過ぎていった。

ガメリカ共和国ブライトンヒルズ執務室

大統領執務室にガメリカ共和国の重鎮達が集まり戦略会議を行っていた。

「では今後の戦略を軍のほうから説明させていただきます。まずは先のミッドウエー海戦により連合艦隊は完全に壊滅しました。これは日本の呉に潜入した諜報員からの報告からも分かるように既に連

合艦隊の実働艦艇は二十隻を割り、太平洋の制海権は完全にガメリ力が握りました」

そこまで説明するとこの国の大統領のフランク・ルーズ大統領が自分の腹のように垂れ下がった二重顎をタップタップと揺らしながら鈍臭く質問した。

「そこまで優位ならば何故今、一気にジャップの連中を滅ぼさないんだ？今なら簡単だろう。」

ふん、大方その脂ぎった耳の中に仕込んだ小型インカムからの指示の通り言っているだけだろう。そんなに私が目障りかね。

「そうだな、攻撃の手を態々休める必要はない。ここは一気に日本を占領してその余勢を駆って欧州での決戦を・・・」

無論のこと取り巻き連中は取り込み済みか。その程度の意見では私の方針を変えることなど出来ないがな。

「太平洋艦隊には休息が必要です。唯でさえなれぬ大規模海戦に初の航空の集中投入で様々さ課題が来ています。更に奴等の言葉で追い詰めら

れた鼠は猫を噛むそうだ。太平洋艦隊は万全の体制を整えてから日本との決着をつけても遅くはありません。幸い今後敵の大規模反攻が不可能な状況なので以後も通商破壊を中心に日本の経済を弱体化させ継戦能力そのものを奪うべきです」

余り追い詰め過ぎれば史実の日本の通り特攻をかけてくる危険性もある。
スーサイド・アタック

奴等には一隻たりとも船を動かせないように消耗させ、連合艦隊を消滅させてやる。

その今まで黙って話を聞いていたハリー・トルーマン副大統領が組んでいた足を解き、徐に口を開く。

「大統領閣下、キング元帥の意見も一理あります。ここで一旦体制を立て直してからでも遅くはありません。植民地支配を継続させる為にも入念な準備が必要です。その間に欧州でも一段落つける必要もあります、エイリス単独では現状で欧州の奪還は間々なりません。」

そろそろ独ソ戦が始まればエイリス単独でも何とかなるが、今はそうではない。ガメリカが欧州に本格介入する為には今を置いて他にない。

「だが、欧州情勢に余り首を突っ込みすぎれば戦後にとにかく五月蠅いですぞ」

まあ、戦後のドタバタに巻き込まれる可能性があるがそこはマールプランなり何なりと回避できる。

問題は今欧州でドクツと直接戦うかどうかだ、ガメリカが介入すればソビエトもそこまで進出しないだろう。最悪新型広域破壊爆弾という名の最終兵器を手に入れさえいればいい。

ガメリカでもマンハッタン計画として新型爆弾が極秘裏に研究されているが、やはり完成形を手に入れるかどうかで話は変わってくるからな。

戦後も見据えればレーティア・アドルフ本人も欲しくなるが、余り欲張りすぎれば元も子もない。

「欧州奪還は市民の間でも声高に叫ばれています。尚且つ民族的歴史的にも欧州は我ガメリカにとって他人ではありません、大統領ご決断を」

トルーマン副大統領が大統領を見て決断を迫る。

私は向こうを向いてしよう・・・・・・・・余り大統領の醜態は見たくはないからな。

「・・・・・・・・はい、分かりました」

ボソリと大統領の独り言が執務室に鳴り響く。

・・・・・・・・だからあれほどインカムに頼るなつての、喋るなら口を手で隠して悟られないようにやれ。

全く、これが天下のガメリカ共和国の大統領の姿だとは泣けてくる。

30（後書き）

エル・ロンメルのスレータスにちよこつと改造。
スキル：砂漠の狐

同一戦域内で砂塵を無効、更にレーザー攻撃二倍。レーザー攻撃攻撃を三十パーセント軽減する。

統一宇宙暦941年

総統府で同盟国である日本の連合艦隊壊滅の報を聞いたレーティア・アドルフは焦っていた。

予定よりも遥かに早く、いや早すぎる日本の脱落。

欧州の同盟国であるイタリンは役には立たず、実質ドクツ単独でエイリス、ガメリカの両国を相手にせねばならなかった。

そして彼女はエイリス、ガメリカ連合と雌雄を決する為にもまずは後顧の憂いをたつ為ソビエトに宣戦布告をすることを決める。

こうしてドクツ総統の名の元にソビエト攻略作戦バルバロッサ作戦が開始される。

ドクツとソビエトの国境に集結した艦隊は、総司令官をマンシユタイン元帥を置き、その配下にハインツ・グデーリアン、エルフリーデ・マインフェルト、ヴァルター・モーデル、ヘル・ホト、トリエステ・シュテティン、ケッテンクラート、ヴィルヴェルヴィントを加え、ドクツ本国の防衛を最小限にし各戦線から引き抜いた戦力を持つて一年以内にソビエトの併合を目指す作戦であった。

宣戦布告と同時に攻撃を開始する奇襲効果と、相手よりも優れた装

備、錬度、それらを指揮するドクツきつての名将が達がいれば不可能ではないとアドルフは考えていた。

こうして始まったドク・ソ戦は彼女の思惑とは裏腹にドクツを泥沼の戦いへと導いていく……………。

ソビエト主星モスクワ

衛星からでも確認できる巨大な共有主義党本部のビルの中で、ヨシフ・スターリンはこの国の新の指導者であるカテーリンと会っていた。

「ご機嫌麗しく、カテーリン様。本日参ったのはあるお願いがございます」

恭しくカテーリンに身を屈めてお辞儀をし、頭を垂れたスターリンをつまらなそうに見るカテーリンは少々きつめに、

「挨拶は結構、本題に入ってください」

相変わらずツンケンしている彼女ではあるが、今日はスターリンも重要な話をするために此処に来ていた。

スターリンは話すよりはまずは、という事で一枚の紙をカテーリンに差し出した。

受け取った紙を黙々と読み進めていったカテーリンは厳しい顔をししながら顎に手をあて考えた後紙をスターリンに返してこう言った。

「本当にこれでいいのですか。もっと別の方法があるのではないですか」

無言でいるスターリンを暫く見つめた後、彼女は徐にペンを出し差し出されたままの紙にサインをする。

それを直に仕舞ったスターリンスターリンは再び頭を垂れて、

「ありがとうございます。カテーリン同士閣下のお陰でソビエトはこれで救われます」

そう言っただけで部屋を後にしたスターリンの後姿を見て、カテーリンは少し寂しそうにそれを眺めていた。

31（後書き）

エルフリーデ・マインフェルト、もとネタはハッソ・フォン・マン
トイフェル。ドイツきつての天才と謳われたあの人です。この世界
では女性ですので色々とムフフな展開が……。まあ史実だと
アメリカの捕虜になって政治家になっていますのでソビエト兵の慰
みものエンドが出来ないという罫。

ヘル・ホトはヘルマン・ホトことホト爺。詳しくはggうて下さい。

ドクツ第三帝国はバルバロッサ作戦が開始し、一気にソビエト領へとなだれ込む。

次々と領土を獲得し、星星を制圧していくドクツ軍。

ソビエト軍の抵抗も弱く、敵は撤退していくばかり、この為将兵達の間ではクリスマスには戻れるという楽観的に空気が広がっていたが、各艦隊の提督や東部戦線総司令官であるマンシュタイン元帥は苦い顔をしていた。

「まさかソビエトがこのような手段をとるとは……この戦い方、ジューコフのものではないな。もっと別の、悪意ある者の仕業だ」

旗艦アドルフ号の艦橋で全軍を指揮しながら、マンシュタインはそう呟いた。

「元帥閣下、軒並みロシア平原の惑星は制圧しましたがその……」

副官が何かしら言いたそうにマンシュタインの顔を見上げる。

「うむ、分かっている。占領した星から尽く食糧や物資が持ち去られ、インフラさえも破壊していくとは。」

現在ドクツの快進撃が続いていると思われたが、占領した惑星では殆どの備蓄が持ち去られ、占領市民は飢え仕方なく軍の方から食糧

を供出してはいるが、ドクツ国民の三分の一以上にもなる市民を食わせるほどの食料は何処を探しても到底見付からない。

今は何とかなっているがそのうち限界が来る。

その時に果たしてドクツ軍は今の力を維持できているだろうか？

私はそれが不安でならない。

こんな時、ロンメルがいれば心強いのだが……いかにい
かん。

私は首を何度か横に振って、今の考えを頭の中から追い出す。

自分は栄光あるドクツ第三帝国の元帥なのだ、部下の前で弱気など
見せるものではない。

それに、本国で最後にあつたあの憔悴した敬愛する総統閣下のお顔
を見れば、無理をしても早くこの戦いに決着を付けねば。

マンシュタインは、普段の厳しい顔に戻り全軍に前進の命令を下す。

少し肌寒いソビエト星系は、例年よりも早い冬の到来を思わせた。

ソビエト軍総司令官ジュザン・ジューコフ元帥は、各惑星から撤退する艦隊の指示をとりながら、

この作戦に参加してしまった自分を内心で笑っていた。

使えていたロシアン王国は革命で倒れそれでも祖国に忠を尽くそうとソビエト軍に入り此処まで仕えて来た。

だからこそ、彼は今回の作戦に内心では反対だったが、スターリン書記長閣下とこの国の真の支配者であるカテーリン女史からの命令では、一元帥でしかない自分程度では何も出来なくこうして守るべき市民を犠牲にしてまで命令を忠実にこなす自分を正にソビエトの犬に相応しいと自虐する。

ソビエトが取った戦法は、オフランスの英雄ナポレオンを退け、革命でロシアン王国が倒れソビエト建国の際列強の干渉を撥ね退けた伝統ある焦土戦法であった。

自国民に多大な犠牲を払うこの戦法は、国土が広いソビエトだからこそ出来るもので、大きなならソビエト以上のエイリス帝国でもこのような非道な戦法は取らない、いや取れない。

取ったならば間違いなくその国家は崩壊するからだ。

たとえ戦争に勝ったとしても、国民の怨嗟の声はやがて世代を越え国家を覆いつくし、滅亡させる。

だが、古くはロシアン王国時代からの伝統の焦土戦法は、ロシア人の血として流れ、この国の全国民が耐えるほどの屈強な血統を残してきた。

ロシアン平原の数千万の犠牲で残りの数億の国民が助かるのなら、ジューコフはたとえどんな誹りを受けようとも国民としてソビエト軍人としてこの国を守ると改めて誓う。

「ジューコフ元帥閣下、予定通りロシアン平原から全軍の撤退を完了。現在はモスクは星域で全軍の再編と防衛線の構築を行っています」

副官からの報告で深い思考の海から戻ったジューコフは、頷き党本部に報告を入れようと通信を開いた。

スターリンは党本部でジューコフの報告を聞き、内心笑いを隠せな
いでいた。

本来ならば肅清の嵐で処刑された筈の実戦経験豊富な指揮官や、知
識階級をこの世界では赤本と、カテーリン様の赤い石の力で簡単に
従わせる事が出来るのだから、笑いが止まらない。

あの憎つくきドクツの総統アドルフを今度こそ完全に打倒し、欧州
を赤化する為にも、戦力の保全に勤め、戦前からロシアン平原の工
場を疎開したお陰もあり国力も兵力も十分であだ。

ドクツがワープゲートを通りモスクワの地に降り立った時こそ、赤
軍の力を奴等に見せてやろう。

そしてこの日、スターリンにもう一つ嬉しい報告がなされた。

大怪獣ニガヨモギの捕獲と制御に成功。

スターリンは遂に堪えきれず笑ってしまう。

これでは神がソビエトに勝たせようとしているのではないか。いや、
違う。

この私こそが、ソビエトの支配者で神なのだ。

統一宇宙暦941年八月

五月から始まったドク・ソ戦はこの日ドクツ第三帝国軍がソビエト主星モスクワを目指しワープアウト、そこでマンシュタイン率いるドクツ軍は、ジューコフ率いる赤軍の大軍とまみえる事となる。

ドクツ軍二百五十万に対し、ソビエト軍有に一千二百三十万。

戦力差五倍以上という中、ドクツ軍はソビエト軍の波に揉まれる様にして突き進んでいった。

「第五戦隊は敵を足止めしろ、第十二戦隊はそのまま敵陣を突破、反転して後背を突け」

「元帥、第五戦域から援軍の要請が来ています」

「元帥、第十戦域もう持ちません、撤退の許可を求めています」

ドクツが誇る装備と錬度と将兵にマンシュタインの戦術を持ってしてもモスクワは遠い。

何とか被害を留めてはいるが、戦力を惜しげもなく投入し肉の壁として使うジューコフに対し、精鋭で固めたドクツ軍はモスクワ攻略戦まで戦力を温存しなければならず厳しい状況が続く。

マンシュタインは前線指揮を取り、他の提督と共に士気を何とか保つてはいるが、早くしなければ例年より早い冬の訪れと共にドクツ軍は文字通り身動きが出来なくなる。

「第五、第十戦域にはこちらも余裕がない。現状で何とかしてもらうしかないな。グデーリアンの艦隊は」

「はっ、予定の後方で戦力の再編を終え何時でも戦線に投入可能です。」

マンシュタインは頷き、太い熊の様な手を振りかざし全軍に総攻撃を命じる。

「ファイエル
Feuer」

赤軍の大海を切り裂くようにビームとミサイルの閃光が貫き、その隙間を掻い潜ってグデーリアン率いる艦隊が突入する。

グデーリアンは巧みな戦術で敵を寄せ付けず、ただひたすら真っ直ぐに進進し、モスクワを目指す。

「砲火を集中して道を切り開け。モスクワに一番に辿り着いたやつは褒美は思いのままだ。」

グデーリアンは将兵を鼓舞しつつ、冷静な判断で状況を見定めの確かな指示を出し、そのグデーリアンの戦術の前にさしものソビエト軍も浮き足立ってしまう。

「あの指揮官やるな。敵ながら見事な艦隊運動だ。味方の火線で切り開いた道を上手く広げて戦果を拡大し常に自分の戦力よりも少ない敵を相手取って進む。戦術的に二分割して更に分断するか……・だが」

ジューコフ元帥とてただ手を拱いて見ていた訳ではない。

各戦線から戦力を抽出し、一部予備戦力からの艦隊を合わせグデーリアンの前に壁の様に展開した。

それに真っ向からぶつかったグデーリアンは、そこで今までにない激しい抵抗を受ける。

何十にも張られた火線に、幾重にも連なる艦隊の壁、そうこれこそソビエト軍の長年の研究の成果である縦陣ドクトリン。

艦隊そのものを壁として戦線を突破しようとする敵を押し留め内部で圧殺する。

しかし……。

「かかったな。全潜水艦隊攻撃開始」

グデーリアンの号令のもと、艦隊の陰に隠れていた十数隻の潜水艦がその姿を現しソビエト艦隊に襲い掛かる。

突如として出現した潜水艦隊に至近距離から鉄鋼弾を打ち込まれたソビエト艦隊は混乱し、その隙を突いてグデーリアンは最大戦速でソビエト艦隊を突破する。

それを阻止しようにも出たら消え、消えたら出るを繰り返すドクツ潜水艦隊の前に翻弄され、ソビエト軍は指揮系統が混乱しており、遂にグデーリアンの突破を許してしまう。

「しまった！！カテーリン様」

ジューコフが叫ぶも眼前のマンシュタインを放つては置けず、苦虫を噛み潰したような表情をしながらドクツ軍を睨む。

「全軍、前進。ドクツを踏み潰せ」

その命令にギョツとした部下たちが急いでジューコフを諫める。

「閣下、御気をたしかに。今は体制を建て直しモスクワ救援の為に艦隊を派遣すべきです」

「そうです。ここは引いてもモスクワを何としても守らねば。閣下どうかお願いします、思いとどまってください」

だがジューコフは頑として受け付けず、更に予備兵力まで投入するように命令を下す。

「今此处で引けばドクツは勢いに乗りモスクワに雪崩れ込むぞ。そ

うなればどうなるか貴官等も分かっているだろう。ここはこれ以上敵の突破を許さない為にも敵を此処で押し返す必要がある。モスクワ防衛艦隊を率いるのはトハチエフスキー元帥だ。元帥ならば必ずやモスクワを守ってください。それよりも目の前の相手はあの名将マンシュタインだ、グズグズするな直さま命令を復唱しろ」

ジューコフの気迫に押された彼らは、見事な敬礼を返し自らの職務を果たす為に走っていく。

その、後姿を見ながらジューコフは祈るような気持ちでモスクワにいるトハチエフスキー元帥を思い浮かべる。

32（後書き）

独ソ戦はいいですね。ソビエトドイツスキの私としてはワクワクします。

でもこの話はガメラリカ中心なので、ソビエト戦を中心にかけない。

ああ、こうなるんだったら最初ツから……。

大帝国風解説

ハインツ・グデーリアン

ステータス

スキル：機甲戦術

指揮値：480

部隊1 索敵 + 45% 電撃巡洋艦三号

部隊2 全性能 + 20% 電撃巡洋艦四号

部隊3 攻撃 + 35% シャルンホスト級巡洋戦艦

部隊4 索敵 + 40% 電撃巡洋艦一号

スキル機甲戦術は先制の場合攻撃力三十パーセントup。軍事基地無しで再配置可能。

ソビエト主星モスクワに展開する最後の壁。

アクサナ・トハチエフスキー元帥率いる第一親衛艦隊は新鋭戦艦である超巨大戦艦ソビエツキーソユーズ、イヴァンを保有し、ソビエト軍一の錬度と士気、さらには装備を持っている。

「トハチエフスキー元帥！！敵艦隊を射程に収めました。ご命令を」
第一新鋭艦隊旗艦艦橋に佇む一人の女性。

豪奢な金髪を首に垂らし、親衛隊の証である蟹と星の勲章を誇らしげに胸に抱き、彼女は暫く目を閉じて、そしてゆっくりと開くと同時に手も振りかざし……無言で振り下ろした。

一斉に放たれるレーザー砲の嵐は、ドクツ艦隊の射程外から降り注ぎ、宇宙空間に儂い花火を打ち上げる。

それを無表情に見つめる彼女こそ「赤いナポレオン」「女帝」「エカテリーナの再来」の異名を誇るアクサナ・トハチエフスキー元帥その人である。

彼女はその美しい容姿と、天才的頭脳で革命後間もない脆弱な軍をジューコフと共に率い、列強の干渉軍を撥ね退けソビエトを守った救国の英雄の一人だ。

彼女は祖国を愛し、そして軍人としてこの国に仕えて来た。

しかし、ロシアン王国時代からの古い付き合いであるジューコフとは長い間戦友であったが、ある時この国に疑問を抱き、それに対してあくまで一軍人として仕えようとするジューコフに反発し彼女は真にこの国を憂いていると信じ一時期はソビエトのトップに上り詰めこの国を変えようとした。

だが、党本部ビルの最上階にあるある小さな部屋で彼女は一人の少女と出会い、その少女の手の甲に嵌っていた赤い石の光を浴び・・・

「あなたは、私の為だけに働きなさい」

それから彼女は変わった、いや前よりもっとこの国のために働くようになりそして、次々と自分と同じ様にこの国を変えようとした者達を秘密警察と共に追い詰め軍から追放していった。

そう、彼女はただ一人この国の真の支配者たる彼女カテーリンの尖兵と成り果てたのだ。

そして今彼女は親衛隊の名の元ソビエトに仇なすものを撃ち滅ぼさんと刃を振るう。

「射程は此方が有利、だが速度は向こうが上。ならばこちらから距離を詰める、全艦増速」

無表情な目で相手の力を読み取った彼女は最良の選択を下しつつ、ドクツ艦隊と接近していく。

一方ドクツ艦隊はソビエト軍から一方的に攻撃され多少浮き足立ったが、しかしハインツ・グデーリアンの手腕により直さま統制を取り戻し自慢の速度で敵を攪乱しようと企むが、その前にソビエト艦隊が増速し、ドクツ艦隊に迫る。

「成程、あえて接近戦を行うことでこちらの機動力を殺し、自慢の火力と耐久力でこちらを磨り潰そうと言う訳か、だがしかし！！」

ハインツ・グデーリアンは正面から立ち向かうような事はせず、艦隊を二手に分け一方がトハチエフスキー艦隊をもう一方がモスクワに向かうと動きを見せる。

ソビエト軍は、一瞬モスクワに向かう艦隊に気を取られ側面から接近する艦隊にまんまと隙を付かれ、急ぎ応戦しようとした瞬間に今度はモスクワに向かうと見せた艦隊が針路を変更してソビエト軍のわき腹を突く。

両方からの挟撃によりグデーリアンはこのまま分断し一方を包囲しての殲滅を目論むも、先頭を行く艦隊がそのまま突きぬけ反転して今度はドクツ軍の後背につこうと動きを見せる。

「中々一筋縄ではいかないな。仕方ない分断は諦めてそのまま敵の側面を掠め取れ」

敵艦隊に食い込む先鋒の突進をソビエト艦隊の動きに合わせてスライドさせて逸らし、敵艦隊を受け流しつつ敵艦隊の後方へと出る。

グデーリアンはそこで艦隊を一度合流させこのままモスクワを目指
すか暫く考えた後、

「・・・・・限界だな。撤退する。残存兵力をまとめ合流地点に急
ぐぞ」

この動きは直さまソビエト軍にも知られる事となったが、生憎こち
らは大軍が邪魔をして艦隊の再編が出来た時には既にドクツ艦隊は
戦域を離れていた。

流石にソビエトの鈍足戦艦では、ドクツの快速軍艦を追える筈もな
く、結局取り逃がす結果とはなったが、ソビエト軍は開戦以来初の
勝利に喜んだ。

後に多くの者がこのグデーリアンの転進に様々な意見を述べるが、
実際のタイミングでの決断はギリギリであり、既にマンシュタイ
ン艦隊はジューコフ率いるソビエトの大艦隊の構成の前に限界を越
えようといった崩壊してもおかしくはなかった。

グデーリアンは前線の状況を詳しく把握しており、たとえ自分がモ
スクワを攻略しようとしても後方からのトハチエフスキー艦隊が追
ってくる以上敵に後ろを見せての戦いになり、モスクワ攻略は危う
くなる。

そして、先程の一会戦でグデーリアンは相手の力量を見極め、極め
て敵し難いと見て前線の状況を鑑み、グズグズすれば退路さえ失い
かねなかった。

状況を見極めたグデーリアンはまだ戦力に余裕があるうちに撤退を
決意、一度戦域を離れると全速でロシア艦隊右翼後方より襲い掛か

り味方の撤退までの時間を稼ぎ、自軍の十倍以上の戦力を手玉に取り、思うが俥に戦果を挙げて見事に撤退した。

グデーリアンの一連の突入から撤退までの動きは神速と謳われ、敵味方から韋駄天の名で知られるようになる。

こうしてドクツ軍の931年の最後の攻勢は失敗に終わり、ロシアの大地に早い冬が訪れ戦線は膠着、こうして長いドク・ソ戦が始まったのだ。

ハインツ・グデーリアンのスキルが変化しました。
ハインツ・グデーリアンの指揮値が上がりました。

ドクツで冬季装備の研究が解除されました。（以後除雪艦など冬季装備を持った船が開発可能になります）

33（後書き）

大帝国的紹介

アクサナ・トハチエフスキーもとネタはミハエル・トハチエフスキー元帥。赤軍近代機械化の父といわれるあの人。別名「赤い皇帝」^{ナボレオン}。この世界では女性で銀英のラインハルトのような髪型で、三代代だが未だに独身。もとロシア王国の貴族だが革命に参加し以後ソビエト軍でジューコフ同様元帥として遇される。もとネタの人では大粛清の際に処刑されるがこっちは赤い石の力でソビエトに忠誠を誓う人形になっている。因みにジューコフが結婚する前は付き合っていただとかどうだとかの噂が……。二人はどうして分かれたのか？

スキル：赤い皇帝

部隊1全性能+二十パーセント

部隊2HP+二十パーセント

部隊3

部隊4

スキル赤い皇帝。赤軍に限り同一戦域内で全艦隊の攻撃性能三十パーセントUP。

ハインツグデーリアンの指揮値変化480 510

ハインツ・グデーリアンの変化後のスキル

機甲戦術 韋駄天

スキル韋駄天1ターンに二回移動が出来る。軍事基地なしで再配置可能。先制攻撃に限り同一戦域内の味方艦隊の攻撃力二十パーセントUP。

統一宇宙暦942年

ドクツアフリカ軍団は危機的状況に陥っていた。

ガメリカ共和国が遂に本格介入をし、北アフリカに侵攻、ドクツ軍はそこでガメリカの真の力を思い知る。

ソビエトと比較してこそ少ないが、装備の質練度何よりも幾らでも湧き出る物資により、進軍を止める事無く戦い続けるガメリカ艦隊。

当初こそなれない砂嵐の戦いで航空機が無力化され、エル・ロンメル元帥の戦術に翻弄されこそすれ、相手の戦術を直に研究し対策を立て、不慣れな砂の惑星で戦えるように直さま装備を整えるなど、日に日にドクツ・イタリン軍団を圧倒し、ついにはドクツ軍を北アフリカの辺境にまで追い詰めることに成功する。

ドクツアフリカ軍団旗艦艦橋

エル・ロンメルはイタリン軍の残存兵力をイタリン提督ユーリ・ユリウスと共に再編を行っていた。

本国からの補給も途絶えがちで、兵の補充も東部戦線を最優先されこちらに来るのは新兵ばかり。

イタリアン軍は、遅まきながらユーリ・ユリウス提督の手によって軍の改革が進んではいたが、ムツチリーニの政策により軍の屋台骨その物が崩れ、彼女一人の力では最早どうしようもない状況だった。

それでも何とかしようと頑張っではいたが、日に日に消耗していく現状では時間も物資も人も何もかも足りずそれでも懸命に建て直しを図ってはいるが、最早降伏か撤退かのどちらかしか残されてはいない。

それを分かってはいるが……チラリ目の前で黙々と作戦図を見る男に目を向ける。

「ロンメルあの……いいかな？」

ロンメルは少しだけこちらを一瞥した後、再び地図上に目を向けた。

「こんな事を私から言うのもなんだが……その、えと」

どう切り出してよいのか、彼女には分からない。

自分でもこれしか手がないと分かってはいるが、それでも言わなければならぬ。

「っ、ロンメ失礼します。ベルリンよりロンメル元帥に通信が入っています」……」

「分かった直向かう。すまないユリウス提督、少し席を外させてもらっ」

結局私は何も言い出せないまま、ロンメルは部屋を出て行ってしま

った。

はあ、もう少し積極的に成るべきなのかな……。ロンメル
って大きいのとちっちゃいの。どっちが好みなんだろう。

その後、ロンメル率いるアフリカ軍団は、砂嵐を利用してまんまと
撤退に成功し、こうして北アフリカでの戦いは終わったが、戦場は
欧州へと移る。

ガメリカ統合軍総司令部

キングはアフリカからロンメルが撤退したとの詳細な報告を受け、

内心落胆を隠せないでいた。

全く、騎士提督だからと顔を立ててやれば、このザマだとはな。

あれほど注意したのに逃げられたのだから、エイリス帝国の質も落ちたな。前女王とのロマンスで惚けたか。

「はあ、しかし史実どおりとの展開とはいえ、ロンメル之死に場所を決めてやらねばな。生きていると何かと厄介だ」

原作だとロンメルは捕虜として捕らえられるが、史実では自害させられる。

この場合捕虜として生き残る可能性が高いしな、ガメラに引き込める可能性が殆ど無い以上・・・いや、待てよひよっとするとひよっとすれば。

私は暫く考えた後、手元の通信機に触れる。

「・・・・・・私だ、実は折り入って頼みたい事がある。出来るか？」

「ああ、ああ、無論だ。こちら無理を承知で頼んでいる。だが、みすみす奴等にくれてやるのも面白くない」

「・・・・・・ほう、分かった。何人が貸してくれるだけでいい、そう分かかった、ありがとう」

これで一応の予防線は張った、後は奴等しだい。

コンコン

部屋の扉をノックして入った男が新たな報告書を持ってきた。

「閣下、これが今現在の大西洋及び欧州の詳細な報告です。それと
エイリス帝国の方からガメリカに対して43年度の攻勢への協力要
請が来ていますが如何いたしますか？」

部下から紙片媒体の報告書を受け取り、パラリと捲りながら粗方目
を通していく。

「欧州は例年よりも早い冷え込みだな、食糧生産に影響がなければ
いいのだが。全体的に物資が欠乏で配給制か、経済が上手く回って
いないか」

まあ殆ど私のせいなのだな。

経済界にそれとなく囁いて中立国がドクツに対する輸出を控えさせ
たり、ワザと中立国を通して欧州の小麦を買い取って食糧の値上が
りをさせたり……。

まあ、戦争経済というものは全く成り立たないものだな。

「閣下？」

「ん？ああ、エイリスの件だが丁重に断りを入れろ。イタリン上陸
を控えて欧州本土への侵攻など、馬鹿らしい」

「分かりましたではその様に」

一礼して部屋を出るとき、少しばかり男のケツを見て悲しくなった。

何でこの私が男のケツを眺めなければ成らないのか。

はあ、男も女も関係なく飛ばした（各部署に配置）のが悪かったのか。

いい女が残っていないとは・・・チハヤが戻ってくるまでの一ヶ月、あの小ぶりなお尻をまた撫で回したいな。

34（後書き）

次回は944年まで飛びます。

もう後四五話位で完結させたいと思っています。

統一宇宙暦944年

この日、オフランス星域ノルマンディー宙域に集結したエイリス・ガメリカ連合軍の総兵力は五百万を越え、今正に史上空前の大作戦が開始されようとしていた。

だが、その実情はエイリス艦艇の半分以上がガメリカ製、更に補給も作戦立案も何もかもがガメリカ頼みの他力本願というか厚顔無恥というか何と言うか、かつての大エイリス帝国の面影は何処にもない。

ドクツとの戦争が長引き、アジア欧州で戦力を消耗したエイリス帝国には、満足な艦隊を作るだけの余力が無く、ガメリカからの支援で漸く形だけは整えて戦えていたしまつ。

エイリスの意地を見せようと単独で943年に反攻作戦を開始するも失敗し貴重な装備を喪失。

今回の大規模反攻作戦に、なけなしの本土艦隊から切り出した艦隊を派遣し、何とか威信を見せようとしてはいるが、既に世界中の目からはエイリス帝国の凋落は明らか。

それに比べガメリカ共和国は最新鋭の艦隊に新型の装備と高い錬度、それと規律の高さで有名で、戦後世界を主導していくのはまず間違いない。ガメリカであると、各国亡命政府は積極的にガメリカに接近していった。

その、各国亡命政府の中で一番の規模を持つのが、オフランスから脱出したシャルル・ド・ゴール率いる自由フランスであった。

彼は自分の部下たちとオフランスから脱出した難民と共にエイリス帝国に亡命、ヴィシーとシャルロット・パルトネー王女の亡命政府からは離脱し、独自の組織を作り上げる。

オフランスがドクツに敗北したのは、長年の専制王制の弊害であり、王制を廃止し、王族を追放、オフランスの市民による市民の為に自由な国家を作ろうと呼びかけ、無能な政府に変わって彼は独自で自由フランスの政治首班に就任し、放送でドクツ占領下のオフランス市民に自由の為に抵抗と、ヴィシー、シャルロット・パルトネーへの批判を行った。

当初エイリスでは王制という事もあり、余り支援はされてはなかったが、彼は単身ガメリカに渡航。

ガメリカ議会で自由フランスの正式な亡命政府としての承認と、自由の為に協力を呼びかけ、ある条件を飲むことで、これを勝ち取ることに成功する。

その条件とは、自由フランス単独でパリの開放。

僅か一個艦隊と難民ばかりの組織ではとても不可能な条件ではあったが、彼はそれを承認し、自由フランスの為に精力的に活動を行う。

ガメリカの方針転換で欧州に戦力を傾けてからは、ガメリカで行う亡命政府への寄付や寄金が倍増、更にガメリカ議会で得たコネクションを使いキリング財閥との接触も行い兵器の供給源を確保。

肝心の兵力だが、義勇軍を募り、また難民の二十歳以上の健康な男女を徴兵して無理やり戦力として組み込み、訓練を施し漸く戦力が整ったところでガメリカ・エイリスによる大陸反攻作戦の話を耳にした彼は、自分達の作戦参加を要求、渋るエイリスに対して、ガメリカは快く受け入れこうして他の亡命政府よりも一步も二歩も進んだ自由フランスは、パリ奪還の為に闘志を燃え上がらせていた。

対するドクツは、イタリン前總統ピエトロの反乱を鎮圧したエル・ロンメルをそのまま西部戦線總司令官として防衛線構築に当たらせるも、ドクツ總統レーティア・アドルフが過労で倒れ、機能不全に陥っているドクツでは最早満足な資材も軍も用意できず、苦肉の策として逼迫する東部戦線から戦力を引き抜いて防衛に当たらせる。

こうして築かれた防衛線も強固とは言えず、最早ドクツの挽回の機会は永遠に失われたのだ。

六月、遂にエイリス・ガメリカ連合軍は大陸反攻作戦を開始し、ノ

ルマンデー周辺に集まった総勢十五個艦隊が舳先を並べて進むさまは正に圧巻の一言に尽きる。

まず、橋頭堡確保の為各惑星の通信施設や索敵施設を徹底的に空爆し、敵の目を奪い更に潜水艦を使って各星域に降下した陸戦隊により敵戦線を混乱させ、すかさず圧倒的な火力を持って一気にノルマンディーからオフランス中部へと雪崩込む作戦であった。

エル・ロンメルは当初の防衛構想としては水際での迎撃であり、内部に一度入り込まれては連合軍の圧倒的物量の前にドクツ軍は抗えないと考えるも、オフランス国内で活発化するレジスタンス活動の為ドクツ軍は前戦力を前線に貼り付ける事が出来ず、また妨害活動で戦力の補充に失敗し手元の兵力で何とか戦わねばならなかった。

そして反攻作戦当日、おり悪くドクツ本国に戦力補充の為にロンメルが帰国していたため急いで前線に向かうも、既に戦線は崩壊の一步手前であった。

二十隻以上もの航空母艦とエイリス本国から飛び立つ攻撃機、爆撃機の編隊が、群れを成してドクツ艦隊や惑星に襲いかかり、迎撃に出てきた艦隊を圧倒的な砲門数を誇るガメリカ海軍自慢のモンタナ級重戦艦三隻からの火力で蹴散らされ、他にもアイオワ級三隻、サウスダコタ級二隻、ノースカロライナ級二隻など戦場はガメリカ主力艦の展覧会を催していた。

モンタナ級モンタナに乗る上陸支援艦隊司令ジョージ・パットン將軍は、戦艦の圧倒的な火力に酔いしれながら、次々と戦線に穴を開け、航空機と連動したそれは的確にドクツ艦隊を葬っていく。

エイリス本土艦隊から抽出して編成したエイリス欧州奪還艦隊を率

いる騎士提督の一人ロレンスは旗艦トラファルガーでエイリス提督らしい正々堂々とした大変”見栄え”のいい戦いを繰り広げ、戦線を押し上げていく。

ロンメルもなけなしの戦力を投じて必死の防衛線を展開し、特にオハマ宙域の橋頭堡確保の為にガメリカ海兵隊は多大な被害を受け、さらにガメリカとエイリスの対潜狩りから生き残ったUボートを全艦投じて連合軍の揚陸艦隊を襲わせた。

が、これも周囲を入念に警戒していた対潜哨戒機により目論見を見破られ、殆どのUボートが撃沈される。

そして、敵の奇襲の心配がなくなった連合軍は前線に前戦力を投じロンメルは遂に戦線を放棄せざるを得なくなった。

ロンメルが狐の最後っ屁とばかりに各星域の宇宙港を爆破しようと企むも、史実を知るキング元帥により潜水艦に乗って潜入を果たしたガメリカ海兵隊により施設は既に占領され、奪還しようとドクツ陸戦隊と海兵隊とで激戦が繰り広げられる。

反攻作戦開始から半日、既にドクツ軍の継戦能力は失われ、全軍壊滅の危機に瀕し、一部戦線を屈強な東部戦線帰りの兵が支えるも多勢に無勢、圧倒的な戦力差を前に命を散らしていく。

この犠牲者の中で、特にドクツが誇る画期的な戦艦、電撃戦艦六号通称ティーゲルの艦長であるミハエル・ヴィットマン大佐は単艦でエイリス帝国の巡洋艦戦隊を自分の命と引き換えに壊滅させ、その名を後世まで轟かせる。

ドクツきつての勇者達の戦いも空しく、戦線の崩壊は止められなか

った。

ロンメル元帥は残存兵力をオフランス主星パリへと撤退させ自身は撤退が完了するまで全軍の殿を務める。

ドクツ軍旗艦艦橋

激しい砲火に晒されながらも、一步も引かず攻撃を続けるロンメル艦隊。

アフリカで西部戦線で戦力をすり減らし最盛期の三分の一にまで減ったロンメル艦隊ではあったが、ロンメル元帥が本国から持つてきた試作超重戦艦E-100とマウスを何とか運用して足りない戦力の穴埋めをしていた。

しかし、所詮は試作機。

不具合や故障が続出し、戦力としては安定さを欠き、更に敵の戦力を受け止める為に唯でさえ少ない戦力を薄く広く展開させなければならなかったロンメル艦隊は、既に旗艦さえも砲火にさらされ、損傷していた。

「もっと動け、動くんぞ。敵の出鼻を挫いて撤退する味方を守れ。砲火を絶やすな、一步でも引けば潰け込まれるぞ」

それでもなお戦い続けるロンメルに、相対していたパットン將軍は敬意を覚え、この偉大な將軍の最後を見届けようと自身が乗るモンタナ級を前線に出す。

「素晴らしい、敵ながら天晴れた。偉大な将軍が散ろうとしているのを後方で指をくわえて見ている訳にはいかん。全艦前進、モンタナを前線に出す」

戦場に現われた怪物、重戦艦モンタナ。

ソビエトのソビエツキー・ソユーズ、ドクツのビスマルク、日本の大和を上回る火力と装甲を誇り、その射程距離は新型の超長距離総合索敵装置と連動した照準による高い命中率と他の戦艦とは一線を越える射程距離とで航空機が無ければ戦場の王者として君臨したのであろう。

何故これが航空機全盛のガメラ力で建造されたかというと、キング元帥の強い意向（趣味）が反映されていたとかいないとか。

兎に角、時代遅れの恐竜は、その圧倒的な火力でロンメル艦隊の止めを刺そうとする。

上舷甲板に三連装五十口径を四基、下舷甲板に三基の計七基二十一门の砲の圧倒的な火力を掠めただけでもドクツ艦を大破させた。

高性能ミサイルがドクツ艦隊に次々と突き刺さり、レーザー砲の束が戦艦を蒸発させる。

「あの化け物に火力を集中。少しでもいいからダメージを与えろ」

ロンメルご自慢の機動戦を殺され、それでもなお至近距離から決死の鉄鋼弾を打ち込もうと食い下がる。

そして、ロンメルが敵に最後の突撃をかけようとした瞬間……
・その時は来た。

モンタナの主砲がロンメルが乗る旗艦を捕らえ、一斉射撃のうち十二本のレーザーが直撃し、その内三本が艦橋に当たりロンメル以下艦橋クルーを蒸発させる。

そうして……根元から爆発した戦艦は動力炉の暴走で残骸一つ残さずこの世から消滅した。

全軍が偉大な將軍の最後に黙祷を奉げ、その時だけ攻撃をやめ戦場には静寂が戻る。

この時、この一瞬の合間だけが、嘗て古の魔術的煌きがあった戦場へと舞い戻った瞬間であった。

ガメラカ・エイリス連合軍による反攻作戦はドクツ軍は壊滅とエル・ロンメル元帥は戦死によって連合軍の勝利へと終わった。

作戦成功後、ジョージ・パットン將軍はロンメルを討った功績で勲章を授与され昇進を打診されるも、辞退して勲章だけを受け取り戦場へと戻る。

そして、橋頭堡を確保した連合軍はパリへと兵を進め、遂にこれを無血開城しパリ市民は歓呼の声で連合軍を向かえ、凱旋門をくぐり連合軍の凱旋の先頭を進むのは、無血開城されたパリに真つ先に乗り込んだド・ゴール率いる自由フランスであった。

ド・ゴールは開放したパリで自由フランスを改めフランス共和国の建国を宣言。自身を初代大統領としてオフランス国民に万雷の拍手と期待とで迎えられ此処に数百年以上もの歴史を持ったオフランス王制は滅ぶ。

マダガスカルに逃れたヴィシー率いる王族派は分裂し結局フランス共和国に恭順を誓い、シャルロット・パルトネーは追放、ヴィシーは敗戦の責任を取られ幽閉され、一緒に逃げた王党派や貴族は議会の満場一致で国外へと追放されマダガスカルに逃れた兵力はそのまま新設のフランス共和国軍に編入される。

新たな国家を承認したアメリカ、エイリスは新たにフランス共和国を加え、間をおかずドクツ本国へと刃を定める。

そして、連合国がオフランスを開放している時、ソビエトではある一大作戦が開始されようとしていた。

35（後書き）

次回はバングラチオン作戦とベルリン陥落をやりたいと思います。

ベルリン陥落後日本に止めを刺します。

ソビエト侵攻は・・・・・・・・まあ無難にやった方がいいですねww

ww

36 (前書き)

少し実験。

BGM

http://www.youtube.com/watch?v=0orMO15Wwxg

連合軍によるノルマンディー作戦が開始されソビエト念願の欧州に第二戦線が形成され、遂にソビエト軍の総力を挙げたバングラチオン作戦を開始する。

圧倒的物量を誇るソビエト軍に対し、戦力の消耗激しく、満足に動ける艦艇も少ないドクツ軍は動けない船を浮遊砲台として設置し、何とか戦力を集めようとしているが、西武戦線優秀な士官や戦力を取られ、碌な兵が残っていない東部戦線の防衛は絶望的であった。

それでも東部戦線総司令官マンシュタイン元帥は、必死の抵抗を続け、ソビエト軍に少なくない犠牲を払わせながらも、ギリギリと後退していく。

そして遂にマンシュタイン元帥はロシア平原からの撤退を決め、ポツポーランドへと逃れるも、ソビエト軍の形振り構わぬ進撃によってスターリングラードとの連絡が絶たれ、ドクツ軍三十万の将兵が閉じ込められてしまう。

救援の為に軍を派遣しようにも、雲海の如く湧き出るソビエト軍の前にドクツ軍には最早前進は許されず、後退するばかりの戦線でマンシュタイン元帥は現地の最高司令官に降伏してもよいと伝える以外何も出来なかった。

それからスターリングラードは一ヶ月余りの攻防のち、戦死した最高司令官に代わりパウルス総参謀総長がソビエト軍に降伏、同じ頃、ジューコフ元帥率いるソビエト艦隊とマンシュタイン艦隊による一大決戦がポツポーランドで行われる。

ジューコフ元帥はポツポーランド中央部で待ち構えるマンシュタイン元帥に対して降伏を勧めるも元帥はこれを固辞して頑として跳ね除け、ジューコフ元帥はドクツ軍を殲滅すると宣言。

この挑発に乗ってしまったマンシュタイン元帥は全艦を持ってソビエト軍中央部に切り込むも、そこには望むべきジューコフの旗艦はなく、逆に味方艦隊と分断されソビエト軍の中で孤立してしまったマンシュタイン元帥は自らの失策を認め、業火に燃える旗艦と運命を共にする。

ドクツ本国ベルリン

総統府でレーティア・アドルフは自分が過労で倒れている間ドクツの至宝である両元帥と名將たちを失い、ならびに彼女が夢見た世界帝国は脆く崩れ去っていく。

崩れ行く戦線、物資の欠乏によりベルリンでは配給制が敷かれ、自分がない間に新兵やまだ訓練が終わっていない兵が前線に駆り出され男ではめつきりと減っている。

健在のドクツ艦隊は既に書類上の存在のみになり、刻一刻と連合軍、ソビエト軍の足音がベルリンへと迫っていた。

彼女は迷っていた、今の状況を覆す一手が自分にはある。

だが、それを使っているのか？

最早ロンメルもマンシュタインもない、彼女の隣で支えてくれたゲッペルスは暗殺されて彼女は一人きりになっていた。

……止めよう。

皆がいない世界に何の意味があるのだろうか？

彼女は国民を此处まで苦しめた責任を取る為に連合国に講和を申し入れようと通信機に手を触れ……突如として執務室に雪崩込んだ親衛隊の凶弾に倒れる。

血まみれの自分の体を目にして彼女は、薄れゆく意識の中あの雪の降る日に一人で選挙の演説を行っていた日々を思い出す。

そして、そこで彼女は一人の女性と出会う。

彼女にとって掛け替えのないパートナーであり、唯一無二の存在……グレーシア・ゲッペルス。

「……また……あえ……た」

永遠に閉じられた瞳の向こうで、彼女に笑いかける人々の群れへと、

彼女は飛び立った。

ドクツ軍親衛隊の一部の暴走によって暗殺されたレーティア・アドルフ総統の死は、卑劣な連合国による仕業とされ、国民は彼女の死を嘆き悲しみ連合国とソビエトに対し怒りを募らせる。

国民軍の名の下、少年から老人までも武器を取り、兵士としてベルリン防衛の為に借り出される。

此処に来て総統暗殺に疑いを持つ者や、講和しようと思うものは、敗北主義者やスパイというレッテルを貼られ街灯に吊るされる。

地獄の東部戦線から何とか生き残ったヒムラーは錯乱し狂気に蝕まれ、親衛隊の一部を唆して今回の凶行に及び、自身をドクツの新総統として就任し狂気に満ちた命令を乱発し、自身と親衛隊は酒と女に溺れ、日々を孤独に過ごす。

ドクツ国内でまだ正常な判断を失っていないかった軍人たちは、アドルフ亡きドクツを見限り第三国へと亡命、科学者なども自分達の身の振りを決める為に総統が残した研究成果を自らの功績と偽って各国に売り込み、自己保全に走る。

こうして次々とドクツから人材が流出し、ますますドクツが苦しくなっていくのを知らずに、ヒムラーは自分の世界に籠るようになっていく。

だからといって状況が好転するはずがなく、ベルリンはソビエト軍に包囲されようとして……そこで横槍が入る。

アルデンヌを突破し、ヒムラーの無茶苦茶によって史実以上に弱体化していたドクツ軍をあつさり突破した連合軍は、進撃速度を緩めずベルリンに到着、本星の半分を取り囲むようにして展開し、ベルリンはソビエト軍、連合軍の双方によって包囲されこれが逆に事態をややこしくさせる。

当初、ソビエト党本部書記長であるスターリンは連合軍を無視して独断でベルリンを制圧しようとしたが、連合軍最高司令官であるドゥービル・ドワイト及びエイリス帝国女王セーラ・ブリテン、並びにガメラカ大統領から会談の要請が入り、これを無視する事が出来なかったソビエトは渋々承諾し、ソビエト領のリゾート惑星ヤルタでの会談が持たれる。

この会談で、戦後世界においてソビエトのポーランド及び北欧の一部を領土とすることを承認し、ベルリンにおいては首都の中心部を挟んで東西に割いての統治をする代わりに、ソビエトの対日参戦の取り止めと、旧中帝国への工作及び軍の進駐を認めないこと日本はガメラカの管理下におく事で決着を見る。

今回一番割を食ったのは他でもないエイリス帝国であったが、単独でドクツを攻略できなかった以上、発言など殆ど考慮に値さえされなかった。

表向きにはソビエトの東欧支配を認めた形になったが、裏では占領後のベルリンに隠されたレーティア・アドルフの遺産と呼ばれる彼女の研究資料こそ真の目的であった。

一部技術は既に国外に流出したものの、それ以外にまだ隠された、それこそ戦後世界を牛耳れるほどの研究資料が残されていると各国諜報部では囁かれ、今回の会談もソビエトが単独でこれ等の技術を独占するのを阻止する為に持たれたのだ。

こうして開始されたベルリン攻略戦は、ドクツ軍が完全に崩壊していたこともあり、一部頑強に抵抗する市民と兵士達以外はすんなりと占領がすみ、ドクツ第三帝国はあっさりと滅亡する。

アドルフの研究成果は、各国で分割されチリジリになったが、これが逆に功を奏し、研究資料に一部欠けた所や、肝心な部分や実際の成果などが抜け落ち、或いは既に持ち去られており、唯の紙束以上の価値は殆どないも同然。

各国に亡命した科学者によって一部復元されたものも少なくはないが、それでも絶対数には足りず、戦後の飛躍的技術改革には失敗したかに見えた……。ただ一国を除いて。

36（後書き）

今回はちょこつと急展開ですが、原作をやった方々にとっては分かりやすいと思います。

補足説明

ヒムラーは戦場で傷を負い、ドーラ教団に助けられて極秘裏に治療を受け、酷い洗脳を受けます。しかし、隙を突いて洗脳が不十分なままベルリンへと脱出、しかし、既にドクツは滅亡の瀬戸際で彼は洗脳の後遺症と疲労から錯乱し、かつての部下と教団の下っ端をけしかけてレーティアを暗殺。自分がその後釜を襲い、無茶苦茶をやって最後は戦争裁判にかけられて満場一致で処刑。これが、この作品での彼の最後です。

少し裏設定

今回四散した研究成果の肝心な部分をベルリン戦前に回収していたのは、バージニア州にある……。

日本帝国御所

今日この日に限っては、御前会議に出席する全員が一人の例外を除き、全員が出席していた。

いつも何かと理由をつけて欠席する猫平内務省長官も、この日は真つ先に御所に訪れ、宇垣長官、平良海軍長官と共に、帝の前に集まり、神妙な顔をして座っている。

「では、御前会議を始めたいと思います。今日はまず最初に宇垣長官からのお話があります」

皆顔をうつ伏せ、暗い表情をしていて誰も帝と顔を合わせようとはしない。

平良長官は、俯いたまま何事かぶつぶつと呟き、猫平長官はそれを気持ち悪そうに見ている。

「では、私目の方から、先日連合国から我国に当てにポツダム宣言が成された事は記憶に新しいと思います。既にドクツ第三帝国は連合国に降伏し、イタリンもムツチリーニ總統が追放され現在は囚われの身となっていて連合国と講和していると聞きます。そして今日その議題と言うのはポツダム宣言に対してなのですが……」

ドン、と音がして、御所内の空気が緊迫する。

帝も険しい表情をして下手人を睨み、他の長官たちも含むところあ

るのか、白い目を向ける。

そんな中、畳に拳を叩きつけて陥没させた平良長官は、まるで怨敵を見るかのような形相を浮かべる。

「私は、断固として反対です。鬼畜米帝に膝を屈するなど、そもそもこんな事になったのは全て帝、貴方のせいではありませんか」

「これ、帝さまに何と言う！！」

激昂する宇垣だが、帝が目で制し、平良の言葉を続けさせる。

「そもそもあの東郷を、売国奴を海軍司令長官にしたことがそもそもの過ちで、奴のお陰で純血の日本民族だけで作られた海軍が捕虜提督など何時裏切るのかも知れぬやからを入れるなど、奴等がガメリ力に裏で通じていたことは明白なのに、私は何度も何度も御注進申し上げたのに、それを聞かず帝は！！」

「平良」

その時、宇垣長官と猫平長官は部屋の中がゾツとする感じて、驚いて帝を見ると、冷たい能面のような感情のない顔を貼り付けてまるで汚物を見るかのような目で冷たく平良を見ている。

「そうだ全てが間違いだったのだ。この平良に全てお任せしてください。帝今からでも遅くはありません。この平良めに日本の全権を……」

「いい加減になさい！！この奸賊め、その汚い口を閉じろ」

カツと目を見開いた帝が、この小柄な少女の何処にそんな力があるのか、部屋全体を振るわせる声を上げて、部屋にいるもの全てを圧倒する。

「そなたの言葉、しかと耳にした。代々日ノ本の民を守り祭つてきた帝に対する乱暴狼藉。さらには国事を捻じ曲げ自らの私利私欲の為に国家を乱す。これ奸賊と呼ばずして何とする――！」

「誤解です帝――！私は――」

「ええい、黙れ下郎。そなたと口など二度と聞きたくない。即刻この者を引っ立てい」

平良がそれ以上何かを言う前に突如帝の前に赤石大佐が現われ、あつと言う間に平良と共に姿を消してしまう。

帝の激昂と、平良の罷免。

あまりに一瞬の出来事で宇垣も猫平も何も言う事が出来ない。

ふと、宇垣が帝を仰ぎ見てみると、大粒の汗をかき、息荒く立っている帝の姿が目に入る。

「帝様……………」

「帝……………」

暫くして、息を整え、まるで全身から力が抜けたようにしてヘタリこんだ帝は弱弱しくひざ掛けに手を置き、小さな声で宣言する。

「連合国の・・・ポツダム宣言を：：受け入れます。これは帝の命令です、ハルさんすみませんが筆を取ってくださいませんか」

帝は女官長ハルに支えられ、何とか机の前に座り、震える手をハルに支えて貰いながら最後まで書ききる。

「私の・・・この国の帝としての最後の役目です。お願いです、日ノ本の民が犠牲になる前にこれを一刻も早く連合国へと届けてください」

宇垣は押し黙って、恭しく帝の直筆の紙を懷に大切に収め、御所をそそくさと退出する。

「あの、今までずっと休んでいた私が言うのもなんですが・・・臣民に対しては何と？」

猫平長官の問いに、帝は乾いた笑みを浮かべて事も無げにこう言った。

「こんな事になってしまったのも元はと言えば全て私のせい。全ての責任は私にありますから、帝直々に直接放送で日本国民に伝えます。それと連合国との講和がなったあかつきには、私が退位することあわせて伝えたいと思います」

その言葉には流石に柴神様も驚き、止めようとするも、帝の疲れきった瞳をみて全てを悟り、何も言わずに頷いて見せた。

猫平長官はただただその一連の流れを止めることも出来ず、見ていることしか出来なかったが、しかし、御所と退出した後、彼は彼なりの役目と責任を果たす為に奔走する。

ガメリカ共和国ニューメキシコ州ソコロ

嘗ては開拓惑星として栄えた星だが、近代を迎える頃にはすっかり資源を掘り尽くされ見捨てられた辺境の惑星。

既に住む者は誰一人としてなく、無人の荒野と化した惑星でとある実験が行われようとしていた。

実験にはガメリカ中から著名な科学者や、政府高官、大統領とそのスタッフに軍部の高官たちが集まり、ただ一人を除いて今から何が行われるのか知る者はいない。

その、ただ一人知る者であるアーネスト・キングは、実験を観測する為に宇宙に展開する戦艦の中、表面上は冷静を保ちつつもこれから行われる実験を前に心中穏やかとは言えなかった。

とうとう、ここまで来てしまったか……。

原作とは違うが、史実に沿って一年早くの完成。

これからの時代は最早戦艦や航空機が戦う時代ではなくなる。

この世界の人類は、これから行われる実験を永久に記憶することだろう。

そして、私はその実験に携わったものとして未来永劫その業を背負うことになる。

いや、やめよう。

どちらにしろ、私がいなくともこれは世に出ていたのだ。

それならば、せめて嘗てのあの世界での悲劇が二度と繰り返されないよう、願うほかない。

と、アナウンスが入り、全員に特殊なサングラスが配られ私も前もって持っていたバイザーを降ろしてこれから行われることを最後まで見続けることしか出来ない。

カウントダウンが入り、ざわついていた部屋の中は静まりかえり、固唾を吞んで実験を見守る。

3 / 2 / 1 / 0

瞬間、閃光が走り観測施設を太陽の中に放り込んだかのように眩しい光が部屋を覆う。

そうして………。

強烈な振動と共に戦艦が揺れ、必至に手すりに捕まった私は思わず目を閉じてしまう。

振動が収まり、光が消えた後、私はゆっくりと瞼を開いてそうして、目の前の光景に絶句する。

先程まで、惑星があった地点には小さな太陽が出来ていた。

いや違う、太陽ではない。

あれは爆発の高熱で地表が焼け爛れ、マントルを貫通しマグマが噴出しているのだ。

周りの者たちも、この光景を前にして、何も言う事が出来ない。

「『我は死なり、世界の破壊者なり』」

この世の地獄と化した惑星を見て、私はオッペンハイマー、アインシュタインと同じ気持ちを感じた。

これは決して夜に放ってはいけない怪物。

決して空けてはいけないパンドラの箱の奥深くの闇に潜む、破壊と死を振りまくもの。

全力の三分の一に押さえた爆発規模でこれなのだから、より強力な新型は、正に星域破壊爆弾のなに相応しい。

私は爆発の衝撃でずれた軍帽を被りなおし、全てを見届けた後、一人観測室を後にする。

去る時、私の脳裏にははつきりと、太陽に包まれ断末魔を上げる日本の姿が焼きついていた。

瞼の裏に焼きついたそれらを、思いながら私は……………。

統一宇宙暦944年九月

ポツダム宣言を受諾した日本帝国は連合国に降伏。

降伏文書への調印式には帝自らも姿を見せ、その様子は全世界に報道され戦争の終結を知らしめた。

日本帝国は全ての権利を連合国に委ね、帝は宣言どおり退位し、これより日本は帝無き時代が始まる。

ガメリカ主導のもとGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）が首都東京に置かれ日本は連合国の統治下のもと戦後復興を目指す。

帝国陸海軍は解体され、司令官は軒並み戦争裁判で戦犯として処刑或いは終身刑を言い渡され、日本海軍前司令長官である東郷毅はA級戦犯として国際指名手配される。

その他にも、小澤提督、南雲提督、山本提督、田中提督など連合海軍の主力と目された将官はらは軒並みB級戦犯として終身刑や禁固刑が言い渡され、脱走し行方をくらませた小澤提督以外全員が刑務所へと送られた。

一番酷かったのが山下長官亡き後の陸軍であり特に中帝国領を統治していた陸軍は関東軍と呼ばれ乱暴狼藉や非道な実験、など各種戦争犯罪を起こし幹部らは全員が処刑、実行犯なども公開処刑にされるなど厳しい処置が取られた。

戦後帰国した山下長官は日本陸軍のあまりの醜態ぶりと帝の退位に絶望し、戦地からの復員に尽力した後政府からの招聘を断り自刃してその生涯を閉じる。

宇垣外務長官も、一時は自殺を考えるも、思いとどまり最後まで連合国との交渉に当たり負け犬と貶されながらもその命が果てる時まで外交の第一線で日本の為に働き続けた。

日本はGHQ指導の下民主化され、憲法の改正、議会の設置に選挙の開催などガメラ力民主主義をモデルとした政治が行われる事となる。

ガメラ力共和国、大戦終結後から五年、世界に向けて公開実験を行い新型兵器超広域殲滅爆弾の存在を公表。

新開発のワープジャンプ方式を使い、従来のワープゲート航法無しに世界中の何処にでもこの兵器を察知されずに送り込める装置を開

発し、以後世界はアメリカ一強のパックスアメリカの時代を迎える。

これ等の技術は、失われたレーティア・アドルフの研究が使われていると噂されたが、真相は解明されていない。

アメリカは戦後四大財閥を解体し、いご健全な経済と社会による幸福を旗印に、世界経済をリードしていく。

戦後、日本はGHQの統治を離れ新たに日本民主主義国と名を変えて再び国際社会の表舞台へと登場する。

しかし、同じ日本という名前でも最早帝の存在は無く、日本の守り神であった柴神さまは何処と無く姿を消した。

守り神が消えた日本は、新たにアメリカの守護の元戦後復興を果たし、経済大国として伸び上がっていくのだが……それはまた別のお話。

37（後書き）

日本終了のお知らせ。

本当は例のアレを使って狂乱する帝を書きたいなと思ったのですが、矢張りアンケートの結果アレは無しの方になりました。

次回でこの作品も終わります。最終話は十話以降どんどん影が薄くなっていた主人公とチハヤに焦点を当てて戦後ガメリカの話を書きたいと思います。

統一宇宙暦954年

ガメリカ共和国の外れにある、カリブ星域。

年中温暖な気候で過ごしやすく、休日をここで過ごす観光客で賑うリゾート星の傍らに、嘗てはその界限で名を馳せた大物が金に飽かせて星を丸ごと或いは一大陸を買ってそこで余生を過ごす隠居さきでも知られている。

私、リーザ・リットンはその中の一つであるとあるリゾート星からも離れた惑星に降り立っている。

現在私はある人物を追っている。

アーネスト・ジョセフ・キング

ガメリカを太平洋戦争、欧州大戦において勝利に導いた立役者であり、ガメリカ史上最も力と権力を握った傑物。

彼の功績は軍事面だけではない。

嘗て若草会という組織がこの国を裏で操っていたのは記憶に新しい。

その若草会と当時ガメリカ海軍統合軍総司令官であった彼との間で熾烈な闘争があり、その結果として、戦後四大財閥は解体され、経政財界の再編が行われる事になる。

その一連のお膳立てをしたのも、若草会が存在するという証拠や四大財閥と政府との癒着、汚職、その他様々な証拠を取り揃え押さえたのも彼だという。

此処まで見て、彼が如何に当時として比類なき偉大な指導者であったかが窺い知れる。

まあ、英雄色好むという例に漏れず女遊びは派手だったようだが・・・。

その彼が、大戦終結後三日と経たずして健康上の問題を理由に海軍を止めたのは驚くべきことだ。

その際、軍部から一切慰留願いが出されなかったのが私には信じられない。

彼個人の性格によるものとされるが、政争に敗れた結果軍部でも厄介者扱いされていたのだと言う。

私には到底信じられない話だ。

その程度で失脚して軍を辞めるのであれば、何故彼の存在が此処まで知られていないのか？

いや、この国は意図的に彼の存在を頑なに隠そうとしている。

実際私が調べた所、彼は健康上の理由で一度入院しその後軍病院に映されたそうだが、どの軍病院に問い合わせてもアーネスト・キングの名は出てこなかった。

そして苦節十年かけて漸く私はここまで辿り着く事が出来たのだ。

私は、これから会う彼が一体どんな人物なのか、心震わせている。

私はリーザ、リーザ・リットン。フリーのジャーナリストさ。

白い砂浜と、浜辺に寄せる小波の音だけが聞こえる中、一軒の白塗りの家が建っていた。

新しく建てられたものではなく、もう何十年もの年月を過ぎていたが、今でも潮風に負けずにゆっくりと時が流れる浜辺に寄り添うようにしてたたずんでいる。

その、白い家のテラスに一人の男が安楽椅子に腰掛け、テーブルにコーヒークップを置いて静かに風と波の音を聞いていた。

ふと、後ろから一人の女性が近づいてきた。

長い膝までありそうな長い髪頭の後ろで纏め、余った部分を垂らした蒼髪の女性が、男に寄り添うようにして耳元で囁く。

そうして、男は頷き、温くなってしまったコーヒーを一口含み、その渋さで先程まで風と波の音でまどろみそうになった頭を呼び起こした。

「客か、珍しいな。こんな所に一体なんのようだ？」

誰とも無く聞いた声は、いつの間にか男の手を取って握っていた女性が答えた。

「アーニー、真っ直ぐこっちに来ているようです。如何します？」

女の瞳を覗いた男は、彼女が何事が企んでいるのが手に取るように分かった。

そして、女性の手を握り返し、手の甲で女の頬をなで、それに擦り寄って顔を傾ける女性の微笑みに満足した男は、女性から名残惜しげに手を離し、ゆっくりと杖を手にとって安楽椅子から立ち上がりこう言った。

「久しぶりの客人だ。丁重に御持て成しをしよう」

女性がからかい半分に、昔のように敬礼してYes, sir!と言ってその言葉に苦笑しながら、男は外出の準備をする為に家の中へと入っていった。

私の名前はリーザ、リーザ・リットン。フリーのジャーナリストをやっている。

現在は私は取材対象の家の前まで来ている。

アポイント無しの訪問で警戒されるだろうが、そこはこのジャーナリスト暦云十年の……私の愛嬌さえあれば何とかなる……はず。

コホン

さてと、私は簡単に服の埃を手で払ってから、愛用のカメラをチエックし準備万端で目の前のドアをノックする。

コンコン

ガチャリと以外にも一回でドアが開き私は是は幸先いいと思い、湧き出る興奮を抑えつつも一体どんな人物なのだろうと相手の顔を見

て……そしてガツクリと肩を落す。

出てきた相手が件の人物ではなく（恐らく同居人、彼の愛人だと勝手に当たりをつける）こちらを見て怪訝な表情を浮かべる、結構いや十人中住人が美人と答える女性がドアに手をかけた姿勢でこちらを見ていた。

「あ、あの、突然のほうひょん！？……っう」

慌てて挨拶しようとして舌の先を噛んでしまい、益々相手が呆れ顔でこちらを見て、なんだか無性に悔しい気持ちになる。

「あ、あの突然の訪問ですが、私フリーのジャーナリストのリーザ・リットンと申します」

女性はそれが何だと言いたげにこちらを睨んでいる。くー、美人だからといって是を記事に書くときケチヨンケチヨンに貶してやる！！

ん、んん。

相変わらず女性はドアの前に立つて無言の圧力を掛けてくるが、しかーし！！ジャーナリストはこんな程度では屈しない。

「実は今日此処にお伺いしたのは、こちらにアーネスト・キングさんがいらっしやると聞きました……」

「そのような方はこの家にはいません。どなたかと勘違いなされているのでは」

と、にべにも無いとはいっきりと言われてしまう。

だがしかーし！！こっちは既にネタを抑えているんだ。それを今からこの女に見せてやろう。

私は、懐に入れていた紙を目の前のアンチクショウ（こんなすまし顔の女なんにアンチクショウで十分！！）に突きつける。

どうだ、参ったか！！是を手に入れるためにどんなに苦勞したか、うつつ思い出すだけで涙が出る…………。

「あの…………これがいったいなにと」

まだ白を切るつもりらしい、ふふふふ、しかし内心の動搖は隠せないようださつきよりも声がうわ……………ちょこつとだけ、いや十分の百分の一くらい上ずっている、かな？

兎に角この私の最新式の装置にも負けない嘘発見レーダーからはこの女が間違はなく黒だと既に証明されているのだ。

さあ、ジタバタせずに堪忍するがいい。

私が腰に手を当てて踏ん反り返って胸を張る。どうだ、参ったか、たしかにお前は手ごわかったしかし、プロポーシオンでは私のほうが上だぞ。

と、ここまでではよかった私だが、次の彼女の一言で脆くも崩れ去ることになる。

「あの…………パスポートを見せられても私にはなんとも…………」

はっ、としてアンチクショウに突き出した紙を見ると、入国審査の時に出した書類を挟んだままのパスポートの方を出してしまっていたのだ。

OhなんというMissいや待てよ、是は罠だそうに違う、さてはこの女見るからにアジア系だがまさか幻のニンジャーやシノブーだったとは。

この私をファンタスティックゲンジューツにかけて錯乱させようとしていたのだ。

さすが忍者！忍者汚い！！

「あゝ、家の前で騒がれるのは迷惑なので、兎に角どうぞ家の中に入ってください」

ほほう、この女ヤルナ。さてはそうとう優秀なシノービとみた。

外では埒が明かないと罠を仕掛けた家の中に招き入れるとは……ふふふ、しかし貴様は決定的なミスを犯した。そう何を隠そうこの私リーザ・リットンこそ通信教育でマスターしたジューダイの騎士なのだ。

フォースを操る私の前に敵はない。

いざ、敵地へ！！

私はリーザ、リーザ・リットン。フリーのジャーナリストをやっている。

現在私は常夏のリゾート星に来ているはずだ。

そう、なのに如何してこんなにも部屋は寒いのだろう。いやさ、暖かいコーヒーがいつの間にかアイスコーヒーに変わっていてそれを知らずに飲んで噴出した以来の気まずさが、いま部屋の中に充満している。

「しかい、よくこんな辺鄙なところへこられましたな。何でもジャーナリストの方だとか。それで前の戦争のことをいろいろと調べているのですよね？」

「ええ、まあ」

この家に入って、何時襲われてもいいように身構えながら家の中を進んでいたが、結局何も無く勧められるままに椅子に座って、出されたコーヒーに口を付けるか否かで迷っている時に、突然、部屋の空気が凍った。

いつの間にかテーブルに向かい合うようにして座っている男から、発せられるオーラ、いや空気が。

それが私には精神的に負荷を与え、体中がカチコチに凍ったようになってしまったのだ。

そして、いつの間にか目の前の男と簡単な挨拶をして、いつの間に

か自分が何故此処にきたのかを話し、そして何を調べているのかも全て喋っていた。

男はそれをうんうんと頷きながら、最後まで聞き終わると色々と尋ねられ、私はそうされるままにただ答えるしかなかった。

それからの事はよく覚えてはいない。

ただ、いつの間にか家を出て、帰りのシャトルに乗ったときに初めて私は意識を取り戻し、朦朧とする記憶の中で、何かが欠けている様な気がしたが、しかしメールで次の仕事が決まった以上私は何処か釈然としない気持ちを抱えながら、星を後にした。

リーザ・リットンが星を発ったその日の夜。

チハヤが寝静まるのを待って私は一人閉じた瞳の向こう側へと思考を飛ばす。

「やあ、遅かったな。今日は来ないかと思ったぞ」

「すまん。少々子猫を可愛がるのに夢中になってしまった」

互いの姿が見えない中、電子の空間で思考だけで情報の簡単なやり取りをした後、私の他集まった皆で今夜の会議を始める。

彼らは『愛国者』と呼ばれる組織の住人だ。

私も軍を去るとき、いや初めから目を付けられていたのだろう、あの日軍を去るときに知ったこの国の新たな事実。

そして迎え入れられた私は、軍を退役し世間的には彼等の力によって存在を希薄化される。

それも是も私が深くこの国の闇に関わりすぎたからだ。

闇を覗く時は向こうもこちら側を覗いていると、それに気付かなかった私が迂闊だった。

四大財閥も彼等にとっては所詮駒の一つ、そして私はその穴を埋める新たな操り人形というわけだ。

今の私は、一人誰にも知られてはならない闇を抱えたまま、自分が

この国の闇と日々同化していくような気分させられる。

それがたまらなく怖くて、恐ろしく、また私に相応しい最後だと思える。

もう私も長くはない。

私が死ぬと同時に、この国に残されている私のデータや思考から新たな人格が電子空間の中に形成され、新たに彼等の一部となるのだ。肉体的な死が来ても、私の精神意思は行き続け、永遠の奴隷としてこの国の闇の中で生き続ける。

心残りには、こんな枯れてしまった私に最後までつき合わせてしまった愛しい人のことだ。

彼女には、本当の意味で自由であってほしいと切に願う。

最後になったが、いつたい何時からだろう、彼らが私が『転生者』だと気づいたのは。

それだけが、不思議でならない。

翌年、一人の老人がリゾート惑星の辺境で心臓発作により死亡した

とニュースに小さくのるが、その老人がいったい誰だったのか？

それを知る人間はただ一人を除いて、もはや誰もいない。

38（後書き）

英雄に安らぎなんてありません。

ただただ墜ちる所まで墜ちていくだけです……。

さて、この話はこれで完全に終わります。

最終話ですが、本当はチハヤとニヤンニヤンさせる予定だったので、実家に帰ってMGSをやっていて、深夜テンションで書いてしまった結果がこれだよ！！orz

小説を書いて思ったのですが、やっぱり小説を終わらせるのが一番難しく体力と労力を消費します。それでもやっぱり書き上げた後の開放感はたまりません。

最後になりましたが、こんな駄作に付き合っただき皆様には本当に感謝してもしきれません。

また、何か新しく書くかもしれませんが、その時は宜しく願います。

では、またの機会まで……。

IF（前書き）

この小説のIFです。

今回から酒量を控えているのですが、何分自宅警備隊の訓練を受けているのでどうしても夜のお供が必要なもんで。

まあ、兎に角コレはありえたかもしれないIFです。

I F

歴史にI Fはないと言つが、全くその通りである。

ああすればよかった、こうすればよかった、これをやっていたら、
やっていなければ、もそうだったらe t c

取り上げれば切がない。

だからこれから話すのはそんなもしあの時の話だ。

そう、もしあの時・・・

あの時、日本がハワイを攻めていたら。

統一宇宙暦940年、日本帝国は遂にガメリカと開戦。

初戦を奇襲によってマイクロネシアを落とし、返す刀でマニラ2000に攻め入ろうとし・・・そのまま無謀にもハワイへと直接攻撃をかける。

奇襲と日本海軍の提督に一人である小澤茉莉による妨害によって状

況が把握できず混乱するガメリカ軍は、まんまと日本軍のハワイへの直接侵攻を許し、結果基地施設の凡そ八十パーセント、駐留していた艦艇の凡そ六十パーセントを損失し、おめおめと日本艦隊を取り逃がすこととなる。

ガメリカ共和国本土では、この敗北に衝撃を受けており、本来のシナリオでは日本は奇襲によってマイクロネシア、マニラ2000、ラバウル程度は落すと見越していた。

その為、新鋭艦をハワイに集め、前線にはワザと旧式艦を送り、失ってもいいように仕掛けていたはずが。

此度まんまと裏をかかれ、ハワイ本星奥地まで日本の侵攻を許し、浮きドッグや各種衛星の他にも、徹底した軌道爆撃によりハワイの基地機能は喪失、奇襲で満足に動けなかったガメリカ艦隊は、新鋭艦共々星屑となった。

ガメリカは、当初の自分達の想定を遥かに上回る損害に混乱し、碌な指揮系統が整わぬまま、破竹の勢いで植民地を制圧していく日本軍に対抗できていない。

そして、ラバウル、が落とされハワイが完全に太平洋で孤立した時、初めて彼らはある決断を下す。

アーネスト・キング退役大將を召還し、再び服役させた後、新たにガメリカ本土防衛艦隊及び太平洋総司令官としての大任を与え前線へと送り込んだのだ。

こうして統一宇宙暦941年

太平洋は新たな局面を迎えようとしていた。

やあ、皆さんこんにちは。

いつたい誰に向かって言っているのか分からないが、まあそこは軽く流してくれ。

今現在、私はひっ常に不機嫌である。

いや、不機嫌なんてもんじゃない。

不機嫌を通り越して今の私には何かをする気力も何もない。

一体全体何ゆえ私がこんな艦隊を組んで太平洋まで向かっているかというとだが、一言で言えば本国の馬鹿共が責任を押し付けあい、結果退役していた私を呼び出して責任も何もかも押し付けた結果、なんだか訳の分からぬ役所につかされ今現在、連中の尻拭いをさせられている訳だ。

全く、四十代で退役してカリブ海に島を買い優雅な独身貴族ライフを堪能していたのに。

折角家まで新しく建てて愛人を囲おうとしていた時に行き成り黒いスーツにサングラスの男達に拉致されて、もう二度と立ちたくはないと思つた戦場くんだりまで来ている。

はあ、神様、私は一体何をしたのでしょう？

「提督、提督、いい加減現実に戻ってください」

あーあー、聞こえない何にも聞こえない。

ガチャリ

「提督、ダメですよ指揮官ともあるうお方が現実逃避などと。しっかりしてくださいねば」

ハイワカリマシタコレカラシツカリトシキカンヤラセテイタダキマス。ダカラソノコウトウブニアテイルジュウヲオロシテハイタダケナイデシヨウカ？

スツ、と後頭部に突きつけられた冷たい感触がなくなり、冷や汗をかきながら俺は後ろを振り返ってみる。

「チハヤ、ここはもうカリブじゃないんだ。私にも一応面子というものがあるんだが」

「あら、貴方がそれを言いますか？出撃前に私に何をしたのか、胸に手を当ててよく思い出してください」

トホホホ

こりゃ適わん。

まあ、コレも惚れた弱みと言っやつなのか。

「降参だ。だがイマイチよく思い出せない事があつてな。どうだろ
うハワイに着いたら「提督、そろそろハワイの防空圏に入ります。
ご指示を」・・・了解した。通信を開いてこちらの位置情報を伝え
てくれ」

会話に割って入るようにオペレーターからの声で、仕方なく仕事に
戻った私は指示を出し、これから如何しようかと考えを巡らす。

兎に角まずは生き延びねば、そうでなくては全てが終わってしまう。
。。。

だがつくづく因果なものだな、この私アーネスト・キングが再び表
舞台に立つなど。

ハワイに到着し、出迎えの提督達からの視線に晒されながら、私はハワイの大地へと降り立った。

人口ではない、本物の重力の感触に、自分が文字通り地に足が付いたような気持ちにさせ、宇宙での嫌な事を少しばかり忘れさせてくれた。

暫く足裏に感じる重力を堪能しつつ、出迎えの提督達の列から一人の若者が前に出てくる。

「ようこそハワイへ、とは言いがたい状況だが歓迎するぜ。俺はイーグル・ダグラス。先月までは太平洋艦隊を仕切っていた」

イーグル・ダグラス、言わずと知れたガメリカで知らぬ者はいぬムービースターであり、入隊後僅か三年で太平洋司令官の地位にまで上り詰めた、正にガメリカンスピリッツを体現する好青年である。

現在は初戦の敗戦の責任を取らされて解任されようとしたが、そうなる前に自分で自認し、その姿が国民には潔いと映り人気はうなぎ上り。

故に太平洋艦隊司令ではなくっても、こうしてまだ提督としてハワイを今まで纏めてきた功労者でもある。

「出迎えご苦労。アーネスト・キング大将だ。一度退役した身だからな、何かと世話になる事が多いと思う。これから宜しく頼む」

お互いに手を差し出し、硬く握る。

「ああそうそう。実は頼みがあるんだが」

「ええ、いいですよ」

「サインを貰えるかな？」

苦笑しながら差し出した手帳に快く応じたダグラスを、私は好ましく思いつつ、司令部へと案内されていった。

日本帝国海軍司令部

帝国海軍司令長官である東郷毅は、情報部からの報告を読み進めつつ、ある見覚えのある名前に行き着く。

それは彼にとって馴染み深い名前でもあると同時に、自分の人生で大きな転換を迎えるきっかけにもなった人物だ。

「東郷長官？ いかがいたしましたか。 なにか気になることでも」

「いや、懐かしい名前を見つけたからな、すこし昔のことを思い出

していたんだ」

はあ、と頷きながら東郷の右腕である秋山参謀はチラリと後ろから東郷が読み進めている書類を覗いた。

「なんだ知りたいのか。まったくしょうがないな秋山は、ほれ」

東郷は秋山に読んでいた書類を投げ渡し、慌ててそれを空中でキャッチした秋山は文章を読み進めそうして件の人物の名前へと辿り着く。

「アーネスト、キング大将ですか？しかしこれには彼は既に退役したと載っていますし別段特別なことではないような気がしますけど・・」

東郷は苦笑しながら秋山にアーネスト・キングがどんな男か話す。

「まあたしかにそうだな。まあキングきょ・・・キング提督？はまあ赤石大佐に調べてもらったが三ヶ月ほど前に軍に復帰していて今はハワイにいるらしい」

「となるとまた新たな敵なんですね。ガメリカの物量には本当に驚かされます」

秋山が呆れ混じりに書類を東郷に返して言った。

損失した艦艇を直さま回復させ、更に退役したとはいえ提督一人をこつとも簡単に補充するなど、日本では到底考えられないようなことだ。

「いや、これは結構厄介だぞ。」

「?と、言いますと」

東郷は返された書類を受け取って机の上に置き、秋山に向き直って言う。

「最悪、日本は負けるかも知れんな」

東郷の口から思わぬ言葉を聞き、秋山は慌ててあたりを見回す。

そして、誰も聞いていないことを確認して、ふうと息をついて東郷に厳しい口調で先程の発言を嗜める。

「東郷長官!! 余りそのような事はこういった公の場では為さらぬようにと何回言えば分かるのですか。まったく、しかしそれ程に強敵となると我々もオチオチ勝利に浮かれてはいれませんね」

「ま、そんな所だな」

秋山と別れる時には普段の調子に戻った東郷だが、内心ではこれからの戦略を大幅に修正しなければならないと考えていた。

相手が本当にあのキング提督だとするならば・・・やはりハワイを早期に攻略するしか手はないな。

東郷は顎に手をあてて幾つもの作戦プランを練りつつ、ふと胸のポケットにいつも入れて持ち歩いている写真を取り出す。

そこには東郷と愛娘の真希それとブロンドの髪をし優しく微笑みか

ける女性との三人の姿が写っていた。

「真希、お父さんお母さんの恩人と戦わなくなっちゃならなかったよ。でも、真希の為に絶対負けたりなんかしないよ」

優しく一撫でして、再びポケットに写真を戻した東郷は、再び司令室へと戻っていった。

IF3

キングが太平洋総司令官として就任して二ヶ月がたち、本土から引き抜いた艦艇と人員を再編しつつ訓練に明け暮れていた。

キングが太平洋艦隊と共に提督を務めることになったガメリカ本土艦隊であったが、その内情はお寒い限りで。

最新鋭の装備を謳っておきながら新兵と予備役を招集しての数合わせで動いており錬度も士気も低く、新造艦もその多くは本土で警備用に使われていた旧式艦群が大多数をしめ唯一の慰めとして最新鋭のエンタープライズ級空母三隻が含まれていたことだ。

キングはハワイ総司令として引き抜いたチエスター・ニミッツと共に何とか太平洋艦隊を形だけは整えることに成功はしたが、キング自身これでは破竹の勢いの日本軍には勝てるとは思っておらず日々司令室で策を練っていた。

そんなある日、ハワイに一隻の連絡船と共に一人の少女が降り立つ。金髪ツインテールの髪を靡かせ、気の強そうな瞳を爛々と輝かせた少女ことキャロル・キリングは案内の兵に先導されて真っ直ぐ司令室へと歩いていった。

司令部へと突然入ってきたキャロル・キリングは、自分を驚いた表情で見る兵達には目もくれず、真っ直ぐ司令席へと歩みを進める。

そうして、

「ハロー、元気かしら。早速だけど私を提督に加えなさい」

司令室でコーヒー片手に書類を読み進めていたキングは、ジロリとキャロルを書類の隙間から彼女の顔を覗いた。

キャロルは相変わらず傲岸不遜な態度を崩そうとせず、腰に手を当ててキングの視線を真っ向から受ける。

暫くお互いに睨み合った後、徐にキングは尋ねた。

「軍隊経験は」

「はあ、キリングを舐めんじやないわよ。伊達にガメリカ軍の80%の兵器を供給しているわけじゃないのよ。士官学校を出ていなくても私をそんじょそこの有象無象とこの私を一緒にしないことね。」

「誰に師事した」

「キリング専属の元ガメリカ海軍の退役軍人。皆優秀な先生だったわ、そして私は優秀な生徒でもあった。なんなら私を教えた人の名前をアルファベットの最初から言っていきましょうか」

「従軍経験や実戦の経験は」

「キリングで研究した試作兵器の実地試験に何度か立ち会ったは。でも、実戦経験がなくなつて私は負けないわ」

「何故志願する気になつた」

「それは・・・」

その問いだけにはキャロルは直に答える事が出来なかった。

「・・・・・・・・」

彼女は暫く思い悩み、つい目を逸らしてしまう。

「答えられないか。なら言ってみよう。スカーレット・キリングなのだろう」

「!?!?どうしてそれを」

「提督なんかやっているとな、嫌でも宇宙^{宇宙}の情報は耳に入ってくる。それにお前は研究不足だな、私は嘗て一度だけ士官学校で教鞭を取った事がある。その時の教え子にスカーレット・キリングはいた」

「じゃあアンタが姉さんの言っていた・・・」

「此处では提督と呼んでもらおう。Ms、キャロル・キリング貴様は自分の個人的な復讐の為に軍に志願しに来たのか」

試されている、彼女はそう感じた。

ここでの答えに間違えればこの男は二度と私の言葉に耳を貸そうとはしないだろう。

無理やりキリングの力を使って提督やもっと上の地位に成ることも出来るがそれでは意味がない。

これはキリングのいや彼女と東郷の個人的な問題で、彼女自身が解決しなければいけないことなのだ。

「確かに、私は自分の復讐心を満足させる為に軍に志願しに来た。でも・・・」

「でも、私にだって守りたいものがある。たとえそれがどんなに小さな事であれ私のプライドいえ命にかけたって守らなきゃいけないの。それにキリングの一員としてガメリカの兵器が負けるのは我慢がならないは。私はキリングに自分達の兵器にそれに携わる人たちを尊敬している。ただ後ろから見て安全な場所で指図するような連中とは私は違う。私は自分も同じステージに立っていたいの。私の大切なものを守る為に、そして何よりも私の誇りに賭けてガメリカの優秀な兵器とメカニック、ソルジャーの誇りを取り戻す為に」

自分の心の正直な気持ちを全部出した。

後はこの男が如何評価するか・・・。

「ふん、子供の理論だが、いっぱしの口をきく能はあるようだな。よからう貴官の志願及び任官を許可する」

キングは立ち上がって右手を差し出し、キャロルは差し出された手を確りと掴み改めてキングの顔を見る。

「ではキャロル・キリング、貴官を希望通り提督にする・・・という訳には流石にいかん。だが変わりに貴官には臨時の副官として艦隊勤務を告げる」

「まあ、あんたのこと・・・失礼しました提督。アドミラル」

「まあいいだろう。おって詳しい内容は通達する。下がっていいぞ」
話は終わったとばかりにキングは再び椅子に座って書類に目を通し、
キャロルはきびを返して司令室を後にした。

キャロル・キリングが提督として入籍しました。

IF 4

統一宇宙暦941年

ガメラ力海軍は不気味なほど沈黙を保ち、一切の行動を起こそうとはしなかった。

何度が無人偵察衛星や強行偵察を慣行するも、そのつど徹底的に叩かれてハワイの情報は一切入ってこない。

東郷毅は、ガメラ力軍と連携を組んでいるエイリス帝国を弱体化させる為にインドカレーの攻略を決意する。

東郷は開発に成功した空母を小澤提督に預け第一航空艦隊司令に任命し、インドカレー攻略の主戦力として作戦に参加させる。

こうして東郷毅長官を含め小澤提督、山口ギヤモン提督率いる航空艦隊を主力とし、ドクツからの客将デーニッツ提督、南雲提督、等の五人を主力とした総勢七個艦隊でインドカレー攻略を目指す「インド洋作戦」が開始された。

エイリス帝国植民地インドカレー

インドカレーはエイリスの植民地となつてからその豊富な資源、人口によってエイリス帝国各植民地の中でスエズと並び最も重要な場所に上げられる。

しかし、莫大な富はやがてそこを統治する貴族たちの心を腐らせ、
エイリス植民地の中で最も腐敗が進んで星域としても有名である。

そのインドカレーを守るエイリス帝国騎士提督の一人、ヴィクトリ
ー・ネルソン率いるエイリス東洋征伐艦隊は、ベトナムでの敗北の
傷が癒える間も無く日本軍迎撃の為に攻撃する。

彼等はエイリス帝国女王セーラ・ブリテンより命を受け東洋の竜を
討つと勇んでアジアにまで遠征したが、現地植民地総督の無理解と
植民地軍の士気と錬度の低さに呆れ、結局自分達だけでベトナムよ
り失われたマレーの虎を奪還する為に進軍するもこれを退けられ。

無能と罵られる中今度は日本軍がベトナムに進軍し、それを迎え撃
つも敵将の巧みな戦術の前に錬度と士気の低い植民地軍を突破され、
味方を立て直すために艦隊を分散させた東洋征伐艦隊はその隙を突
かれベトナムは陥落。

ネルソンは何とか艦隊を再編して汚名返上とベトナム、マレーの虎
を一気に奪還しようとするも、これも現地軍に足を引っ張られ本国
からの補給物資も横流しされてしまった東洋征伐艦隊は、インドカ
レーから動くことさえ間々ならなかった。

補給も整備も碌に受けられず、本国を出国するときには白亜の壁と形
容された美しい傷一つ無い船体はあちこちが煤け、インドカレー防
衛の為に植民地各惑星に艦隊を散り散りにされた為かつての威容は何
処にもなかった。

それでも急行し、集められるだけの艦艇を集め、錬度の低下も懸念
されたがそれでも久しぶりの海戦と士気は高い。

幸いにしてインドカレーには難攻不落（ハイデラバード卿曰く）の拠点要塞がある為何とか全軍が集結するまでの時間は稼げると踏んでいた。

だが……。

「ハイデラバード要塞に敵陸戦隊突入しました。駄目です要塞は陥落しました」

「東インド会社の艦隊が撤退を開始します。ああ、インド会社の移動支社が敵の攻撃で崩壊！！」

「敵の第三次攻撃隊確認、十時の方角より突入してきます。ネルソン提督指示を！！」

「馬鹿な……こうもあっさりと。我エイリス帝国が敗れるのか」

ネルソンの旗艦ヴィクトリーの艦橋で、オペレーターから寄せられてくる自軍の被害報告にネルソンは肩を震わせた。

敵はワープゲートから侵入したと共に航空機単独での長距離攻撃を仕掛けた。

これにより、突然の空襲に慌てふためき陣形を崩した植民地艦隊と現地総督艦隊は勝手に撤退をはじめ、いつの間にか潜入を果たしたドクツの潜水艦隊が混乱に拍車をかける。

混乱する味方を何とか立て直そうとネルソンが目を放した隙に日本艦隊がインドカレーに突入。

虎の子の空母も、直衛機発艦の最中を狙われ戦うこともなく轟沈し。

機動戦力を失ったハイデラバード要塞は、大型バリア艦艇を前面に押し上げた日本軍の攻撃の前に要塞の機能を失い僅か半日で陥落。

戦場に勝手に入ってきたインド会社の艦艇は数に入れないとして、ネルソン味方の窮地を救うべく何とかしようとしてはいたが、敵の有力な航空母艦艦隊に補足され一方的に攻撃を加えられ、エイリス帝国伝統のバリア艦も、バリアの内側に入って攻撃できる航空機の攻撃の前には無力であった。

「くっ、せめて一太刀、一太刀敵に負わせる事が出来れば・・・」

炎上し爆沈する僚艦の最後を見届けつつ、ネルソンは悔しさで歯を食いしばった。

同じ頃、日本海軍旗艦長門では、

奇襲とはいえば一方的に敵を殴り、被害を最小限に収めることに成功した日本軍の間では安堵感が広がっていた。

敵将ネルソンは音に聞くほどの勇将で知られ、実際彼等を何度も苦しめてきた。

そのネルソンが、彼等の目の前で手も足も出ない状態で苦戦している様子は、日本海軍の溜飲を下げる。

その一方、東郷長官は作戦の経緯を眺め、どのタイミングで陸軍に突入してもらうかを図りつつも油断なくエイリス帝国の動きに目を光らせていた。

勝って兜の尾を締めよ、という言葉があるように戦場では一瞬の油断が命取りになる。

それを嫌というほど昔味わった東郷は、敵がほぼ壊滅した状態になっ
ていてもまだ手を緩める気にはなれなかった。

「敵艦隊に動きがありました。これは・・・全速で後退していきま
す」

オペレーターの報告でレーダー上からエイリス艦隊がインドカレー
から撤退する様子が映し出されていた。

「欺瞞には見えませんね。本格的にインドカレーを諦めたのでしょ
う。それが撤退すると見せかけて各地に分散しゲリラ戦を仕掛ける
のか・・・どちらにしる東郷長官、追撃しますか」

東郷の長年の右腕であり主席参謀である秋山は、レーダー上の光点
の動きを見ながら如何するかと東郷に問う。

「いや、追撃してこれ以上犠牲を出すことも無いだろう。それより
も行き成りインドカレーの本星を攻めたからな、周辺の惑星に駐留
する艦隊が集まってこないうちにさっさと制圧するぞ。利古里ちゃ
ん連絡してくれ」

「分かりました。では」

こうしてインドカレーの戦いは終わり、僅か一日でインドカレー本星を攻略した日本軍は、その後周辺各惑星を次々と占領し一ヵ月後にはインドカレー星域は完全に日本の領土となった。

エイリス帝国ではインドカレー失陥の報に慌てふためき、東洋艦隊も壊滅状態となった今、これ以上日本軍の侵攻を防ぐ為にガメラ力太平洋艦隊に頼るほか無い。

東郷は、あえてこの年に無理をしてインドカレーを攻略することでまだ体制の整っていないガメラ力太平洋艦隊を引きずり出すし、太平洋での優位を確立し早期講和を成す事で戦争の終結を狙った。

だが、ガメラ力太平洋艦隊はその後も沈黙し行動を一切起こそうとはしなかった。

東郷は自身の読みが外れたと実感しながら、次の一手を考える。

IF5

統一宇宙暦942年

この年、日本軍は大挙してガメラリカ太平洋艦隊根拠地であるハワイへと遂に侵攻を開始する。

完成した新型戦艦大和、武蔵を加え、戦艦十六隻、正規空母八隻、大型空母二隻にも及ぶ大艦隊と、日本軍の名だたる提督達がここに集結していた。

帝国海軍司令長官東郷毅を筆頭に、宿将山本無限、空母の申し子小澤祇梨提督、最近離婚したばかりの南雲圭子提督、特攻隊長であり日本海軍潜水艦隊を率いる火の玉小僧田中雷蔵提督、日本を古来より見守り帝を守り続けてた柴神さま。

この他各地で捕虜にし新たに日本海軍の仲間となった捕虜提督等も加え、今正に太平洋の運命を決まる一大決戦が始まるうとしていた。対するガメラリカ軍は体制がまだ十分に整ってはいないがそれでも、モンタナ級戦艦四隻にアイオワ級も四隻、ガメラリカから掻き集められた超弩級戦艦全十二隻を加え総勢二十三隻もの艦隊が集結し、空母は完成したエンタープライズ級を新たに二隻加え、正規空母は三隻、大型空母二隻の早々たる軍勢を取り揃えている。

防衛戦の総指揮を取るのはアーネスト・キング大将、航空艦隊はフリス・ハルゼー提督、ルメール提督、ドゥーリットル提督が率い、ハワイの守りにはチェスター・ニミッツ中将がつきガメラリカ軍の総力を挙げた防衛戦が始まる。

ガメラ力海軍ハワイ総司令部ではオペレーターたちが次々と指示を出しあるいは情報を絶えず連絡し熱気に包まれていた。

彼等を見下ろすようにして一段高い場所に設けられた司令席に座るアーネスト・キングはモニター上に刻一刻と接近する日本の大艦隊を見て暫し沈黙する。

「とうとうここまで来たな。出来ればもう少し時間が欲しいところだったが、現有戦力でやるしかないか」

「閣下、全艦所定の宙域に配置が完了しました」

「うむ」

オペレーターからの報告を聞き、もうそんな時間かと思ったが緊急時の即時展開は何度も演習を繰り返したから慣れていたんだろう。

錬度と士気の低い新兵や老兵を何とか一人前の兵士に育て上げるのにも苦労したが、港湾施設を徹底的に破壊され物資集積所やドッグなど半年以上も使い物にならなかった。

それでも何とか基地機能を復旧し、ガメラ力流の大型機械を用いた復旧作業でドッグを修理、艦隊を漸く安全な港に移す事が出来た時ほどホッとした事は無い。

幸い地下基地ドッグは殆ど無傷で残されていた為、廃艦寸前の船を資材として解体し数合わせのため艦船の建造を急がせ、本国の無理な首脳部共相手に必要物資や洩る連中相手に恫喝までして戦力を整えた。

漸く太平洋艦隊再建の目途が立った時に日本軍は来た。

全く、これでは史実の逆ではないか。

準備も整わぬ我艦隊に対して、歴戦の兵揃いである日本海軍。

船の数では劣っていなくても質の面では大きく水をあけられている。

だが、キングには一つの勝算があった。

現在本国にて本土艦隊の再編が完了し一週間後にはUSSJを出航するという。

ならば今日と到着までの二週間を耐え抜けば勝機はある。

キングは自身の乗艦に乗り込み、前線指揮をとりつつ今は目の前の戦いに集中した。

IF6（前書き）

前話のガメリカの援軍ですが二日では早すぎたので二週間に変更しました。

この度は皆様にご不便をおかけして大変申し訳ございません。

IF 6

ハワイ攻略戦の初戦は互いに名将同士が故に凡戦に終わった。

航空機を出しての索敵合戦と、その後の制空権争い。

各惑星の飛行場から戦闘機を発進できるガメリカと、艦隊攻撃の為爆装しなければならぬ日本軍とでは数に差はあるものの、日本軍の零式艦上戦闘機、通称 零戦^{ジーク}は旋回性能、航続距離、ドッグファイトにおいてガメリカ戦闘機を上回り、キルレシオは1:1.2と圧倒的であった。

僅か三十機程の零戦が、八十機を超えるガメリカ軍戦闘機を三十分で一機の損失なく全滅させる程で、この被害に頭を悩ませたキング提督は以後零戦とのドッグファイトを禁止せざる得なくなり、ガメリカ軍において緊急特別チームが編成された程だ。

制空権争いにおいて優位に立った日本軍ではあったが、僅か三百機ほどのゼロ戦だけでは二千機以上ものガメリカ軍機相手に制空権を長時間維持することは適わず、結果一つの惑星を争う泥沼の戦いへと引きずり込まざるを得なかった。

こうして二日ほどは互いに小競り合いに終始し、様子見の状態が続いた。

東郷長官は余り時間は掛けられないと見ていたが、しかし現状ではガメリカ軍の守りは堅く、無理に攻めては被害が大きくなるばかりだが、早くも貴下の提督達は不満の声を上げる。

特に田中雷蔵など若手の提督達は初戦から連合国を圧倒し、その勢いに乗って敵を侮るような空気が流れており、山本無限提督や南雲提督など海軍でも実力のある提督達はそんな彼等を危ぶんでいた。

連合艦隊旗艦長門艦橋

「何で今直ぐ全軍で攻めないんだ！！東郷長官」

フルスクリーンのモニターに暑苦しい男の顔が鼻息荒く額を突きつけて怒鳴り込む毎度毎度の事に東郷は若干呆れながらもどうせなら美人の胸元をフルスクリーンで見たいと頭の片隅で思った。

「田中提督、東郷長官に対してその口の利き方はなんです！貴方はもう少し上官を敬うという心を………」

秋山が相変わらずいつものことだが口の悪い田中に青筋立ててクドクドと説教しているが、田中も田中でムキになって、秋山を罵倒するしまつ、オマケに……

「アンタもさあ、毎度毎度クソ面白くもねえ説教ばかりでもうこっちは聞き飽きてんだよ！！」

「それは貴方が態度を改めないからで、そういうのは自業自得と言うのです。これに懲りたら今度からは態度を改めるといふ………」

「ああもつ！！うるせえこのハゲ！！！！」

その瞬間、互いの船の艦橋はシーンと静まった。

「な、なんだ、なんだよ」

突然の静寂に田中が慌てながら左右を見回すが、さっきまで威勢よく田中の言葉に頷いていた兵士たちはそそくさと逃げ出し、他の者も顔を合わせようとはしない。

「・・・・・・・・」

「あつ、なんだよ。はつきり言えってんだよ!!」

それでも頭に血が上った状態の田中はこのときすっかり忘れていた。そう、連合艦隊において絶対に手を触れてはいけないことに手を触れてしまったのだ。

「東郷長官、田中提督は私に”直接”用があるようなので、少し田中丸の方に行つて来ます」

「ああ、秋山程々にな」

東郷の言葉を聞いていたかないのかそのまま秋山は幽鬼のように艦橋から立ち去った。

「おい、いったいなんなんだよさっきから。俺をおいてくな!!」

「田中」

「う、なんだ」

「生きる」

怪訝な顔をする田中に東郷は最高の笑顔とサムズアップをした後徐に通信機のスイッチを切り以後全軍に暫く田中丸への通信は控えるようにと通達した。

その後田中がどうなったかを知る者は誰一人としていない。

皆この事になると誰しもが口をつぐみ、何があったのかを離そうとはしなかった。

だが、一つだけいえるのは以後田中提督はその生涯において二度とハゲという言葉を言わなかったということだ。

ガメラ力軍ハワイ防衛戦司令部

開戦から既に三日が経過していたが、いぜん予断は許さない状況にも関わらずガメラ力軍将兵の顔に緊張や焦燥感の色はなく、みな各々の務めをキビキビとこなしている。

現在ここハワイにはガメラ力中の名将たちが集まっている。

キング提督を筆頭に、ソロモンの魔女フリス・ハルゼー提督、その実の弟にして海軍きつての闘将 猛牛^{ブル}のあだ名を持つウィリアム・

ハルゼー提督、キングに最も評価されているという噂の知将スプル
アンス提督、初戦で壊滅したハワイ基地を見事復旧し太平洋艦隊を
復活させた立役者チェスター・ニミッツ、元太平洋艦隊司令にして
元ムービースターのイーグル・ダグラス提督、クレイジーホースの
名を拝命したキャシー・ブラッドレイ提督等等。

早々たる面子がここハワイに集まっていた。

それゆえ、兵士たちは名将たちが一同に会するこの戦いに参加でき
たことを誇りに思い、またその指揮のもとで戦える事で否が応にも
士気はうなぎ上りで、訓練以上の成果を発揮している。

「そろそろ、日本軍が痺れを切らしてお得意の艦隊戦を挑みたいは
ずだ。となれば……」

キング提督は熱気溢れる司令室の中で、作戦図を睨みながら肌にヒ
シヒシと伝わる士気の高さに心なし高揚していた。

緊急の防衛戦という事もあり心配はしていたが、この分だと杞憂に
終わりそうだ。

司令部に詰める参謀たちが作戦図に移る艦隊をシュミレーター上で
次々と動かし、効率よく如何に防衛戦を成功させるか頭を捻ってい
た。

キングはここ三日間の会戦で得た日本軍の通信を記録したものを手
元のミニディスプレイに映し出し、暗号解読班から送られてきた情
報と照らし合わせて日本軍のある部分に注目した。

キングは手元の端末を操作して、作戦図形のある一点を点滅させる。

「諸君、作戦が決まった。まず日本軍は全体的に見て比較的若い将兵で構成されている。そして彼等は初戦からの連戦で浮かれ司令部からの命令も度々無視する傾向にあると、情報部からの報告で判明している。日本軍上層部にも独断専行を許すような風紀があるが、これは今は除いてその中で特に司令部からの命令に反抗的なのがこのタナカ・ライゾウという男だ」

作戦図画切り替わり、田中雷蔵の顔と詳細な家族構成から趣味、今までの略歴などの情報も一緒に記載される。

見て分かるように日本軍の情報のその殆どがガメリカに流出し、本来なら最高機密に類する暗号もガメリカではとくに解析済みであった。

日本の諜報を一手に司るスーパ―忍者赤石大佐とて全てがこなせる訳ではない。

必ず綻びが生まれ、そこからどんどん傷口を広げて外へと奪われていくのだ。

まあ、キング提督が海軍情報部とラングレーのあのあの赤嫌いを諭し日本とその支配星域において共有主義活動を活発化させ、ついでとばかりに旧式の武器を横流しして日本軍に対するゲリラ活動も行わせていた。

赤石大佐は日本と植民地の赤化を食い止めるべく西奔東走し、とてもではないが海軍まで手が回らない。

こうしてまんまと日本海軍の情報を、障害なく手にする事が出来る

ガメリカは、高笑いを上げずにはいらなかったとか。

「ヤツを見て分かる様に、独断専行が多く、上官の命令を無視して先行しその度に処罰されてはいるが同じくらい武功を上げている」

「ほほう、さしずめ日本のブラッドレイ提督ですね」

参謀の言葉に、他のものが釣られて笑う。

「いやいや、ブラッドレイ提督はあれはあれで可愛げがありますよ。そう人に寄り付かない野良猫キヤットのような」

キャシーとキヤットをかけたくだらないジョークではあるが、緊張を解すには十分だ。

「じゃあ差し詰めこいつはクリスマスにでるフライドチキンチキンのような髪型をしているから七面鳥チキンか」

確かに、田中提督の髪型はよく見ると七面鳥の鶏冠にも見えなくは無い。

部下の手前声を出して笑うことは出来ないが、見えないように口を手で隠して顔を背ける仕草をしたが、誰も気がついてはいないよな？

「では提督、この七面鳥チキンをどう料理しますか？」

程よく緊張が取れたところで、早速本題に入る。

「うむ、現在ヤツはこの地点に展開している。規模から見ても恐らく駆逐艦一個艦隊相当だが、ヤツは雷撃戦のプロフェッショナルだ。

今次大戦においても日本軍の重要な局面でその突破力、爆発力とでこれまでも大きな功績を挙げている」

皆日本軍には煮え湯を飲まされたもの同士だ、一提督とはいえ含むところは多分にある。

「だが、情報からヤツは司令部とソリが合わないようだ。特に上官に対する反感や暴言など、ガメリカではとくに軍事法廷送りにされて当然のヤツだが、今回はそこに漬け込む」

そこからキング提督は自分のプランを話、参謀たちはその成功率を高める為に奔走した。

こうして、会戦から三日、ガメリカ軍が遂にその姿を現す。

IF 6（後書き）

会話が相変わらず苦手です。でも何とかする。

戦闘描写が・・・お察し下さい。

こんな作者ですが、相変わらず酒飲んで不貞腐れた勢いで書いています。

会戦から三日、この時田中雷蔵提督が展開する連合艦隊右翼にガメリ力艦隊が姿を現す。

その突然の襲撃に慌てふためき、急いで迎撃の準備を進める日本軍ではあったが、ガメリ力艦隊は日本軍の最大射程ギリギリの距離を行ったり来たりして全く攻め入る様子を見せなかった。

右翼艦隊は、これを敵の誘いと見て艦隊を出撃させようとはしなかったが、若手仕官の間ではこれをガメリ力の挑発ととり大和魂を見せ付けると声高に叫ぶ声が大きくなっていく。

田中雷蔵提督も当初は迂闊に攻めるようなことはしなかったが、段々と若手仕官の熱気に移り遂に我慢の限界を超えてようとしていた。

「うつつう、クソ。どうして出撃しなきゃねえんだ！！敵を叩くチャンスだろうが」

「全くです。これでは陸軍の連中に腰抜けと笑われます」

「ああ、クソ、クソ。もう我慢ならねえ、お前ら！！機関最大出力、全力でいってあの目の前の連中をブツ飛ばせ」

「オウ！！」

堪え切れなかった田中提督は、司令部からの厳命を無視し単独で敵艦隊へと突っ込んでしまった。

「近藤提督！！田中艦隊出撃、真つ直ぐ敵艦隊へと突っ込んでいきます」

「何だと！？直に止めろ、東郷長官に通信を・・・」

「ああ、他にも他の艦隊から続々と船が出撃していきます。全艦宛の通信でどの艦艇も『田中提督に続け』と発しています」

「くう、堪え切れなかったか・・・。致し方あるまい、こちらでも出撃するぞ。あのやんちゃな小僧の首根っこを今度こそ掴んでやる！！」

こうしてきせずして始まってしまったガメリカ艦隊との決戦は、キング提督の思惑通りに運んでいく。

連合艦隊旗艦長門艦橋

「東郷長官、右翼の山本提督より通信が入っています。『田中艦隊先行す。近藤艦隊は救援の為已む無く出撃す』とのことです」

「田中提督は何をしているのです！？あれ程敵の挑発には乗ってはいけないと命令したのに」

秋山参謀は田中提督の勝手な行動に怒りつつ、艦隊が敵の術中に嵌ってしまったことに気付く。

「東郷長官、敵の狙いは恐らく釣り出した右翼艦隊の殲滅ではないでしょうか？全軍に敵の伏兵に注意するよう発します」

「ああ、分かった。だが、キング提督がこんな定石どりの手を打

つか・・・・・・・・」

東郷長官は一人そう呟きながら、敵の狙いがまた別のところにあるのではないかと、漠然としながらも考える。

ガメラリカ海軍ブラッドレイ艦隊

初戦のマイクロネシア奇襲戦負傷しながらも復帰したブラッドレイ提督は、自分達の挑発に釣られてのこのこ出てきた日本軍を鼻で嘲笑った。

「へっ、所詮ジャップの奴等は知恵が足りないってか。こんなに簡単に釣れるとは、奴等はやっぱり猿イエローモンキーだな」

「ええ、全くです。それより提督、そろそろ頃合かと」

「分かったよ。ちょっと癪だが、ビッグボスの命令には従わないとな」

ブラッドレイ艦隊は敵がこちらを射程にギリギリ収めない距離を保ちながら、ゆっくりと後退していく。

それに釣られて敵陣奥深くへとまんまと誘い出された日本軍は突如として出現したガメラリカの攻撃機部隊に襲撃される。

艦隊の突進力を挙げるために紡錘陣形状に密集していた田中艦隊は、

航空機に好いように翻弄される。

「クソ、やっぱ畏だったか。卑怯だぞ!!」

それでも何とか輪形陣を組もうとするも、艦隊に他所の船まで入り込んで思うように陣形が取れない。

「ああ、なんなんだよ奴等は。俺達の邪魔をして、敵なのか？味方なのか？どっちなんだ!!」

田中提督は事雷撃戦のプロフェッショナルではあるが、巡洋艦以上の士気など士官学校のシュミレーション以外は取った事がなく、立場ここでは一番上の階級にも関わらず、指示が出せないでいた。

そうこうする内に、今度は撤退していた筈のブラッドレイ艦隊が反転し、時計回りに迂回して田中艦隊の後方を突く。

「よし、お前らジャップのケツの穴に突っ込んでヒイヒイ言わしてやれえ!!」

ブラッドレイ提督がマイクロネシアでの借りを返す為、号令を上げて田中艦隊に襲いかかる。

突然後方からの敵の攻撃によって混乱が更に増した田中艦隊は、陣形が崩れに崩れ艦隊としての体を成してはいなかった。

この時、田中艦隊を救出に向かっていた近藤艦隊は予め宙域に伏せられていたガメリカ潜水艦隊の奇襲を受け混乱し、浮き足立つも近藤提督は持ち前の統率力を発揮し上手く艦隊と纏め上げ逆に敵の潜水艦撃滅の好機と見て反撃にかかる。

「大型艦艇を艦隊の中央に集め巡洋艦駆逐艦で守るのだ。ソナー員は異変があつたら何でもいい、直に知らせろ。ここで足を止めたら食われるぞ」

「提督、ソナーに感、敵潜水艦が亜空間から浮上します」

「堪え切れなつたか。全艦敵潜水艦出撃ポイントに向け宇宙爆雷投下！！ソナー員は注意せよ」

真空の宇宙空間で複数の閃光が起き、爆発によって亜空間ソナーが乱れるが暫くして回復したそこには、敵潜水艦の反応が消えていた。ホツとしたのも束の間、直に別方向から魚雷が発射される。

更に、艦隊の前方から扇状に時間差をおいて扇状に放たれる魚雷の数々に皆一様に冷や汗を垂らす。

「回避いや迎撃だ！！対空パルスレーザー俯角最大、銃身が焼きつくまで撃ちまくれ」

今から回避運動をしては間に合わないと見た近藤提督は陣形が崩れ敵に付け入る隙を与えない為迎撃を指示し、本来の使い方ではない対空砲を咄嗟の判断で迎撃に使う。

十本放たれた魚雷のうち、六本が途中で迎撃され一本が逸れるも残りの三本のうち一本が一番外輪に位置していた駆逐艦に命中、後の二本もそれぞれ駆逐艦の中央と艦尾に直撃し航行不能になる。

「損傷した艦は陣形の中へ！！巡洋艦を空いた穴に当てる。ソナー

員目標は」

「ばつちり、亜空間に潜っていますがこの深度なら間違いなく命中させます」

「よし、見ているガメリカめ。自分たちだけが新兵器を持っているのでは無いからな」

命令と共にミサイル巡洋艦から発射されるミサイルは、対潜ソナーの誘導に従い針路を変えていく。

従来の対潜装備では目標の位置は判ってもそれを確実に撃破するためには亜空間こうこうから浮上した潜水艦を狙い打つか、亜空間航行から戻ろうとする直前の宙域に爆雷を投下して撃破するかの一通りしかなかった。

前者はそもそも潜水艦の名の通り余程の事が無い限り浮上はせず、後者はや敵の存在が明らかで尚且つその移動進路を予想できて初めて効果を発揮する。

だが、どちらにしても通常空間を航行する船にとって、潜水艦相手では後手に回らざる終えない。

これをどうにかする為に開発されたのが対潜ソナー艦と索敵艦を合わせた新しい対潜戦術だ。

対潜ソナーで潜水艦を発見し、予想針路と速度、深度を情報収集処理に優れる索敵艦が行い全艦に知らせる。

目標の位置を絶えずマークし、そのデータを下に今度はミサイル巡

洋艦とリンクして目標まで誘導するというものだ。

従来の爆雷では射角の問題で思うように攻撃できなかったが、目標で大きくホップアップするミサイルは全方向をカバーでき、威力射程共に爆雷を大きく上回っている。

だが通常空間にいない潜水艦相手では命中は見込めないがしかし、対潜用に改造されたミサイルは短時間ながら亜空間潜航が可能になっており目標を確実に狙い撃つ。

発射された八本の対潜ミサイルは誘導に従い、目標付近で亜空間潜航を開始しソナー員がソナー上の光点の反応を固唾を吞んで見守る。そして、目標とミサイルが重なり光点が同時に消える。

「目標に全弾命中を確認。やりました敵潜水艦六隻同時撃沈です」

ソナー員が興奮気味に新兵器の戦果を伝え艦橋の士気は上がった。

「よくやってくれた。引き続き気を引き締めて警戒に当たれ。これより艦隊は本来の任務に戻り田中艦隊救出へと向かう」

近藤提督は新兵器の確かな手ごたえを感じ、顔を綻ばせるも直に任務中ということもありキリッとした顔に戻って浮かれた空気を引き締めた。

こうして近藤艦隊は駆逐艦三隻が被弾しそのうち一隻は艦尾に魚雷を受け航行不能となるも残りの二隻は応急処置を完了し艦隊へと復帰した代わりにガメリ力潜水艦隊を撃退し九隻を沈めることに成功する。

だが、依然として状況は予断を許さずまた本体との連絡も宙域全体にかけられたジャミングによって連絡が取れない中、戦いは次のステップに進もうとしていた。

近藤艦隊がガメリカ潜水艦隊を撃退し、田中艦隊救援の為船足を急がせている時、連合艦隊右翼を率いる山本無限提督は旗艦の艦橋で一人腕を組み難しい顔をしながらスクリーンに映る味方艦隊の動きを見ていた。

現在この宙域全体に渡って敵の強力なジャミングの影響を受け、艦隊間での通信が間々なくなっている。

これは地の利のあるガメリカ海軍が連合軍の知らないルートを通り長距離からでも効果を発揮する指向性超長距離用ジャミング装置の影響下にまんまと入ってしまったという事もある。

その為何とか近藤艦隊、田中艦隊と連絡を取ろうとするもそれが出来ない状況が続き、山本提督は忸怩たる思いを抱きながらいつもの人を食ったような不適な笑みは無い。

「山本提督・・・・・・・・」

そんな山本提督を心配してか山本提督付き看護婦である古賀は提督の身を案じ声をかけるも。

いつもは直返事が帰ってくるはずの山本提督はただ少し頷いただけで、再び艦橋のスクリーンに目を向けるだけで、古賀は山本提督が何時に無く真剣な思い出戦いの望んでいるのだと悟る。

「っ！！山本提督、田中艦隊より微弱ですが救援信号をキャッチしました！！」

その報告にカツと目を見開いた山本提督は直に指示を出す。

「全艦機関最大全速、これより我艦隊は近藤艦隊と合流し田中艦隊救援へと向かう」

「し、しかし山本提督。これは敵の欺瞞かもしれません。いま少しお待ちを、それに全軍ならずとも艦隊の半分を出せば済む話です」

山本の副官が慌てて山本を制する。

ここで右翼艦隊が抜けるような事があれば敵に付け入る隙を与える事に成りかねないからだ。

「いや、この敵の用意周到さからいつて田中艦隊及び近藤艦隊は敵の有力な艦隊とぶつかった可能性があるやもしれん。それに、今ここで田中、近藤両提督を失えば戦力の低下も免れん。そうなればこの戦、勝ち目は無い」

確かに、今は戦力が伯仲しているとはいえ来るべき決戦において両提督が抜ける穴はあまりに大きい。

唯でさえ人材が逼迫している日本軍では、開戦から戦い続けている提督と貴下の将兵は何物にも勝る宝石なのだ。

そんな彼等を見捨てることなど、今の日本軍には土台無理な話だ。

「ですが、それなら東郷長官にも連絡を」

「そんな時間はねえ。東郷長官には事後連絡になるが、今ここで二

人を失うことには変えられん」

山本提督もそれを判つてはいるが、少しでも早く動き何とか救援が間に合うようにしたいと彼なりにもかなり焦っている事が窺える。

「山本提督、東郷長官から通信が入っています」

「!？」

オペレーターの声と共にスクリーンに東郷の姿が映し出され、山本提督と副官等が敬礼するのを手で制する。

「そのままでもいい。山本提督、既にこちらでも田中艦隊の窮状は掴んでいる。悪いが奴のことを頼んでいいか？」

思っても見ない長官の発言に少々面食らった山本の副官ではあるが山本提督は我意を得たりと直さま全軍の出撃を命じる。

一応右翼の守りとして二個戦隊ほどを残してはいるが、それでも大部分の戦力を出撃させたことには変わらず、結果として連合艦隊中央はそのわき腹を曝け出すこととなる。

ガメリカ海軍ハワイ防衛艦隊旗艦

ガメリカ海軍アーネスト・キング大將は極秘暗号文を受け取り、山

本提督率いる右翼艦隊がまんまとガメリカ海軍の欺瞞情報によって動いたことを知る。

まあ遅かれ早かれ右翼艦隊は動いたであろうとキングは思っていた。ジャミングによる通信妨害と、右翼艦隊の攻撃の要である田中提督及び軍でも良識派であり若手のストッパーとして機能している近藤提督を失えば右翼艦隊の運営に支障をきたす。

それに唯でさえ連戦連勝で浮かれている日本軍艦隊が、ここ一番という所で敗北すればその衝撃は計り知れず必ず日本軍のみならず日本国本土も動揺し、占領された植民地でゲリラ活動もやり易くなる。だが、その為には一時的に連合艦隊司令部を麻痺させる必要がある。

あの東郷が生きている限り、此度の敗北でもそれ程動揺は起こらないはずだ。

逆に言えば、奴さえ何とかする事が出来れば……………。

連合艦隊旗艦長門艦橋

「東郷長官！！右翼艦隊後方より敵艦隊出現。ジャミングにより詳細は不明ですが熱源から大型戦艦四、巡洋艦八の艦隊が真っ直ぐこ

こちらに突っ込んできます!!」

オペレーターの緊張した声に真っ先に反応したのは東郷長官の右腕、秋山参謀だ。

「っ!?!まさか敵はこれを狙って。直に迎撃を開始」

「駄目です、敵艦の速度が速すぎます。駆逐艦以上の早さです!!」

「そんな馬鹿な!!」

秋山の命令も空しく、敵の驚くべき速度にあっという間に迎撃の態勢が整わない日本軍中央を右斜め後方から決るようにガメリカ艦隊が切り込む。

「狙いはこの長門だ。中央に艦艇を集め防衛陣を敷いて時間を稼ぐ。突破された艦艇は直さま再編し敵の後方を突き持って前後で挟撃する。急げ」

東郷長官は敵の狙いを見抜き、旗艦を囷とすることで突入してきたガメリカ艦隊の撃滅を図るが、

ガメリカ突入艦隊旗艦アイオワ級アイオワ

ガメリカが誇る新型戦艦アイオワ級は火力速度共に日本軍の戦艦を圧倒していた。

特にソフト面を重視するガメリカでは新型のレーダーと連動したレーダー射撃で日本軍よりも優れた命中精度及び射程を誇っている。

日本軍旗艦長門と比べても、高速空母に付いて行ける速度を誇るアイオワに長門は防御力と旗艦としての通信、索敵において若干上回ってはいるが所詮一世代前の戦艦。

単艦での性能を比べればその差は明らかとなり、まあ安定性に欠くという点に目を瞑れば総合力としてはアイオワ級に軍配が上がる。

そのアイオワ級が建造された四隻全てが投入され、日本軍艦隊は射程に入る前に次々とアイオワ級の正確な射撃の前に打ち減らされ、更に今回の突入様にガメリ力艦艇の全てに旧式ながら使い捨てのブースターを外付けし戦艦が持ちこたえられる強度ギリギリの速度で日本軍をあっと言う間に後方に置き去りにしていく。

その姿を艦橋から見ていたウィリアム・ハルゼー提督は日本軍を蹴散らしながら御決まりのあのセリフを放ち、乗員の士気を高めている。

「ジャップを殺せ、ジャップを殺せ、もっとあの黄色いサルを殺せ
！！」

パールハーバーでの恨みを忘れられないハルゼーは元々日本人に対して嫌悪感を抱いてはいたが、それを機に日本人を憎悪し今回の作戦に真っ先に志願した。

リメンバーパールハーバー

それが初期の奇襲で敗北したガメリカ太平洋艦隊将兵の合言葉となっている。

そしてハルゼーはパールハーバー奇襲の計画者にしてその実際に作

戦指揮に当たった東郷毅を自らの手で討ち取る為に今回の作戦に参加しているのだ。

そして遂に、ハルゼーの前に東郷が乗る長門が現われる。

「見つけたぞトウゴウ！！全艦長門に砲火を集中、ここで一気に奴を討つ」

ハルゼーの命令と共に十二隻もの戦艦からのレーザーやミサイルが長門に浴びせかけられる。

そしてハルゼーが仕留めたと思ったあと、彼は直に我目を疑うこととなる。

そこには長門はおろか周りの艦艇を丸ごと包む巨大なバリアーが張られ、それによってハルゼーたちの攻撃は全て防がれていたのだ。

「何だアレは！！こんな話は聞いていないぞ」

「ハルゼー提督！！後方から日本軍艦隊が」

東郷の命令により突破された艦隊は直に追う様な事はせず、体勢を立て直し退路を塞ぐようにしてハルゼー艦隊の後方より迫る。

「クソっここまでか」

前方の長門は謎の巨大バリアーで攻撃を尽く無力化され、後方からはまるで羊の群れを追い詰める狼のように日本軍艦隊が迫り、絵に描いたような挟撃の体制をとらされてしまう。

ハルゼーは一転して不利を悟り、再度外付けブースターの点火を命じ正面の長門を突破するよう指示を出す。

流石に逃しまじと長門も砲撃を加えるが、突然の攻撃で陣形を崩され満足な火線を形成する事が出来ず、むざむざ突破を許してしまう。

それでも擦れ違いザマに巡洋艦を一隻沈めている辺り、長門の砲術仕官の腕は確かなものだ。

結果としては、ハルゼーは千載一遇のチャンスを逃す結果となったが、突然の奇襲で連合艦隊首脳部の混乱には成功し、キングとしては作戦の成果に概ね満足していた。

右翼艦隊を率いる山本提督は途中で近藤艦隊と合流し、当初の目的どおり田中艦隊を発見する事が出来たが、既に敵は去り後に残されたのは脆くも宇宙のデブリと化した田中艦隊の残骸だけであった。

田中艦隊の残骸から生存者を救出し、遺体を収容した山本艦隊は自分達のいない間に本陣が敵の攻撃されたと知って歯噛みする。

救助された田中提督も傷が深く即刻病院船に乗せられ本国へと送られ、また生き残った将兵も軒並み後方送りとなった。

田中艦隊の独断を許し貴重な戦力を失ったばかりか本陣までも危険に晒し、右翼艦隊を預かる宿将山本無限提督の面目が丸つぶれとなつてしまった。

連合艦隊旗艦長門

その艦橋に東郷長官と秋山参謀は沈痛な面持ちで立っていた。

目の前には白装束を身に纏い正座し頭を下げた山本無限提督との間には帝から賜れた短刀が置かれている。

「今回の失態は言い訳はしない。もう俺も年だ責任を取るのは唯のガラクタになつた老兵一人で十分だろう」

山本提督の真剣な表情に、本気で言っているのだと秋山は気付いていた。

ここで自分が山本提督に非はないと言うことは出来る。

実際東郷長官は山本提督の行動を許可していたし万が一に備えて金

剛級高速戦艦を二隻も残していた。

一刻を争う中、貴重な戦力を削ってまで味方を助けようとした山本提督を誰が責められよう。

それに思ったより本隊の被害は少なくこの長門も（勝手に乗り込んでいた東郷の娘真希の超能力のお陰だが）無傷ですんだ。

今更事を荒立たせたくはないと、誰しもが考えていた。

だが、それを言っても山本提督のプライドを更に傷つけるだけだと東郷長官に言われ、秋山は何も言い出せないまま東郷の判断を待つ。

暫く無言であつた東郷だが遂にその重い口を開き……。

ガメリカ海軍は連敗続きの中勝ち取った勝利に沸いていた。

敵旗艦を撃沈こそ出来なかったものの、敵の有力な提督の一人を負傷させ更に敵の凡そ一個艦隊を無傷で全滅させた事が大きく、日本軍は建て直しに相当の時間を要するだろうと予想された。

しかしキング提督は気になる点がある。

ハルゼー艦隊の攻撃を防いだ謎の巨大バリアー。

間違はなく東郷の娘でありこの世界の鍵の一人である東郷真希の存在が予想される。

別に相手が女子供だからと言って手を緩める気はないが、それでもやはり一個人としては子供が軍艦に乗っているというのは気持ちがいいものではない。

いまさら原作に対して突っ込みや愚痴をいっても仕方がないがそれでも個人的一般的倫理観に当て嵌めれば矢張りどうしても、という気持ちになってしまうのは仕方がない。

一頻り悩んだところで、キングは頭を切り替え次の一手を打つ事にする。

今回の作戦でしばらくは動けない連合艦隊からイニシアチブを奪い返すいい機会だ。

それに東郷貴下の提督のうち最も厄介な一人がいなくなった今を置いて他に無い。

そしてキングは次の目標を柴神が率いる左翼艦隊へと定める。

IF10

ガメリカ共和国カナダ。

ノイマンの秘密研究所で極秘裏に研究されたCOREの一体が突如姿を晦ます。

研究員が気付いたところで周囲から隔離された研究所の中で逃げ場はないと高をくくり、そのまま放置される。

ここにもし仮にドロシー・ノイマンがいたら直にでも保安員の総力を挙げて搜索させただろうが、若草会の定例会議に珍しく出席していたため、彼女の耳の届く事がなく事件は捨て置かれた。

ハワイ星域

ガメリカ海軍の謀略によって戦力再編を行わざるを得ない日本軍連合艦隊は日本軍の橋頭堡が置かれているミッドウェー宙域まで後退し艦隊の建て直しを図っている。

日本軍は大戦勃発から連戦連勝を続けているが、それは東郷を含め一部の優秀な提督たちに支えられている為でありそれ以外の将兵、

特に副官や参謀クラスとなるとどうしても二線級以下のものしかないのが日本軍の辛い所だ。

海軍も必死に仕官教育を行ってはいるが、一人前の軍人を育て上げるのは一年や二年では到底不可能な事であり、人材不足が常に頭の上にあるのが日本軍の弱みなのだ。

その日本海軍をして常勝軍とならしめているのは、日本海軍司令長官である東郷毅大将の戦術眼と貴下の提督達の日本軍で例外的な優秀さ、それによっていままで日本軍は支えられてきたと言ってもいい。

キングは、日本軍を支えるその屋台骨の一つを崩したに過ぎない。

だが、今でさえ内外に戦線を抱え余裕がない日本軍が、東郷を支える将星の一つを落すということは日本海軍がその土台から崩れ落ちることと同義である。

あまりに個人の能力に頼る、いや頼らざるお得不い日本軍はハワイ攻略戦の中確実に追い詰められている。

さらにキング提督は日本軍をより追い詰める為、日本軍が知らない航路を使い戦線を迂回した艦隊で連合艦隊の後方を脅かし始めた。

マイクロネシアからの補給船団を襲撃し、時にマイクロネシア星域にまで姿を現し、前線の将兵や後方の市民達の間でも不安が高まる。

無論東郷もただ見ているわけではなく船団に護衛を付けたりはするが、その護衛線の絶対数が足らず、前線に時たま出没するガメリカ海軍の小規模な艦隊との小競り合いが何時大規模な海戦に発展する

か分からない以上、前線からこれ以上の戦力を割くことはどうしても出来なかった。

ハワイ防衛司令部

「失礼します」

司令室に入り敬礼するドゥーリットル提督。

結婚して海軍を退役するも離婚して空母艦隊の提督なんかをやっている世にも珍しいバツイチ提督だ。

日本海軍のとある女性提督も最近旦那の浮気が原因で離婚したとかしないとかあったが・・・メタだが普通にアレはないんじゃないかなと個人的に思ってしまうイベントだ。

取り合えず敬礼するドゥーリットル提督に答礼し、立ったままで次の命令を下す。

「ドゥーリットル提督。貴官は貴下の艦隊を率い極秘裏に日本軍前線を突破し更にマイクロネシアも通過し日本星域に到達後日本本星を爆撃せよ。これは非常に危険且つ困難な任務だろうがどうだろう？やってくれるかな」

上位者権限で強制することもできるが、敢てキングは彼女の意思を尊重する形を見せた。

「いえ。このような重大な任務は私をおいて他に適任者など有り得ません。是非とも私にやらせてください」

その答えに満足したキングは最後にこう言った。

「この作戦が成功すれば君は英雄だ。作戦成功後には本国で一週間の休養と特別手当を取れるよう手配しておく。では朗報を期待する」
手当のところでドゥーリットルの目が明らかに輝いたのをキングは見逃さなかった。

彼女は離婚した後軍に戻った理由の大部分が職場でいい男を見つけ、今度こそ幸せな家庭を築く為なのだが……。少々年齢があれなので中々いい相手が見付からない。

まあここで功績を挙げれば、俄然有名になり彼女に言い寄る男も増えるし、特別手当を使って結婚資金にするもよし。

そんなことを頭の中で考えているのだろうと、キングは思いつつ嬉しそうに退出したドゥーリットル提督の後ろ姿に少なからず不安を抱いてしまうのだった。

赤い大帝国・・・。（前書き）

BGM: <http://www.youtube.com/watch?v=a0g1MTsYZSE>

ボラー連邦のテーマでも可

AARみたいな書き方をしますので、読み慣れないかもしれません。

まあ賢明な同志諸君はもうお気づきだろうが、これは作者のお遊びで書かれたものだ。

最近感想がないのをいい事に、誰も見ていない小説で好き勝手やって悦に浸るオナ　ーだからこれ以上読み進めるのはお勧めしない。

いいかな。

さて、改めまして。

同志諸君、私がヨシフ・スターリンだ。

大帝国の世界風に言うならソビエトの書記長だな。

カテーリン？だれだそいつ。まあなんだか赤い宝石を手で振りかざして何事かわめていた小娘ならベリヤが”丁重に”自分の部屋に連れ込んだぞ。

一緒にいた金髪小娘も連れて行ったからまあ暫くは奴の部屋から二重の悲鳴が聞こえるかも知れないな。

だが決して部屋を覗こうとは考えてはいかんぞ。

同志との約束だ。

話を戻そう。

現在わがソビエト連邦（国名を変えました）の状況だが、まずは経済関係とか政治とか研究とかそんなもん大帝国には入ってないから全て無視。

一番重要な、というかこれしかない外交（イベント選択）と軍事だな。

外交は現在この世界で言うガメリカとエイリスとは国交が断絶状態。生意気な中帝国とは国境を接して少しだけ貿易しておるが、いずれは赤くあの傲慢案シユウの小僧から必ずや人民を解放してみせるキリッ。

ポッポーランド、北欧とは国境、この世界ではワープゲート航路だな。

この二カ国と欧州で接しておるが、どちらも我ソビエトの先進的文化と開放を受け入れようとはしない。

やはりこれは資本主義の権化たるガメリカと劣悪な帝国主義の親玉であるエイリス帝国の連中のせいだ。

だが、必ずやこの二カ国の人民を解放してみせるぞ。

ついでに開放のあかつきには、両国首脳にはシベリアでのヴァカンスを楽しんでもらう予定だ。

はははっ、なに遠慮することはない。

我ソビエトは慈悲深いのだ。

たとえ資本主義の麻薬に犯されいようと、シベリアの空気を吸えばきつと革命的思想に芽生えてくれるはずだ。

次に我ソビエト人民最大の敵であるファンシズム？

なんだか字が違うような気がするが、ドクツ第三帝国だ。

奴等は世界統一を掲げ愚かにもドクツ国民が他の全てに勝るという優勢人類説を唱えており（捏造です）全労働者の解放者として当然許されるものではない。

恐らく、欧州の労働者を解放するさいの最大の壁として立ちほだかるだろう。

次にまあこの世界の主人公側だな。

日本帝国、帝はベリヤが頂くようです以上。

あとその他 e t c

次に軍事だが、これが最も重要な。

？：それについては私が説明します。

おお、同志ジューコフ！！

ジューコフ：偉大なるソビエト連邦元帥ジューコフです。

スターリン：因みに史実でも大帝国でも好きなほうのグラを想像してくれ。

ジェ：では早速同志閣下。現在の軍の状況を説明させていただきます。（これ以後話している人の名前は簡略化します）

ス：うむ。

ジェ：現在我ソビエト連邦は大帝国風に言うと第二世代まで開発が完了しています。

ジェ：また多くの旧式艦艇も抱え一見すると船の数は世界最大ですが戦力としてはお寒い限りです。

ス：ううむ。早急に解決しなければいけない問題だな。

ジェ：ただ巨大戦艦ソビエツキー・ソユーズを三隻保有していますので、戦艦だけを見ればガメリカのアイオワと渡り合えます。

ジェ：現在軍のほうでは旧式艦艇を解体して資源に戻し、無駄な出費を省きます。

ジェ：現在の状況は比較的安定していますし、軍拡は統一宇宙暦940〜942年初頭に行うことを検討しています。

ス：まで、そうすると他にやることはないのか？

ジェ：暫くはイベントで国力を増やして資源と資金を溜めることですな。

ス：わし、一番偉いのにする事ない（．．．）

ベリヤ：いやーロリはやっぱ最高だな。特に初物は締りが断然いいー！！

ス：ゲゲ！？ベリヤ。

ジェ：ちっ、生きてたのか。あのまま腹上死してればよかったのに。

ベ：折角の初登場なのになんだか邪険に扱われていますね。

ス&ジェ：そりゃベリヤだから。

ベ：まあコントはいいとして、今回私が出てきたのはスパイ対策です。

ベ：スパイがいるだけでソビエトの情報が他国に漏れて非常に厄介です。

ベ：その為、私が新たに就任したKGBを駆使し、スパイを発見したい”開放”しております。

ス：うむ、大変結構。やはり同じ人間どうし、悪戯に殺すのはやっぱりよくないな。

ジエ：どの口が言うだか（ボソリ

ベ：（後でこいつは肅清リストに加えておかねば。同志閣下にもそれとなく後注進しよう。閣下亡き後はの権力闘争で邪魔になりそうだし）

ス：（とかなんとか上の二人とも考えているのだろうか。いまは二人とも使えるが、事がすんだらコルホーズにでも送るか）

ベ：取り合えずスパイ対策は以上です。

ス：まあ今日はここまでにしよう。因みに我ソビエトの目標は全世界の労働者の解放と目指せボラー連邦だ。

ジエ&ベ：同志閣下、全力を尽くさせていただきます。

次回は・・・・・・・・・・ないかも。

赤い大帝国・・・。（後書き）

カテーリンとミーシャの最後はCORE編の二人を思い浮かべてください。大体あれみたいな状況です。

赤い石は同志閣下がそこらへんに捨てました（爆

その日、それは突如として現われた。

日本の防衛線をすり抜けたドゥーリットル提督率いる空母艦隊は日本帝国主星日本を爆撃し、日本が知らない星域。

ベーリング星域へとまんまと逃れ、そのままガメラ力本土へと帰還した。

日本では今次大戦で始めて自分達の本星に攻撃を受け、慌てふためき前線にいる東郷長官の怠慢として責任を追及する声が高まったが。

工業地帯を爆撃されたが、被害はすくなくったことから帝は東郷に責任は問わず、しかし一刻も早く日本の絶対防衛線構築を急ぐ必要性に駆られ（というよりも周囲のものが東郷の責任を問わない代わりとして）早急にハワイのガメラ力艦隊撃滅を命令した。

陣容が整わぬ東郷率いる連合艦隊だが、帝からの命令とあつては断ることなど出来ず、一週間ほどの準備期間の後、ガメラ力海軍ハワイ本拠地パールハーバー星へと攻撃を開始した。

ハワイ攻略戦初期の消耗から回復していないながらも日本軍の戦意は高く、第一第二航空艦隊から出撃した攻撃隊総勢八十機がガメラ力海軍へと襲いかかる。

ガメラ力海軍

「とうとう我慢できずに巢穴から出てきたか。事前の作戦通り敵の第一波を凌ぎ次第返して敵の航空艦隊撃滅に打って出る」

キング提督指揮の下ガメリカ艦隊は頑強に抵抗し、特に攻撃隊の第一目標であったハワイレンジャー率いる空母艦隊には最新の防空艦が配備され攻撃隊を寄せ付けず、一次攻撃隊の攻撃は然したる成果を上げぬまま引き上げていった。

「よし、耐え切ったな。恐らく敵の第二次攻撃隊も直に来るだろうが、どっこいそうはいかない。こちらのレーダーにも貴様等の姿がくつきりと写っているぞ」

ガメリカ海軍のレーダー性能はこの世界一の精度と範囲を持っている。

特にキングが海軍内で熱心に開発と研究を要請した結果、ガメリカのレーダー技術は飛躍的に向上し、他国の二世代先に行く技術を持つに至った。

「直に送り狼を出撃させる。奴等に真の航空戦とは何たるかを教育してやる」

「ハルゼー提督、スプルアンス提督、ルメール提督、に日本軍航空艦隊の位置を通達」

次々と航空母艦からガメリカ攻撃機が飛び立ち、漆黒の宇宙空間で編隊を組み吸い込まれるように宇宙の彼方へと飛び立つ。

その様子を最後まで確認する事無く、キングは更に次の指示を下す。

「先の海戦で日本海軍の雷撃能力は落ちている。敵は恐れるに足らず、全艦出撃せよ」

ガメリカ海軍は敢て日本海軍お得意の砲撃戦を挑みかかるが、キングには勝てはしなくても負けることは無い策がある。

「新型のモンタナ級のお披露目だ。存分に楽しんでもらいたいものだ」

日本海軍連合艦隊

「くつ、第一次攻撃隊が帰艦する後をつけて第一第二航空艦隊に襲撃をかけるとは。東郷長官、報告では幸い空母の撃沈艦はありませんが、全艦甲板を損傷し暫くは離発着は不可能です」

秋山参謀が小澤艦隊の被害報告を簡単に纏めながら東郷に連絡する。

「幸い第二次攻撃隊の出撃を早めていたからよかったが。発艦中を狙われたら目も当てられなかったな」

東郷は旗艦長門の艦橋で立ったまま腕を組み、スクリーンに映る両軍の戦況を見ながら敵の次の一手を考えた。

ここまで容易周到に準備してきたことだ、まだ何か手があるはずだ。こちらは予備戦力まで投入しているが、敵にはまだ余力があると見ていい。

と、なればどのタイミングで投入するか……。

「ガメリ力艦隊に動きがあります！！これは・・・ガメリ力艦隊三列縦陣を組艦隊との彼我の距離を詰めていきます」

「東郷長官これは！！」

「ああ、どうやら策も何もなく真つ向からの殴り合いをご希望のようだ。全艦砲撃準備、こちらも単列縦陣を組んで対抗する」

「敵に同航戦を挑むのですか！？少々危険ではありませんか。敵に新型の戦艦が配備されたとの情報もありますし」

「いや、ここは敢て敵の挑発に乗ることにしよう。どの道航空艦隊が当てにできない以上砲撃戦にはいつか移るつもりだった。それに、ここで引いては士気にもかかわる」

「分かりました。それでは長門も前に出しましょう、指揮官が後方にては示しがつきません」

「お、お前も段々分かってきたな」

東郷は戦闘中というなか、中々染まってきた相方の成長？ぶりに少しだけ嬉しい気持ちになった。

ガメリ力艦隊と日本連合艦隊は航空戦から互いに縦陣を組砲撃戦へ

と移行する。

まず最初に砲撃したのはやはりガメリカ艦隊だ。

モンタナ級の主砲の射程もさることながら、レーダーの性能の差がここにきて現われた。

レーダー観測と連動したガメリカ艦隊の砲撃は、高い精度を誇り今だ射程にガメリカ艦隊を収めていない日本軍艦隊を一方的に打撃を与える。

「こちらが射程にまだ入っていないのに砲撃するとは。流石にガメリカの科学力は侮れませんね」

「今は耐え忍ぶのだ。勝機はある」

そしてその勝機は訪れた。

攻撃を受ける前に出撃した第二次攻撃隊は帰る母艦をなくし途方にくれていたが、運よく攻撃隊の一部隊がガメリカ艦隊を発見しどうせこのまま死ぬならと行き掛けの駄賃とばかりに悠然と襲い掛かった。

防空艦は空母艦隊に割り振った為、攻撃隊を迎撃する前に対空砲火を潜り抜けた日本軍機の雷撃を受け、ガメリカ海軍は回避行動をとるため陣形を乱してしまう。

日本艦隊との決戦を前にして、陣形が乱れてしまったキング提督は敵の攻撃隊の存在を失念していたことの迂闊さを悔やみながら艦隊の陣形の立て直しを図るが、その間に十分距離を詰めた日本連合艦

隊が鬱憤を晴らすかのように砲撃を開始する。

が、キング提督はまず陣形を整えることを優先し反撃を最小限度に収めつつ素早く貴下の艦隊を纏め上げるのを見ると、彼が行ってきた厳しい訓練と提督達の実力の賜物だ。

日本連合艦隊は予想より早く陣形を整えたガメラ力艦隊の精強さに改めて驚きをもって畏怖を覚えるがそれで砲撃の手が緩まるようなことは無い。

寧ろ俄然闘志を燃やしガメラ力艦隊にレーザーとミサイルの砲撃を浴びせかける。

「モンタナ、アイオワ級の全艦を前に出せ。攻撃を受け止めさせろ」

ガメラ力海軍が誇る怪物、モンタナ級が艦隊の先頭に出てきて悠然と上下甲板の十五門以上の砲門を連合艦隊旗艦長門へと向ける。

「敵大型戦艦から砲撃来ます！！」

「回避！！反撃を敵大型戦艦に集中」

しかしレーダー観測と連動した砲撃を完全に回避することは出来ず旗艦に被弾を許してしまう。

直撃の衝撃で今までにないほど長門は揺れ、乗員が思わず椅子から飛び出されそうになる。

「くっ、噂のモンタナ級の46センチ砲か。本国で建造が進んでいる大和級以上の火力とは、恐れ入る」

「感心している場合ではありませんよ。今の一撃でこちらもかなりのダメージを負いました。艦隊の被害も馬鹿には出来ません」

「田中のやつがいれば真っ先に突撃するだろうが、いない奴のことを思っても仕方がないか。まずはモンタナをしとめる、デーニッツ提督には危険だが田中の代わりをやってもらおう」

旗艦長門と戦列を整えた戦艦計十二隻からなる砲撃がモンタナに集中され巨大な船体が災いしモンタナは多数の被弾を許してしまう。

だがしかし・・・。

「馬鹿目、モンタナが唯の戦艦と思うな。船が大型化した分バリアーを張れるように設計されているのだ。あの程度の砲撃などどうということはない」

モンタナの艦長はそう豪語し、実際十発以上もの着弾を受けるもバリアーによって減衰されたレーザー程度では、モンタナの分厚い装甲を破ることは出来ない。

モンタナ級一隻で戦艦一個戦隊に相当する火力だが、この戦場には四隻のモンタナ級が存在する。

果たして日本軍はどうやってこの怪物たちを打ち破るのだろうか？

モンタナ級四隻の火力に苦戦する日本連合艦隊だが、長門と同等の火力を持つアイオワ級も砲撃に参加し海戦は混戦の向きを見せる。

「よし、十分距離を詰めたが敵は雷撃戦力が不足している。日本軍のロングランスは恐れることはない。逆にこちらから仕掛けるぞ」

ガメリカ艦隊から飛び出すようにブラッドレイ提督率いる雷撃戦隊が日本軍に襲い掛かる。

迎撃しようにもアイオワ、モンタナの相手に他にかまっていられない日本軍は満足な迎撃も出来ず雷撃戦隊の接近を許してしまう。

「不味い、東郷長官を守れ！！本艦を敵との間に割り込ませる」

柴神さまは自らの危険を顧みず旗艦柴犬御殿を前に進める。

「ブラッドレイ提督、敵の戦艦が割り込んできます」

「へっ、丁度いい。全艦増速、まずはあの目障りな戦艦を血祭りに上げる！！」

ブラッドレイ提督率いる雷撃戦隊から放たれた鉄鋼弾を身を挺して受け止めた柴犬御殿はあえなく沈没の憂目に会つ。

だが、柴神さまが雷撃戦隊を引きつけたお陰で東郷長官は反撃の一手にでる。

「デーニッツ提督、今だ！！」

戦場を迂回し、亜空間に身を潜めていたデーニッツ提督率いるドクト潜水艦隊が亜空間から通常空間へと戻りモンタナ級四隻に向け至近距離から鉄鋼弾とミサイルを叩き込む。

流石のモンタナ級も至近距離からの不意打ちには対抗できず、巨大な船体は今回も災いして潜水艦からの雷撃が殆ど当たってしまう。

特に先頭を進んでいたモンタナ級一番艦モンタナは艦橋と機関に直撃を受け轟沈し、他のオハイオ、メイン、ニューハンプシャー、もそれぞれ被弾し戦闘力を減衰させていた。

「ソナー員は何をやっていた！！敵の雷撃を許すとは、ええい被弾したモンタナ級三隻を下げる。アイオワを前面に押し出して敵旗艦に砲撃を集中、それと対潜駆逐艦戦隊で邪魔なドクト潜水艦隊を排除しろ」

キング提督は先程まで優位に進んでいた海戦が、敵の反撃により状況を覆されてしまったことに歯噛みするが。

苛立つ心を抑えまだアイオワが健在だと自分に言い聞かせるようにして平静さを保とうとした。

方や東郷も、モンタナ級を退けたものの相手にはまだ四隻全てが健在のアイオワがある。

長門と同等の火力と、巡洋艦並みの速力を誇るアイオワ級相手にモンタナ級との砲撃戦で主要な戦艦の殆どが被弾した今、依然状況としては予断を許さない。

「敵艦隊増速。これは、我が方の前に出ようとしています」

「恐らく我々の頭を押さえるつもりでなのでしょう。恐らく敵は日本海海戦の再現をするつもりなのでしょう」

「右舷回頭、ガメリ力艦隊の戦列に突っ込め」

東郷長官の指示のもと、連合艦隊は旗艦長門を先頭にガメリ力艦隊へと突撃していく。

「ほう、敢て乱戦に持ち込むか。ブラッドレイ提督を下げさせる、奴等が食いつつ前に頭を潰す」

激しい砲撃が旗艦長門に集中し、巧みな操艦で砲撃を回避するも圧倒的火力を前に被弾を許してしまう。

バリア艦も船足が遅く艦隊の盾としての役目を果たす事が出来ず、後方に置き去りにされる。

互いに防御を無視した真つ向からの殴り合いは両軍とも多くの被害を受けるも、奇跡的に沈没艦はなくしかし何時戦況が傾くかも知れない状況が続く。

だが、結局この日はお互いに決着がつくことはなかった。

ガメリカ軍が企図した砲撃戦から敵戦力を暫減しつつも別海域へと誘導し日を挟んで残存航空戦力で日本軍艦隊を撃滅するはずであったが、海戦は戦列に割り込んだ日本軍艦隊によりガメリカ艦隊が分断される。

東郷長官は突破して直に回頭し、後方を包囲殲滅しようとするも、後方で待機していた予備戦力を投入し退路を確保したガメリカ艦隊は包囲網から離脱し。

分断された先鋒は包囲網を脱した艦隊へと合流していった。

包囲殲滅の好機を失った連合艦隊は、これ以上の戦闘は連合艦隊の被害が大き過ぎると東郷長官は撤退を指示し。

ガメリカ艦隊もまた、包囲殲滅の危機は脱したものの戦列は乱れ効果的な反撃は望むべくもない。

結果双方とも互いに牽制しつつも後退し、最終的には両軍とも痛み分けて戦闘を終了した。

戦術的には日本軍艦隊はガメリカ艦隊に打撃を与えるもハワイを攻略することは適わず、ガメリカ艦隊も当初のアイオワ、モンタナ全艦が被弾し暫くドッグでの修理が必要なほどの損害を受けてしまう。

だが、戦略的には目標を達成できなかった日本に対し、これを撃退したガメリカ海軍は一応の勝利を収めたと言ってもよい。

ハワイ攻略戦開始から既に十日が経過していた。

IF12（後書き）

次回COREの反乱です。

ガメリ力戦も終盤となり、ドゥービル提督もやっと出てきます。

このIFもCORE編が終わり次第完結となります。

それまで何とかやる気を維持しつつ書いていきたいと思います。

IF13

先の艦対戦、通称ハワイ沖開戦より数えて四日。

遂にガメラリカ本国からの増援艦隊がハワイにその姿を表して・・・
・・居なかった。

ハワイ総司令部

「何だと！！それは本当かドゥービル提督」

「ああ、残念だが本当だ。だからこうして態々長距離通信なんてもんを使ってお前と話しているんだ」

モニターに映るドゥービル提督の顔は目の色に隈をためておりそれだけ自体が逼迫していることを想像させる。

「しかしその”CORE”という連中は何物なんだ？カナダからワシントンへの秘密のワープコードを知っていて尚且つガメラリカの急所に尽く奇襲をかけるとは・・・」

事の発端はカナダのノイマン研究所が突如として消息を絶ち、その調査の為に小規模の艦隊が派遣されたところ正体不明のガメラリカ軍に攻撃を受けたらしい。

ガメラリカ国内に乗り込んだテロリストか破壊工作員の可能性があるとしてカナダに艦隊が派遣されたが、そこを狙うようにして今度は

USJ、シカゴXでも謎の艦隊が出没し無差別に攻撃を加えた。

事態を憂慮したガメリカ政府が本格的に討伐艦隊を派遣して、首都星の隙を突かれ敵の本隊の侵攻を許してしまった。

本土星域を制圧した奴等は自分達をCOREと呼び無差別な破壊と殺戮とを目的とする集団だと宣言した。

と同時に自分たちがガメリカの手によって生み出されたことも同時に世界中に暴露しガメリカの国内は勿論各国間でも同様が広がっている。

「で、どうする？正直いま政府は機能停止状態だ。一応中核州は何とか保持しているが補給の宛ても無いんじゃない？正直つらい。それと本星域から脱出してきた難民の受け入れもどうするか」

「自分達の自業自得でこうなったのも同然だからな。他国は難民の受け入れなどせんだろうし、逆にこの機に浸け込んで来るやもしれん」

正直ガメリカの首都星を押さえられたのは痛いを通り越して致命的ともいえる。

あそこは首都を守る要塞に加えガメリカいや世界経済の中心地だ。

今次大戦で最も利益を得た資本家達が逃げる間も無く虐殺され四大財閥首脳部も軒並み行方不明。

正直ガメリカは詰みの状態だ。

連中、COREは五人いれば戦艦を動かすくらい容易らしい。

自分達に賛同する犯罪者やら民間人やらを片っ端からCOREにしガメリカ最大の造船所であるノーフォーク海軍造船所をフル稼働させて戦力を増強させている。

この分ではそう遠くない内にガメリカという国家は崩壊する。

いや既にし始めていると言っている。

格州の通信量が異常なほど上昇し州軍の囲い込みや資源の買い溜め等、最早ガメリカという国家は自国民にさえ見限られている。

「兎に角、最低でも一度直接会う必要があるな。その分だと統合軍司令部も壊滅だろう、各地で独自に反撃している提督たちと連携を取る必要がある」

「ああ、その通りだ。一応難民は国内において置けないからアマゾンの方に移している。難民の移動が完了するまでの三ヶ月間はシカゴで粘れるがカナダのCOREが南下して来たらどうしようもない」

「分かった。こちらも全力を尽くそう」

キング提督はドゥービル提督と通信を終えこれからどうするか、暫く考えを巡らせたが是しかないと結局最初の結論に至る。

キング提督は通信を開き提督たちを会議室に集めるよう指示を出した。

「全く、そうそう出来すぎではないのか？これ」

この先を思うとそう眩かざるお得不いキングであった。

日本軍連合艦隊旗艦長門の艦橋で海軍司令長官東郷毅は驚くべき報告を聞いていた。

「何？ガメリカ艦隊がハワイを放棄して撤退しただと」

長門の艦橋の艦長席に座って苦いコーヒーを旨そうに飲んでいた東郷は、秋山の報告に眉をしかめた。

「はい、偵察に出ていた船が証拠の写真と通信の解析から偽装ではなく本当に撤退した事が判明しています」

秋山は東郷に写真付きの資料とここ最近に暗号解析文を東郷に手渡し、自身もまた通りかかった女性軍人にコーヒーを頼む。

「どうにも腑に落ちんな。ここ最近本国との通信も中々出来なかったからな」

そう、東郷たち連合艦隊はここ最近ガメリカ軍が頻繁に通信をやり取りすることから大きな作戦が近いと睨み、無線封鎖をして位置を特定させないようにしていたのだ。

そのため、ここ最近の世界情勢に疎くなってしまったのも仕方がない。

「いかが致しますか？東郷長官」

女性軍人が持ってきたコーヒーを受け取った秋山が東郷に指示を仰

ぐ。

「どちらにしろ、敵がない事はいいことだ。この段階で罫を仕掛けるにしてもおかしい、今のうちにハワイを占領しよう」

「分かりました。ではそのようにと」

東郷と秋山が話し合っているその幾許か前、ハワイに展開する艦隊はひっそりとガメリカ本土へ向け撤退し始めていた。

目の前の日本軍と、背中にCOREという新たな敵を抱えたガメリカ海軍は増援も見込めない中ハワイを防衛する事は不可能と判断した。

更にCOREの反乱で将兵にも動揺が広がり士気が下がる一方だ。

提督たちとこれ等のことを話し合ったキング提督は独自の判断で撤退を決め、ハワイ住民達を伴いハワイから撤退を開始した。

日本軍に悟られぬよう無意味な通信文を飛び交わし欺瞞を施し、艦隊をハワイに悟られぬよう集結させた。

撤退する将兵の顔は暗く思い足取りで船に乗り込む。

ハワイ住民も本土の窮状を知ってはいるが、日本軍が迫り来る以上ハワイには残ってられない。

旗艦ニューヨークを殿に置き、ハワイを離れるガメリ力船団の後姿には往年のガメリ力艦隊の姿はなかった。

もしボラー連邦が大帝国の世界に来たら。（前書き）

もしボラー連邦が大帝国の世界に来たら、略してもしボラ。

普通に新しい小説のネタの試作品です。物量チートVS物量を書いてみたっただけ。それ以外に他意はない。決して幼女が率いる国家を苛めたいとか虐待したいなんてないんだかね！！

もしボラー連邦が大帝国の世界に来たら。

まだヤマトが現れずガルマン・ガミラス帝国も二重銀河の交差も起こっていないボラー連邦で、ある一つの事件が起きていた。

ボラー連邦边境。

ボラー連邦の苛烈な統治に反対する人々が幾度となく反乱をおこし常に動乱が続いている边境でついにボラー連邦と反乱軍との決戦が行われようとしていた。

反乱軍が目指すのはボラー連邦大艦隊に守られた機動要塞。

中央部の巨大な球体から枝分かれするように三つの球体が連結され葡萄のような形をした要塞から巨大な砲身が三門展開され反乱軍艦隊に向けられる。

「ブラックホール砲発射！！」

その声と共に、ボラー連邦が誇る機動要塞デスパーゼの主砲からブラックホール弾が発射され反乱軍艦隊を飲みこむ。

「ふはははははは、見たかこのデスパーゼの威力を。反乱軍など物の数ではないわ」

たった三発の砲撃で反乱軍艦隊は宇宙の塵と化し、残存艦隊はボラー連邦に逆らった見せしめとして皆殺しにされる。

「司令、疑似ブラックホール発生地点で異変が」

「何だと!？」

本来なら一発で絶大な威力を発揮するブラックホール砲を三門同時に発射した影響下疑似ブラックホール発生地点では時空が歪み本来ならば自然と修復されるはずが、奇跡とも言っていい確率で別世界への扉を開いてしまう。

「司令・・・・・・・・これは」

「直ぐにベムラーゼ首相閣下にご報告せねばならん。艦隊はそのまま待機して戒厳令を敷けこの事を外部に一切漏らすな」

要塞司令の厳命の下付近の宙域はすぐさま封鎖され、司令は冷や汗をかきながらベムラーゼ首相に通信をつないだ。

「何？それは本当か」

ベムラーゼ首相は不機嫌さを隠そうともせず、モニターに映る要塞司令は汗をぬぐいながら内心戦々恐々としていた。

「閣下如何いたしましたでしょうか？」

おずおずと要塞司令はそう尋ねるしかなかった。

「放置も出来ん。貴様の責任だ調査艦隊でも何でもいい処理しろ」

言外に出来なければどうなるかということを含ませた。

「わ、わかりました。直ぐにでも取りかかります」

通信がきれべムラーゼ首相はふんと鼻を鳴らした。

ハワイから取って返してガメラリ本土へと急行したキング提督はその足で各地で抵抗するガメラリ残存兵力を糾合しUSJに臨時の司令部を置き、ゲイツランド、シカゴXを絶対防衛線としてガメラリ残存艦隊の指揮を取った。

カナダ、ワシントンから毎日のように流れ着く難民を回収しつつの防衛線は悲惨さを極め、ガメラリ艦隊は休む暇もなく戦わされ消耗していく。

補給の宛てのない戦いで双方の戦力比率は開く一方、味方は補給も整備も補充も間に合わず足手まといの難民をどうするかで臨時司令部の面々は頭を悩ませた。

「諸君、このまま戦い続けてもジリ貧で何れ我々はおるか後方で怯える市民を皆殺しにされかねない」

キングは集まった緒提督に語りかける。

「我々はガメラリ海軍軍人だ。その目的は無辜の市民を守ることにある。よって何を犠牲にしても自由と市民とを守り抜く義務がある」

「残念だが今の戦力ではそれが難しい。だが例え国を捨てるような事があっても一時の苦渋に耐え再起を図る事が出来る」

「私は諸君等に今ある全戦力をもってガメラリ市民の南ガメラリ脱出を提案する」

その提案に並み居る提督たちがざわつくが皆このまま戦っても勝つ事は出来ないのは百も承知。

誰だって死にたくは無い、だが国家を捨ててまで命は惜しいものか？

「無論軍人である諸君等に国家を捨てる判断をするのは非常に難しいと思っている。だが忘れないで欲しい我々は軍人である前にガメリカの市民であることを、家に帰れば家族が居り、友人や、恋人や、人々の生活の中にあることを」

「そして何よりガメリカをガメリカたら占めているのは自由な市民であることだ。たとえ国家が滅びたとしても自由の旗印の下再び我々は再建する、そのために今は明日を生き延びねばならないのだ、頼むこのとおりだ」

暫く無言が続く会議室で一人が立ち上がってキングに敬礼をした。

それに習うかのように次々と部屋の中にいる提督たちが立ち上がって敬礼し、全員が立って敬礼したことでキングの瞳に思わず涙が浮かぶ。

「キング提督、我々は軍人です。ですが一人の市民でもあります。我々の一人一人自由な市民であると共に皆戦友です。我々の命貴方にお預けします」

「……すまない、諸君。だが約束しようこの中の誰一人として欠けさせない事を」

こうしてガメリカ残存艦隊の総力を挙げたガメリカ共和国最後の作戦が行われるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4514v/>

大帝国にもしあの提督がいたら.....。

2011年10月7日19時23分発行